

青木遺跡 II

(弥生～平安時代編)

国道431号道路改築事業(東林木バイパス)

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

第3分冊(奈良・平安時代)



2006年3月
島根県教育委員会

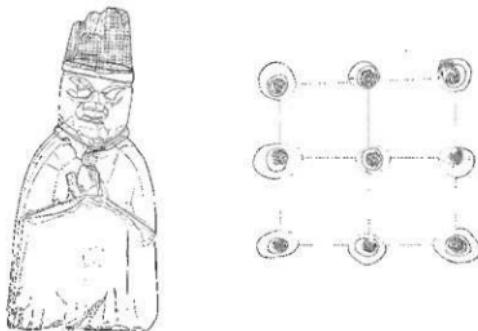
青木遺跡 II

(弥生～平安時代編)

国道431号道路改築事業（東林木バイパス）

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

第3分冊(奈良・平安時代)



2006年3月

島根県教育委員会

本文目次

第12章 成果の概要	(松尾)	1
第1節 基本層序と遺構面の概要		1
第2節 遺構の概要		3
第3節 遺物の概要		4
第13章 I区・遺構の詳細	(今岡)	11
第1節 建物遺構／礎石建物		11
第2節 建物遺構／掘立柱建物		24
第3節 右敷き井泉遺構 (SE01)		34
第4節 果実埋納土坑 (SX01)		54
第5節 木簡出土遺構		60
第6節 七坑状遺構		64
第7節 滝状・畠状遺構		67
第14章 IV区・遺構の詳細	(松尾)	79
第1節 建物遺構		79
第2節 方形貼石区画		111
第3節 上器溜まり遺構		128
第4節 木柱群		161
第5節 流路・右敷き遺構		166
第6節 井戸		183
第7節 土坑		187
第8節 新段階の遺構		191
第15章 遺物の詳細	(松尾)	203
第1節 須恵器		203
第2節 赤彩土師器		273
第3節 士師器煮炊具		284
第4節 施釉陶器・黒色土器		298
第5節 円面鏡・転用鏡		302
第6節 漆付着土器		325
第7節 製塙土器・手捏ね上器・その他土製品		341
第8節 土馬		346
第9節 金觸製品		353
第10節 銀治関連遺物		366
第11節 木製品		370
第16章 中世の遺構と遺物	(今岡)	457
第1節 III区の調査		457
第17章 理化学的分析結果		505
第1節 建物柱材・井戸材・神像の ¹⁴ C年代測定	(小林・坂本・春成)	505
第2節 柱材・木製品の樹種同定	(波多)	511
第3節 砂鉄の分析	(人澤・鈴木)	528
第18章 総括		535
第1節 塗丘墓・銅牌片と弥生時代の青木遺跡	(今岡)	535
第2節 奈良・平安時代の青木遺跡	(松尾)	547
第3節まとめ	(今岡)	605

挿図目次

第1図	基本層序模式図	1
第2図	IV区遺物解釈図模式図	6
第3図	I区全体図	6
第4図	IV区全体図	7
第5図	調査区全体図	8
第6図	SB04大断面図	14
第7図	SB05大断面図	15
第8図	SB05断面図	16
第9図	SB04・05開拓遺物実測図	21
第10図	SB05平面図・山上遺物実測図	26
第11図	SB16平面図	28
第12図	SB01・SB02平面図	28
第13図	SB03・柱列1・柱列2実測図	30
第14図	SE07・SE08実測図	31
第15図	SD16・SE01大断面図	32
第16図	SE01平面図	36
第17図	SE01実測図	37
第18図	SE01井手・特実測図	38
第19図	SE01遺物出土状況	39
第20図	SE01出土遺物大断面図	40
第21図	SX01実測図	51
第22図	SX01出土遺物実測図	55
第23図	SX10山土遺物実測図	58
第24図	SX50大断面図	61
第25図	SK01-04実測図	62
第26図	清野1実測図	65
第27図	清野2実測図	70
第28図	清野3実測図	71
第29図	SDG3・SB31平面図・出土遺物実測図	72
第30図	SDH9柱土遺物実測図	73
第31図	建物遺構の位置と名称	74
第32図	建物周辺の上層段式図	79
第33図	建物規模と柱材の樹種	80
第34図	建物遺構全体図	85
第35図	SB02実測図	86
第36図	SB02・SB04柱材実測図	87
第37図	SB03大断面図①	88
第38図	SB03実測図②	89
第39図	SB04実測図	90
第40図	SB05柱材実測図	91
第41図	SB05平面図	92
第42図	SB05断面図	93
第43図	各部の名称	111
第44図	方形貼石区画 等高線図	112
第45図	SB03とIV区Bの位置関係	114
第46図	方形貼石区画全体図	118
第47図	区画B実測図	119
第48図	上器窓まり遺構の位置と名称	128
第49図	上器窓まり1 (DT1) 実測図	130
第50図	上器窓まり1 (DT1) 土器出土位置図	131
第51図	上器窓まり1 (DT1) 出土遺物実測図	137
第52図	上器窓まり2 (DT2) 実測図	142
第53図	上器窓まり2 (DT2) 出土遺物実測図①	145
第54図	上器窓まり2 (DT2) 出土遺物実測図②	146
第55図	上器窓まり3 (DT3) 実測図	150
第56図	上器窓まり3 (DT3) 山上遺物実測図	152
第57図	DT4の層位関係	154
第58図	土器窓まり4 (DT4) 実測図	156
第59図	土器窓まり4 (DT4) 出土遺物実測図	159
第60図	木柱群の位置と名称	162
第61図	流路1・石敷き遺構 (LJ01) 大断面図	169
第62図	石敷き遺構 LJ01断面図	170
第63図	流路1出土遺物実測図①	177
第64図	流路1出土遺物実測図②	178
第65図	流路1出土遺物実測図③	179
第66図	井戸 (SE01) の位置	183
第67図	井手跡 (SE01) 実測図	184
第68図	SK01大断面図	188
第69図	SK02実測図	188

第70図	SB01・SD01の位置	193
第71図	SB01実測図	194
第72図	SD01実測図	195
第73図	I区のグリッドと層序	201
第74図	II区のグリッドと層序	202
第75図	IV区・各土器群の層位的関係	203
第76図	土器群構成図①	204
第77図	土器群構成図②	205
第78図	上器群構成図③	206
第79図	須恵器実測図①	221
第80図	須恵器実測図②	222
第81図	須恵器実測図③	223
第82図	須恵器火焔図④	224
第83図	須恵器実測図⑤	225
第84図	須恵器実測図⑥	226
第85図	須恵器実測図⑦	227
第86図	須恵器火焔図⑧	228
第87図	須恵器実測図⑨	229
第88図	須恵器実測図⑩	230
第89図	須恵器実測図⑪	231
第90図	須恵器実測図⑫	232
第91図	須恵器火焔図⑬	233
第92図	須恵器実測図⑭	234
第93図	須恵器実測図⑮	235
第94図	須恵器実測図⑯	236
第95図	須恵器火焔図⑰	237
第96図	赤彩上陣器・耳の変化と年代	273
第97図	赤彩土師器実測図①	277
第98図	赤彩土師器実測図②	278
第99図	赤彩土師器実測図③	279
第100図	上師器煮炊具火焔図①	287
第101図	十師器煮炊具火焔図②	288
第102図	十師器煮炊具火焔図③	289
第103図	土師器煮炊具火焔図④	290
第104図	上師器煮炊具火焔図⑤	291
第105図	上師器煮炊具火焔図⑥	292
第106図	施釉陶器・黒色土器実測図	299
第107図	円面鏡・板川鏡実測図	307
第108図	板川鏡火焔図①	308
第109図	軸用鏡実測図②	309
第110図	軸用鏡実測図③	310
第111図	軸用鏡実測図④	311
第112図	軸用鏡火焔図⑤	312
第113図	軸用鏡実測図⑥	313
第114図	漆付土器実測図①	331
第115図	漆付土器実測図②	332
第116図	漆付土器上蓋火焔図③	333
第117図	製塗土器・手捏ね土器・上製品実測図	343
第118図	十鳥実測図①	347
第119図	十鳥実測図②	348
第120図	土馬実測図③	349
第121図	上馬火焔図④	350
第122図	金輪製品実測図①	358
第123図	金属製品実測図②	359
第124図	金属製品実測図③	360
第125図	鐵冶窯連遺物火焔図	367
第126図	II区北壁上・馬頭と神像の出位位置	370
第127図	W05(刀代・刀形)修正実測図・写真	375
第128図	結合方法法の直延分布	381
第129図	木製山火鏡図①(神像)	397
第130図	木製品実測図②(斜像)	398
第131図	木製品実測図③(絶馬)	399
第132図	木製品火焔図④(木筋状木製品)	400
第133図	木製山火鏡図⑤(木筋状木製品)	401
第134図	木製品実測図⑥(木筋状木製品)	402
第135図	木製品実測図⑦(下趾)	403
第136図	木製品火焔図⑧(下趾)	404
第137図	木製品火焔図⑨(衛・輪・輪・挽物)	405
第138図	木製品実測図⑩(挽物)	406
第139図	木製品実測図⑪(挽物)	407
第140図	木製品火焔図⑫(列物・曲物)	408
第141図	木製品火焔図⑬(刀形曲物)	409
第142図	木製品火焔図⑭(刀形曲物)	410

第143図	木製品実測図⑨（円形出物）	411
第144図	木製品実測図⑩（円形出物）	412
第145図	木製品実測図⑪（糸巻）	413
第146図	木製品実測図⑫（紡錘具）	414
第147図	木製品実測図⑬（木鉗）	415
第148図	木製品実測図⑭（工具・食事具・漁撈具・火薬臼）	416
第149図	木製品実測図⑮（構造材・接合補助材）	417
第150図	木製品実測図⑯（構造材）	418
第151図	木製品実測図⑰（木材・扉襍放材）	419
第152図	木製品実測図⑱（不明品）	420
第153図	1・II・III区遺構配置図	466
第154図	III区全体図	467
第155図	SB01平面図	468
第156図	SB02平面図	469
第157図	SB03・04平面図	470
第158図	SB05平面図	471
第159図	SK01・SK02・SK08・SK10実測図	472
第160図	SK02出土遺物①	473
第161図	SK02出土遺物②	474
第162図	SK02出土遺物③	475
第163図	SK02出土遺物④	476
第164図	SK03平面図・出土遺物	477
第165図	SK03出土遺物	478
第166図	SK03出土古鉄	479
第167図	SK04・05・09平面図・出土遺物	480
第168図	SK06平面図・出土遺物	481
第169図	SK07平面図・出土遺物	482
第170図	SD01・SD02実測図	483
第171図	包含層出土遺物①	484
第172図	包含層出土遺物②	485
第173図	包含層出土遺物③	486
第174図	測定試料の層年較正確率密度分布①	508
第175図	測定試料の層年較正確率密度分布②	509
第176図	最古式の四輪突出型埴丘墓	539
第177図	破片出土の銅鐸	546
第178図	出土駄馬 集成図①	563
第179図	出土駄馬 集成図②	564
第180図	出土駄馬 集成図③	565
第181図	出土駄馬 集成図④	566
第182図	出土駄馬 集成図⑤	567
第183図	出土駄馬 集成図⑥	568
第184図	出土駄馬 集成図⑦	569
第185図	出土駄馬 集成図⑧	570
第186図	各時期区分の年代と遺跡の消長	572
第187図	墨書き土器の類型と存続期間	573
第188図	主要な手工業生産関連遺物（一部）	576
第189図	円形曲物の新合方法と直秤分布	578
第190図	漆器・脱物実測図	579
第191図	IV区全體図	582
第192図	方形點石区画等高線図	583
第193図	IV区遺物出土地点分布図	585
第194図	祭祀関連遺物	587
第195図	神社名・神仏関連の墨書き土器①	589
第196図	神社名・神仏関連の墨書き土器②	590
第197図	神社名・神仏関連の墨書き土器③	591
第198図	神社関連造構①	594
第199図	神社関連造構②	595
第200図	I区全体図	597
第201図	遺跡の構造と周辺との関係	601
第202図	主要遺物構成図①	602
第203図	主要遺物構成図②	603

写真図版目次

写真図版一	奈良・平安時代の造構／調査区全景	9
写真図版二	奈良・平安時代の造構／調査区全景	10
写真図版三	奈良・平安時代の造構／I区／SB04	17
写真図版四	奈良・平安時代の造構／I区／SB05	18
写真図版五	奈良・平安時代の造構／I区／SB05	19
写真図版六	SB04・SB05関連遺物	22
写真図版七	SB04・SB05関連遺物	23
写真図版八	奈良・平安時代の造構／I区／SB06	27

写真図版九	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB01	29
写真図版〇	奈良・平安時代の遺構	I区/SB03・SB07	33
写真図版一一	奈良・平安時代の遺構	I区/石敷き井泉 (SE01)	41
写真図版一二	奈良・平安時代の遺構	I区/石敷き井泉 (SE01)	42
写真図版一三	奈良・平安時代の遺構	I区/石敷き井泉 (SE01)	43
写真図版一四	奈良・平安時代の遺構	I区/石敷き井泉 (SE01)	44
写真図版一五	奈良・平安時代の遺構	I区/石敷き井泉 (SE01)	45
写真図版一六	奈良・平安時代の遺構	I区/石敷き井泉 (SE01)	46
写真図版一七	奈良・平安時代の遺構	I区/石敷き井泉 (SE01)	47
写真図版一八	奈良・平安時代の遺構	I区/石敷き井泉 (SE01)	48
写真図版一九	奈良・平安時代の遺構	I区/石敷き井泉 (SE01)	49
写真図版二〇	SE01出土遺物	52
写真図版一	SE01出土遺物	53
写真図版二二	奈良・平安時代の遺構	I区/果実埋納土坑 (SX01)	56
写真図版二三	果実埋納土坑 (SX01) /窓内の種子	57
写真図版二四	果実埋納土坑 (SX01) 出土遺物	59
写真図版二五	奈良・平安時代の遺構	I区/木簡出土遺構	63
写真図版二六	奈良・平安時代の遺構	I区/十坑状遺構	66
写真図版二七	溝状・欹状遺構出土遺物	76
写真図版二八	溝状・欹状遺構出土遺物	77
写真図版二九	奈良・平安時代の遺構	I区/溝状・欹状遺構	78
写真図版三〇	奈良・平安時代の遺構	IV区/掘立柱建物群	94
写真図版三一	奈良・平安時代の遺構	IV区/掘立柱建物群	95
写真図版三二	奈良・平安時代の遺構	IV区/掘立柱建物群	96
写真図版三三	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB03	97
写真図版三四	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB03	98
写真図版三五	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB03	99
写真図版二六	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB03	100
写真図版二七	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB02・SB04	101
写真図版二八	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB02・SB04	102
写真図版二九	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB02・SB04	103
写真図版三〇	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB02・SB04	104
写真図版三一	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB02・SB04	105
写真図版三二	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB02・SB04	106
写真図版三三	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB02・SB04	107
写真図版三四	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB05	108
写真図版三四五	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB05	109
写真図版三四六	奈良・平安時代の遺構	IV区/SB05	110
写真図版三四七	奈良・平安時代の遺構	IV区/方形貼石区画	120
写真図版三四八	奈良・平安時代の遺構	IV区/方形貼石区画	121
写真図版三四九	奈良・平安時代の遺構	IV区/方形貼石区画	122
写真図版五〇	奈良・平安時代の遺構	IV区/方形貼石区画	123
写真図版五一	奈良・平安時代の遺構	IV区/方形貼石区画	124
写真図版五二	奈良・平安時代の遺構	IV区/方形貼石区画	125
写真図版五三	奈良・平安時代の遺構	IV区/方形貼石区画	126
写真図版五四	奈良・平安時代の遺構	IV区/方形貼石区画	127
写真図版五四五	奈良・平安時代の遺構	IV区/上器溜まり 1 (DT1)	132
写真図版五六	奈良・平安時代の遺構	V区/土器溜まり 1 (DT1)	133
写真図版五六一	奈良・平安時代の遺構	V区/土器溜まり 1 (DT1)	134
写真図版五六八	土器溜まり 1 (DT1) 出土遺物	138
写真図版五六九	土器溜まり 1 (DT1) 出土遺物	139
写真図版五六〇	土器溜まり 1 (DT1) 出土遺物	140
写真図版五六一	奈良・平安時代の遺構	V区/土器溜まり 2 (DT2)	143
写真図版五六二	土器溜まり 2 (DT2) 出土遺物	147
写真図版五六三	土器溜まり 2 (DT2) 出土遺物	148
写真図版五六四	奈良・平安時代の遺構	V区/土器溜まり 3 (DT3)	151
写真図版五六五	土器溜まり 3 (DT3) 出土遺物	153
写真図版五六六	奈良・平安時代の遺構	V区/土器溜まり 4 (DT4)	157
写真図版五六七	土器溜まり 4 (DT4) 出土遺物	160
写真図版五六八	奈良・平安時代の遺構	V区/木柱群	165
写真図版五六九	奈良・平安時代の遺構	V区/流路 1 と右敷き遺構 (IJ01)	171
写真図版五六九〇	奈良・平安時代の遺構	V区/流路 1 と石敷き泡塼 (IJ01)	172
写真図版五六九一	奈良・平安時代の遺構	V区/流路 1 と石敷き泡塼 (IJ01)	173
写真図版五六九二	奈良・平安時代の遺構	V区/流路 1 と石敷き泡塼 (IJ01)	174
写真図版五六九三	流路 1 出土遺物	180
写真図版五六九四	流路 1 出土遺物	181
写真図版五六九五	流路 1 出土遺物	182
写真図版五六九六	奈良・平安時代の遺構	V区/SE01	185
写真図版五六九七	奈良・平安時代の遺構	V区/SK01	186
写真図版五六九八	奈良・平安時代の遺構	V区/SK02	189
写真図版五六九九	平安時代の遺構	V区/SB01	190
写真図版五六一〇	平安時代の遺構	V区/SB01	196
写真図版五六一	平安時代の遺構	V区/SB01	197

写真図版八二	平安時代の造橋／Ⅴ区／SD01	198
写真図版八三	平安時代の造橋／Ⅴ区／SD01	199
写真図版八四	平安時代の造橋／Ⅴ区／SD01	200
写真図版八五	須恵器／环蓋	200
写真図版八六	須恵器／环蓋・环身	238
写真図版八七	須恵器／环身	239
写真図版八八	須恵器／蓋	240
写真図版八九	須恵器／蓋	241
写真図版九〇	須恵器／蓋	242
写真図版九一	須恵器／蓋	243
写真図版九二	須恵器／环	244
写真図版九三	須恵器／环	245
写真図版九四	須恵器／环	246
写真図版九五	須恵器／环	247
写真図版九六	須恵器／环	248
写真図版九七	須恵器／环	249
写真図版九八	須恵器／环	250
写真図版九九	須恵器／环	251
写真図版一〇〇	須恵器／环	252
写真図版一〇一	須恵器／环	253
写真図版一〇二	須恵器／环	254
写真図版一〇三	須恵器／环	255
写真図版一〇四	須恵器／环	256
写真図版一〇五	須恵器／环	257
写真図版一〇六	須恵器／环	258
写真図版一〇七	須恵器／皿	259
写真図版一〇八	須恵器／皿	260
写真図版一〇九	須恵器／皿	261
写真図版一一〇	須恵器／皿	262
写真図版一一一	須恵器／皿	263
写真図版一一二	須恵器／皿・高环	264
写真図版一一三	須恵器／高环	265
写真図版一一四	須恵器／高环	266
写真図版一一五	須恵器／鉢	267
写真図版一一六	須恵器／碗	268
写真図版一一七	須恵器／盆	269
写真図版一一八	須恵器／壺	270
写真図版一一九	須恵器／壺・盖	271
写真図版一二〇	赤彩土師器	272
写真図版一二一	赤彩土師器	280
写真図版一二二	赤彩土師器	281
写真図版一二三	赤彩土師器	282
写真図版一二四	上師器煮炊具／甕	283
写真図版一二五	上師器煮炊具／甕	293
写真図版一二六	上師器名炊具／甕・瓶・移動式竈	294
写真図版一二七	上師器煮炊具／上製支脚	295
写真図版一二八	上師器煮炊具／上製支脚	296
写真図版一二九	施釉陶器／黑色土器	297
写真図版一二〇	施釉陶器／黑色土器	300
写真図版一二一	円面鏡・軋用鏡	301
写真図版一二二	円面鏡・軋用鏡	314
写真図版一二三	円面鏡・軋用鏡	315
写真図版一二四	円面鏡・軋用鏡	316
写真図版一二五	円面鏡・軋用鏡	317
写真図版一二六	円面鏡・軋用鏡	318
写真図版一二七	円面鏡・軋用鏡	319
写真図版一二八	円面鏡・軋用鏡	320
写真図版一二九	円面鏡・軋用鏡	321
写真図版一二一〇	円面鏡・軋用鏡	322
写真図版一二一一	円面鏡・軋用鏡	323
写真図版一二一二	円面鏡・軋用鏡	324
写真図版一二一三	漆村着土器	334
写真図版一二一四	漆村着土器	335
写真図版一二一五	漆村着土器	336
写真図版一二一六	漆村着土器	337
写真図版一二一七	漆村着土器	338
写真図版一二一八	漆村着土器	339
写真図版一二一九	漆村着土器	340
写真図版一二一〇	手捏ね上器・土製品	344
写真図版一二一一	土製品／十馬	345
写真図版一二一五	土製品／十馬	351
写真図版一二一六	金属器／銅製品／腰帶金具・銅演	352
写真図版一二一七	金属器／銅製品／腰帶金具・刀袋貝・銅演	361
写真図版一二一八	金属器／銅製品／腰帶金具・刀袋貝・銅演	362

写真図版	五五	金属器／鉄器／斧、鎌、刀子、紡錘車	363
写真図版	五六	金属器／鉄器／鐵、斧、刀子	364
写真図版	五七	金属器／鉄器／劍鍋	365
写真図版	五八	鍛冶関連遺物／楕円鋸治浮、羽口	368
写真図版	五九	鍛冶関連遺物／碗形鍛治浮、羽口	369
写真図版	六〇	木製品／祭祀具／神像	421
写真図版	六一	木製品／祭祀具／神像	422
写真図版	六二	木製品／祭祀具／神像	423
写真図版	六三	木製品／祭祀具／絵馬	424
写真図版	六四	木製品／祭祀具／絵馬、形代	425
写真図版	六五	木製品／木簡状木簡品	426
写真図版	六六	木製品／木筒状木筒品	427
写真図版	六七	木製品／木筒状木筒品	428
写真図版	六八	木製品／木筒状木製品	429
写真図版	六九	木製品／履物具／下駄	430
写真図版	七〇	木製品／履物具／下駄	431
写真図版	七一	木製品／服飾具／卜卦	432
写真図版	七二	木製品／服飾具／怡扇、箇	433
写真図版	七三	木製品／容器／鏡物	434
写真図版	七四	木製品／容器／鏡物	435
写真図版	七五	木製品／容器／指物	436
写真図版	七六	木製品／容器／指物	437
写真図版	七七	木製品／容器／指物	438
写真図版	七八	木製品／容器／曲物	439
写真図版	七九	木製品／容器／曲物	440
写真図版	八〇	木製品／容器／曲物	441
写真図版	八一	木製品／容器／曲物	442
写真図版	八二	木製品／容器／曲物	443
写真図版	八三	木製品／紡織具	444
写真図版	八四	木製品／紡織具	445
写真図版	八五	木製品／燭具／編籠	446
写真図版	八六	木製品／燭具／編籠	447
写真図版	八七	木製品／燭具・「貝・油拂具・食事具・発火具	448
写真図版	八八	木製品／燭具・「貝	449
写真図版	八九	木製品／発火具・接合補助材	450
写真図版	九〇	木製品／構造材／建築材・器具材	451
写真図版	九一	木製品／構造材／建築材・器具材	452
写真図版	九二	木製品／構造材・木橋・杭	453
写真図版	九三	木製品／川途不明品	454
写真図版	九四	木製品／用途不明品	455
写真図版	九五	木製品／用途不明品	456
写真図版	九六	中世の遺物／SK02出土／上腕臂土器	487
写真図版	九七	中世の遺物／SK02出土／兩器	488
写真図版	九八	中世の遺物／SK02出土／陶器	489
写真図版	九九	中世の遺物／SK02出土／短器	490
写真図版	一〇〇	中世の遺物／SK02出土／南磁器・十脚器	491
写真図版	一〇一	中世の遺物／SK03出土／木筒	492
写真図版	一〇二	中世の遺物／SK03出土	493
写真図版	一〇三	中世の遺物／SK01・04・05・06・10出土	494
写真図版	一〇四	中世の遺物／SK07出土	495
写真図版	一〇五	中世の遺物／包含層出土／土器	496
写真図版	一〇六	中世の遺物／包含層出土／南磁器	497
写真図版	一〇七	中世の遺物／包含層出土／土器・金屬器・陶器・鐵貨	498
写真図版	一〇八	中世の遺物／鉛立柱建物	499
写真図版	一〇九	中世の遺構／上坑	500
写真図版	一一〇	中世の遺構／上坑	501
写真図版	一一一	中世の遺構／土坑	502
写真図版	一二	中世の遺構／土坑	503
写真図版	一二三	圓窓鏡寫真	520
写真図版	一二四	圓窓鏡寫真	521
写真図版	一二五	圓窓鏡寫真	522
写真図版	一二六	圓窓鏡寫真	523
写真図版	一二七	圓窓鏡寫真	524
写真図版	一二八	圓窓鏡寫真	525
写真図版	一二九	圓窓鏡寫真	526
写真図版	一〇〇	圓窓鏡寫真	527
写真図版	一〇一	圓窓鏡寫真	532

表目次

第2表	遺物一覧表	4
第3表	SH04・SH05関連遺物 観察表	20
第4表	SH06関連遺物 観察表	24
第5表	SE01関連遺物 観察表	50
第6表	SK01采薪種子核 敷量表	54
第7表	SK01出土遺物 観察表	57
第8表	溝状遺構付箇表	69
第9表	SD関係出土物 観察表	75
第10表	DT1出土遺物 観察表①	135
第11表	DT1出土遺物 観察表②	136
第12表	DT2出土遺物 観察表	144
第13表	DT3出土遺物 観察表	152
第14表	DT4出土遺物 観察表	158
第15表	流域1出土遺物 観察表①	175
第16表	流域1出土遺物 観察表②	176
第17表	須恵器 観察表①	207
第18表	須恵器 観察表②	208
第19表	須恵器 観察表③	209
第20表	須恵器 観察表④	210
第21表	須恵器 観察表⑤	211
第22表	須恵器 観察表⑥	212
第23表	須恵器 観察表⑦	213
第24表	須恵器 観察表⑧	214
第25表	須恵器 観察表⑨	215
第26表	須恵器 観察表⑩	216
第27表	須恵器 観察表⑪	217
第28表	須恵器 観察表⑫	218
第29表	須恵器 観察表⑬	219
第30表	須恵器 観察表⑭	220
第31表	赤彩土師器 観察表①	274
第32表	赤彩土師器 観察表②	275
第33表	赤彩土師器 観察表③	276
第34表	土師器蒸炊具 観察表①	285
第35表	土師器蒸炊具 観察表②	286
第36表	施釉陶器・黒色上巻 観察表	298
第37表	転用焼集計表	302
第38表	円面鏡・転用鏡 観察表①	304
第39表	円面鏡・転用鏡 観察表②	305
第40表	円面鏡・転用鏡 観察表③	306
第41表	漆付骨上巻の内式	325
第42表	漆付骨上巻 観察表①	329
第43表	漆付骨上巻 観察表②	330
第44表	管塗土器・手捏ね上巻・上製品 観察表	342
第45表	用途別樹種別判定結果(枝を除く)	390
第46表	木製品 観察表①	391
第47表	木製品 観察表②	392
第48表	木製品 観察表③	393
第49表	木製品 観察表④	394
第50表	木製品 観察表⑤	395
第51表	木製品 観察表⑥	396
第52表	III区 沈構出土遺物 観察表①	461
第53表	IIIBK・透構出土遺物 観察表②	462
第54表	III区 道構出土遺物 観察表③	463
第55表	III区B・包含層出土遺物 観察表①	464
第56表	III区B・包含層出土遺物 観察表②	465
第57表	各試料の測定結果	507
第58表	同定結果一覧表(樹種別)①	515
第59表	同定結果一覧表(樹種別)②	516
第60表	同定結果一覧表(樹種別)③	517
第61表	同定結果一覧表(樹種別)④	518
第62表	同定結果一覧表(樹種別)⑤	519
第63表	供試材の履歴と調査項目	528
第64表	供試材の化字組成	530
第65表	出土遺物の測定結果のまとめ	531
第66表	四隅突出型埴丘墓変遷表	540
第67表	破片病跡 観察表	545
第68表	代表的な初期神像	548
第69表	馬裝具の有無と破片の状況	553
第70表	出土駒馬集成表①	558
第71表	出土駒馬集成表②	559
第72表	出土駒馬集成表③	560
第73表	出土駒馬集成表④	561
第74表	出土駒馬集成表⑤	562

第12章 成果の概要

第1節 基本層序と遺構面の概要

第1図に基本層序を示した。古代の遺構面は現地表下2~3mにあり、おおまかに8世紀中頃~9世紀前葉のものである。この時期の遺構面はI区で10層、IV区で7層を基盤層とし、1面のみ存在する。これに重複して、より新しい遺構面が上に重なっている。I区では9層を基盤層とし、10世紀頃と推定、IV区では50層の上面で10~13世紀の遺構面である。IV区については新しい遺構面を区別し、「新段階の遺構」として別に節を設けて扱った。

古代の遺構面の下には弥生時代中期~後期の遺構面がわずか30cmほどの間隔をはさんで残存する。この弥生時代の遺構を一部削平し、堆積が進んだ上に古代の遺構面が形成されている。古代の遺構面はI区で9層、IV区で5B・5C層によって被覆されている。この土層は未分解の有機物を多く含んでおり、湿地環境下で堆積したものである。よって、遺構面はある段階（9世紀中頃か）で周辺が湿地化し、埋没したものと考えられる。

当跡跡からは大量の遺物が出土しているが、多くは遺構面を被覆した湿地堆積層（I区9層とIV区5B・5C層）に含まれていた。遺物のうち、明確に遺構に伴うものについては第13章と第14章の各遺構の項で掲載したが、量は非常に少ない。遺物の大半は包含層出土として、第15章でまとめて掲載している。遺物の多くは遺構面が埋没する過程でもたらされたものであり、若干の移動を考える必要がある。

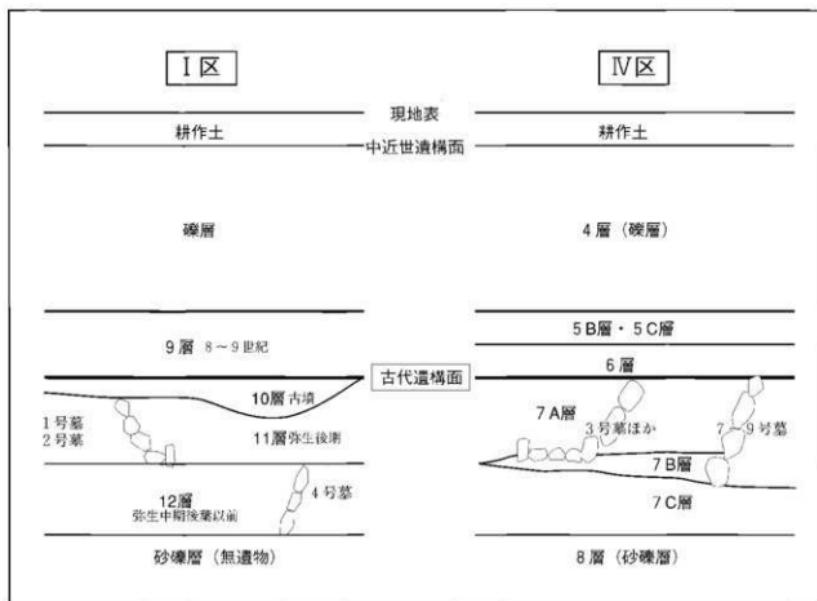
第1表 遺構一覧表

I区

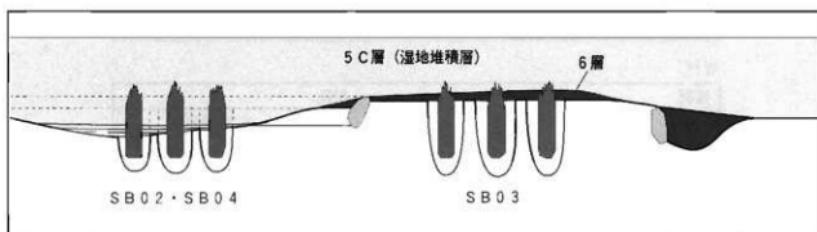
種別	遺構名	時期
礎石建物	SB04、SB05	8世紀中頃~9世紀前葉
	SB06、SB16	8世紀中頃~9世紀前葉
掘立柱建物	SB07	10世紀頃
	SB01、SB02、SB03、SB08	不明
石敷き井泉	SE01	8世紀中頃~9世紀前葉
果実埋納土坑	SX01	8世紀中頃~9世紀前葉
木簡出土遺構	SX10、SX50	8世紀中頃~9世紀前葉
	SK01、SK04	不明
土坑状遺構	SK02、SK03	不明
	SD16他	8世紀中頃~9世紀前葉
溝状遺構	歴間溝（溝群1・2）	10世紀頃

IV区

種別	遺構名	時期
掘立柱建物	SB02、SB03、SB04、SB05	8世紀中頃~9世紀前葉
	SB01	10~13世紀
方形貼石区画	区画A、区画B	9世紀初頃~中頃
	DT1、DT2、DT3	8世紀中頃~後葉
土器溜まり	DT4	8世紀中頃
木柱群		8世紀中頃~9世紀前葉
流路	流路1	7世紀後半~9世紀後葉
	IJ01	8世紀中頃~9世紀前葉
石敷き遺構	SE01	8世紀中頃~9世紀前葉
	SK01、SK02	8世紀中頃~9世紀初頃?
井戸	SD01	10~13世紀
溝		



第1図 基本層序模式図



第2図 IV区建物周辺土層模式図

第2節 遺構の概要

1. I区の遺構

建物遺構

礎石建物2棟(SB04・SB05)。SB04は2×4間、SB05は2×3間で南側片面に庇がつく可能性がある。SB05は掘り込み地業による版築が施されている。この2棟は構造や周辺から出土した木簡などからみて、遺跡の中でも中心的な機能を果たした施設と考えられる。

掘立柱建物7棟(SB06・SB16・SB01・SB02・SB03・SB07・SB08)。このうちSB06とSB16は2×2間の総柱建物で、柱材を残し、礎石建物と同時期のもの。他は構造が不明瞭なものや、SB07のように遺構群発掘後のものも含まれる。

石敷き井泉遺構(SE01)

湧水点に木製方形の井枡を設け、周囲の地表面に自然礫を敷き詰めて加高した井泉遺構。手前に踏み石が置かれ、井枡の奥にはヤナギの立木があったことが判明している。井枡の外側には木製の外枠があり、井枡からあふれた水を少量ずつ汲み上げる構造であった。周辺から明確な祭祀痕跡は見つかっていないが、構造からみて特殊な用途が想定されるもの。

果実埋納遺構(SX01)

土師器壺5点にモモ・スマモ・ナシの果実を充填し、土坑内に埋葬したもの。壺内部に種子核が多数残存していた。土坑底部からは自然木に墨書きしたもの(1号木簡)が出土している。地鎮や祓えなどの祭祀に伴って設けられた遺構とみられる。

木簡出土遺構

木簡がまとまって出土したSX10とSX50。SX10は付札木簡がまとまって出土し、SX50は文書木簡や木簡削り屑が出土し、礎石建物SB04との関連が想定される。この遺構については第2分冊でも改めて検討している。

土坑状遺構

掲載した4基の土坑のうち、SK01は86.9kgもの砂鉄を集積したくぼみ状遺構。砂鉄については分析結果を第1章第2節に掲載した。

溝状・畝状遺構

34条の遺構を確認。時期が新しいものを含む。このうち南北に流れるSD16は礎石建物や石敷き井泉と併せて計画的な配置がみられる。I区南北では畝間溝とみられる溝が多数検出されたが、これらは石敷き井泉や建物が発掘した後のものと考えられる。

2. IV区の遺構

建物遺構

柱材が残存する掘立柱建物跡4棟を検出した。2×2間の総柱建物3棟(SB02・SB03・SB04)、2×3間の側柱建物1棟(SB05)。方形貼石区画、木柱群と併せて、SB03を中心とした一連の施設である。SB02・04は古材を再利用した建物。SB03は中心の柱材の規模、樹種、埋め込み深さが周囲の柱と区別された可能性がある。その機能は神社社殿の可能性を含め、祭祀関連の性格をうかがうことができる。

方形貼石区画

建物を囲むように設けられた基礎状の区画で、貼石を施す。中心となる区画(区画A)、SB03と組み合う小区画(区画B)などからなり、右列や板列などを組み合わせて複雑な構造をとる。開統・隔絶の視覚的表示を意図

した祭祀的施設とみられる。

土器溜まり遺構

4箇所で確認。建物群と同時期のもの3箇所(DT1～DT3)と、これより古いもの1箇所(DT4)。食器残渣と上師器煮炊具、供膳具など、一連の調理から飲食に使用した土器を一括して廃棄した痕跡もみられる。

木柱群

方形粘石区画に合わせて配置された、110本もの掘立柱の木柱群。方形粘石区画の東側・南側・西側に集中範囲がみられる。柱根が残存しているが、配備から建物などの構造物ではない。性格は不明だが、祭祀との関連も想定される。

流路・石敷き遺構

I区とII区の境界を流れる自然流路(流路1)と、その縁に石を敷並べた石敷き遺構(IJ01)。石敷き遺構は道路などの実用的なものではなく、流路に付加された視覚的な舞台装置と考えられる。

井戸遺構

実用的とみられる井戸遺構1基(SE01)。方形井枠の底に、大きな自然礫が沈められていた。

土坑

炭、灰を敷いた土坑(SK01)と不明土坑(SK02)。SK01はなんらかの火処とみられるが、鍛冶関連などの生産遺構かどうかは断定できない。

新段階の遺構

古代の遺構群が廃絶した後の遺構。10～13世紀。2×3間の掘立柱建物(SB01)と、南北の溝(SD01)。SD01は人工的に管理された水路。

第3節 遺物の概要

須恵器

372点を選別して掲載した。遺構面を被覆していた包含層の出土で、8世紀後葉に中心がある。最も新しいもので9世紀末～10世紀初頭のもの。蓋環・皿などの供膳具が多い。構成や年代、遺構との関係については第17章第2節で検討を加えた。

赤彩土師器

65点を掲載。形態や赤彩範囲の差異などで若干の時間経過、型式差が認められる。环皿が大半を占める。

土師器煮炊具

土師器の壺、瓶、移動式竈、土製支脚など104点を掲載。

施釉陶器・黒色土器

施釉陶器は灰釉陶器(白窓)双耳壺、綠釉陶器皿、一彩椀が出土。黒色土器は破片多数出土したが、3点を掲載、それ以外は写真のみ。

円面鏡・転用鏡

円面鏡1点、転用鏡170点が出土。転用鏡についてはうち66点を図示、それ以外は写真掲載。転用鏡は蓋、环皿が大半を占め、継続的な文字記載作業がうかがえる。

漆付着土器

70点が出土。運搬に使用された長頸瓶は破碎の状況を良く残す。全体の8割はパレットとして使用された环・皿・蓋類。皿は運搬あるいは小分け容器とされたもの。全体に集積量は少ないが、遺跡において木工、金工などのが完結した手工業生産がおこなわれていたことを示す。

製塙土器・手捏ね土器・その他土製品

製塙土器は100個体分以上出土。多量の消費を示す。外面口縁部附近に墨塗りの可能性があるものが多数出土し注目される。手捏ね土器は確実なものが5点。

土馬

ほぼ全容がわかる2個体と、破片11点が出土。焼成や胎土、成形、表現に個体差が大きい。

金属製品

40点を掲載。鈎帶金具、刀装具（鞘尻金具か）などの特殊なものや、鎌、斧、刀子、鎌、紡錘車など実用工具など。また釘多数、鏃も破片ながら出土。

鍛冶関連遺物

楕形鍛冶溝9点、羽口破片14点が出土。造構は無いが、付近に鉄生産・加工を担う機能があったことを示す。

木製品

223点を掲載。神像、絵馬、形代、木簡状木製品など祭和関連遺物多数。下駄や櫛、梳扇などの服飾具もあり。容器は挽物が一定量あり、階層の高さを示す。高級容器である塗物（漆器）も含まれる。また円形拙物が多数あり、このうち一群は簡易な技法で短期間に製作されたものと考えられ用途が注目される。紡織貝、編具も一定量あり、遺跡周辺で紡織体制が整えられていたとみられる。漆塗りに使用された刷毛や、火鑊臼も出土している。

第2表 遺物一覧表

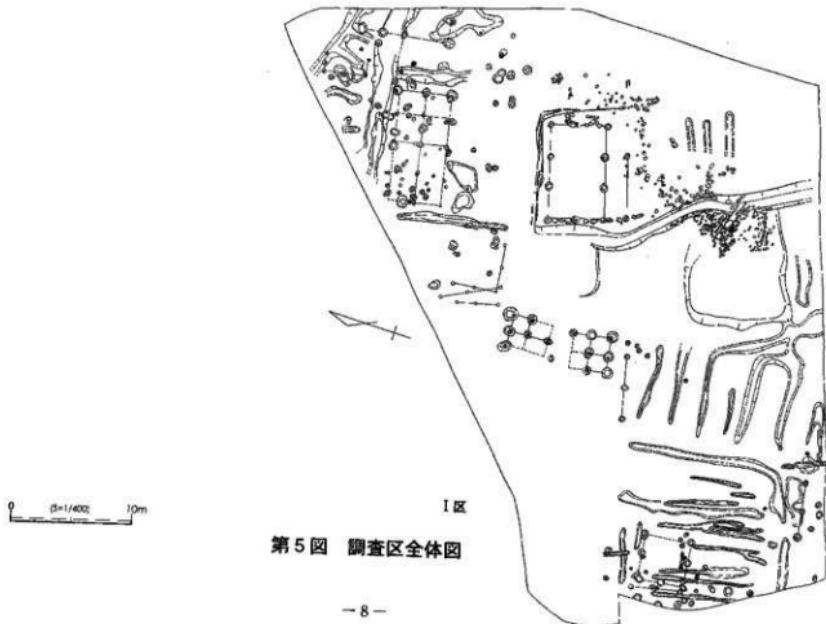
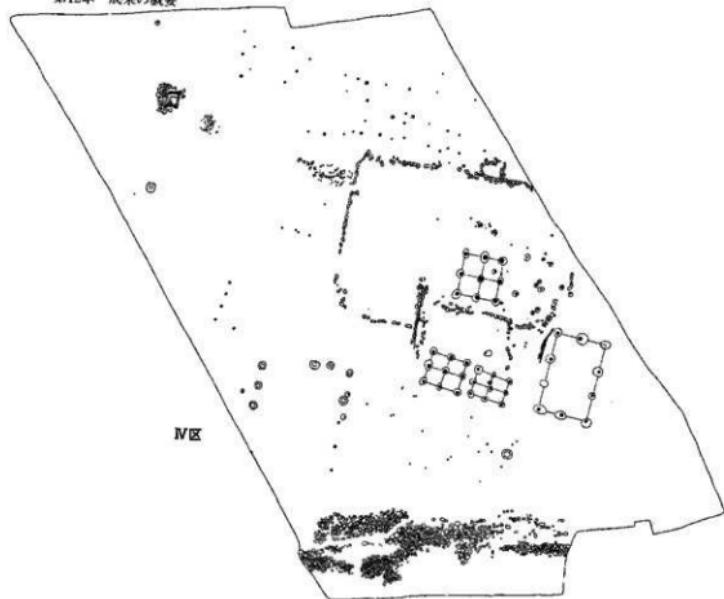
種別	内容
須恵器	
赤彩土師器	
土師器煮炊具	
施釉陶器・黒色土器	灰釉陶器双耳壺、綠釉陶器皿、三彩椀、黒色土器椀
円面鏡・転用鏡	円面鏡1、転用鏡170点
塗付着土器	壺3、甕11、环・皿39、蓋2、高环1
製塙土器・手捏ね土器	製塙土器多数、手捏ね土器5
土馬	2個体十破片11
金属製品	鈎帶金具、刀装具、工具ほか
鍛冶関連遺物	楕形鍛冶溝、羽口片
木製品	神像、絵馬、服飾具、紡織貝、編具、工具ほか



第3図 I区全体図



第4図 IV区全体図



第5図 調査区全体図

写真図版一 奈良・平安時代の遺構／調査区全景



IV区全景（南西から）

写真図版二 奈良・平安時代の遺構／調査区全景



上：東から
(手前左区、左奥工区、後方は
鳴尾ヶ山)

下：北西から
(奥は斐伊川土手と出雲平野)



第13章 I 区・遺構の詳細

第1節 建物遺構／礎石建物

礎石建物は調査区の北東側で2棟検出した。後世の搅乱によって削平を受けているが、礎石が原位置を保つなど比較的の遺存状況は良好である。

1. S B 0 4

遺構の詳細

SB04は調査区の北東側に位置し、SD31・32に囲まれるような状況で検出した。また、西側5mの位置には木簡廃棄土坑（SX50）が存在している。上面は後世の土石流によって削平を受けていたため、調査当初は気付かなかったが、調査が進むにつれ石が並ぶことが分かって初めて礎石建物であることを認識した。

周辺の搅乱が著しく明確には判断できないが、整地による盛土層に礎石を設置したものと考えられ、上から順に黒褐色粘質土、黄褐色粘質土、暗茶色粘質土による整地が行われている。厚さは約30cm前後を測り、比較的水平に近い層序を示している。

建物規模は東西9.15m、南北4.5mを測る桁行4間、梁行2間の床束柱を作り総柱建物である。柱間距離は桁行で2.4mを測るが、東側は1.95mと短くなっている。梁行では2.25mを測る。主軸方向はN-12°-Wをとる。

礎石は白然石を使用し、10箇所残存している。欠損したものも多く認められるが、現状での規模は長さ30~50cm、幅20~40cm、厚さ15~20cmを測るやや小さく扁平な形狀をしている。これら礎石の設置面のレベルは約4.3mとほぼ一定である。

礎石を据え置くための掘り方は礎石検出面では判別が困難であったため、整地土を掘り下げる段階で確認した。掘り方の平面形はほぼ円形を呈しており、径70~90cm、深さは5~40cm程度残存している。土層断面を観察すると上面から掘り込まれたものと整地途中で掘り込んでいるものが認められるが、底面のレベルは約4m前後を測り、ほぼ一定の数値である。

また、西側から2列目の南北2箇所には礎石が認められず、柱穴内に柱根が遺存していた。柱根の規模は長さ40~60cm、幅20cmを測り、外面には粗い面取りが施されている。これは建て替えられたものの可能性も考えられるが、遺存する礎石と比べて位置的にあまりズレていないことと、柱根の底面のレベルが約3.9m前後であり、礎石の掘り方底面のレベルとほぼ一致することから、掘立・礎石併用建物であった可能性も想定できる。

この礎石建物の南東端から南へ約1.2m離れた位置で、平行に隣接する状態で木組みの溝状遺構を検出した。転用材と思われる板材を使用して溝の側壁部分を構成しているが、底板は確認できなかった。規模は長さ約2.5m、幅10~20cm、深さ約20cmを測り、板材の裏側は石材で固定されている。これは礎石建物の雨落ち溝の可能性も考えられるが、わずか一部分しか遺存していないため専用をめぐっていたのか不明であることと、側柱心からこの溝までの距離が約1.2mと短いため判断できなかった。

S B 0 4 関連遺物（第9図）

遺物は建物跡周辺と盛土内から須恵器、土師器が出土している。金属製品（第16章第6節）で扱った鉄釘のうち、4点がSB04の周辺から出土しており関連がある可能性をもつ。

1~5は須恵器、6~9は土師器である。1はつまみを欠損する蓋で、口縁端部のかえりは内側に向いている。内面には墨が付着しており転用窯として使用されたものと考えられる。（220と同一。）2~5は壺身で部体は内湾気味にたちあがり口縁端部は外方に突出するものである。底部には回転糸切り痕が認められる。6~8は壺もしくは皿である。6は口縁端部が外反するものである。7は浅めのもので口縁部は外反気味にのびる。8は口縁端部が小さく外反するもので、内面には螺旋状と放射状の暗文が施されている。9は小型の甌で「く」の字状の

口縁部を有する。側部中央から下が張り出し、底部は丸くおさめる。

時期と性格

上記の遺物から判断してSB04の時期については、8世紀中期～9世紀前葉と推定される。

性格については礎石建物という特徴をもつが周辺から瓦などの遺物はまったく出土していない。ただ、この建物の東側には木簡廐棄土坑が存在しており、木簡の内容的には記録、帳簿等の文書管理に関するものが含まれている。この土坑と関連するものは判然としないが、関連するものと推測すれば文書管理等を行っていた施設としての機能も推定できる。

2. S B 0 5

遺構の詳細

SB05はSB04の南約7mの位置で検出した、基壇状の高まりに礎石を設置した礎石建物である。礎石そのものは抜き取られたものと思われ、現状では確認できなかったが、柱穴内には根石と考えられる石材が遺存している。

遺存する基壇状高まりの規模は東西9.8m、南北約9m、高さは約20cmを測る。北辺側と東辺側に木組みの溝状遺構が付随しているが、西辺側にはSD16が存在し、南辺側では拳大～40cm程度の疊が南東隅部分から南辺側にかけて遺存しているだけで、満らしきものは確認できなかった。このことから周囲をめぐっていた可能性は低いと考えられる。

この礎石建物は掘込地業による版築が行われており、灰白色土や炭を含む黒灰色土、黒色土と明黄茶色土、黄褐色砂質土などを互層に掘き固め、比較的水平に近い順序を示している。土器片や木片なども多く混入しており、やや粗雑な印象を受けるが、版築の厚さは約30cmを測る。

建物規模は東西7.8m、南北4.5mを測る桁行3間、梁行2間の建物で、柱間距離は桁行で2.6m、梁行で2.2mを測る。南側柱から1.7m南の位置で柱穴を2穴検出していることから、片面面が付く建物であった可能性が高いと考えられる。また、東西軸の中央部分は調査前のサブトレーンチにより掘削を受けているが、中央部分に柱穴は配置されていない。主軸方向はN-17°-Wをとる。

礎石を据え置くための柱穴は円形を呈し、径45～55cm、深さ18～45cmを測る。柱穴内には20～40cm大的な自然石を使用した根石が1～2個程度残っている。

また、西辺と東辺には地覆石と思われる石列が遺存しており、長さ30～60cm、幅30～40cm、高さ30cm前後の自然石を一列に並べている。

基壇状高まりの北辺側と東辺側には上述した木組みの溝が付随している。これは板材を使用して側溝を構成しているが、底面に板材は認められなかった。北辺は基壇側面にめぐっており、残存する規模は長さ約9.8m、幅15～40cm、深さ約20cmを測る。東辺は北端から6.3mまでの長さを確認したが、その先は石が貼られており、板材に替わって石を使用したもののが可能性が考えられる。残存する幅は15～50cm、深さは10cm前後を測る。また、溝内部には砂疊層などは確認できず、基壇上と同じ土が被覆されていた。

この溝について、当初は雨落ち溝と考えられたが、側柱から約80cmしか離れていないことや基壇土と同じ土で埋められていることから推測すれば、建物の機能時に伴うものとするより、造成時に必要な溝であったと考えられる。実際、現地の発掘調査時も湧水があり、非常にぬかるんでいたことや、地形的にみても北東側が若干高くなっていることから雨落ち溝としての機能ではなく、造成時に北東側からの雨水等の進入を防ぐために設置された溝と考えるのが妥当であるかもしれない。

また、後述するがこの建物の北東約2mの位置で果実を充填した土師器甕5個が土壌内から出土しており、位置的にみてもSB05と関連深いものと考えられる。

S B O 5 関連遺物（第9図）

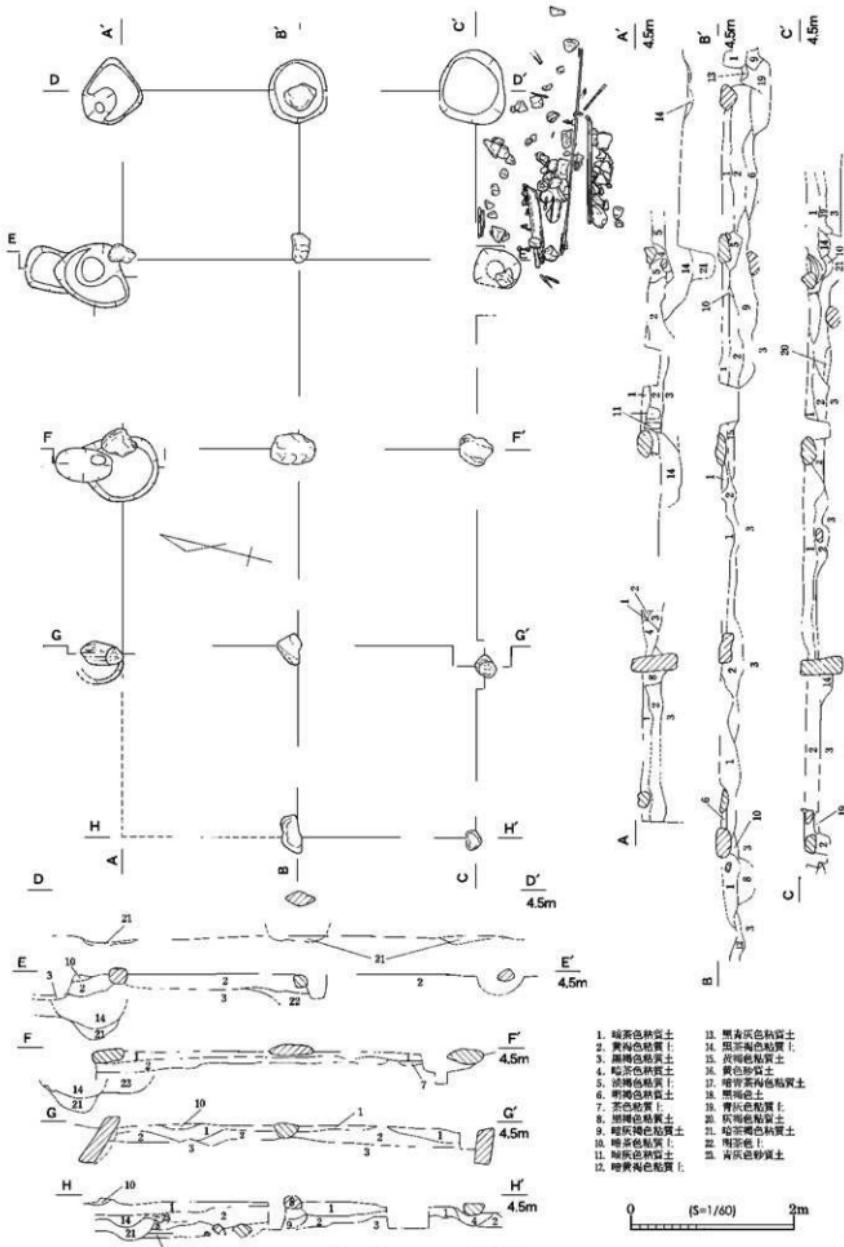
遺物は建物跡周辺とサブトレンチ内から須恵器、土師器が出土している。また、北西側約5mの位置で絵馬1点が出土している。金属製品（第16章第6節）で扱った、赤色顔料の付着した鉄錆（M26・27）はSB05に使用されていたものの可能性がある。また、鉄斧（M15）もSB05の遺構面に伴うものである。

10～19は須恵器、20～25は土師器である。10、11は蓋で10の口縁端部は小さなかえりをもち、扁平なつまみが付く。内面には墨書きがある。11はつまみを欠損するが、体部から下方に屈曲するL縁部をもつ。12、13は高台付壺で体部は丸みを帯び、高台は下方に聞く。14～18は壺身で14、15は体部は丸みを帯びてL縁端部が外方に屈曲するものである。16は体部は丸みを帯びるが直線的にのびるもので、口縁端部は外方にやや突出するものである。17は蓋の底部で高台は小さくハの字状に聞く。20は高台を有する皿であるが、口縁部は外方に短くのび、高台は下方に小さく張り出す。21～25は壺身でL縁部は緩やかに外方にのびるものである。

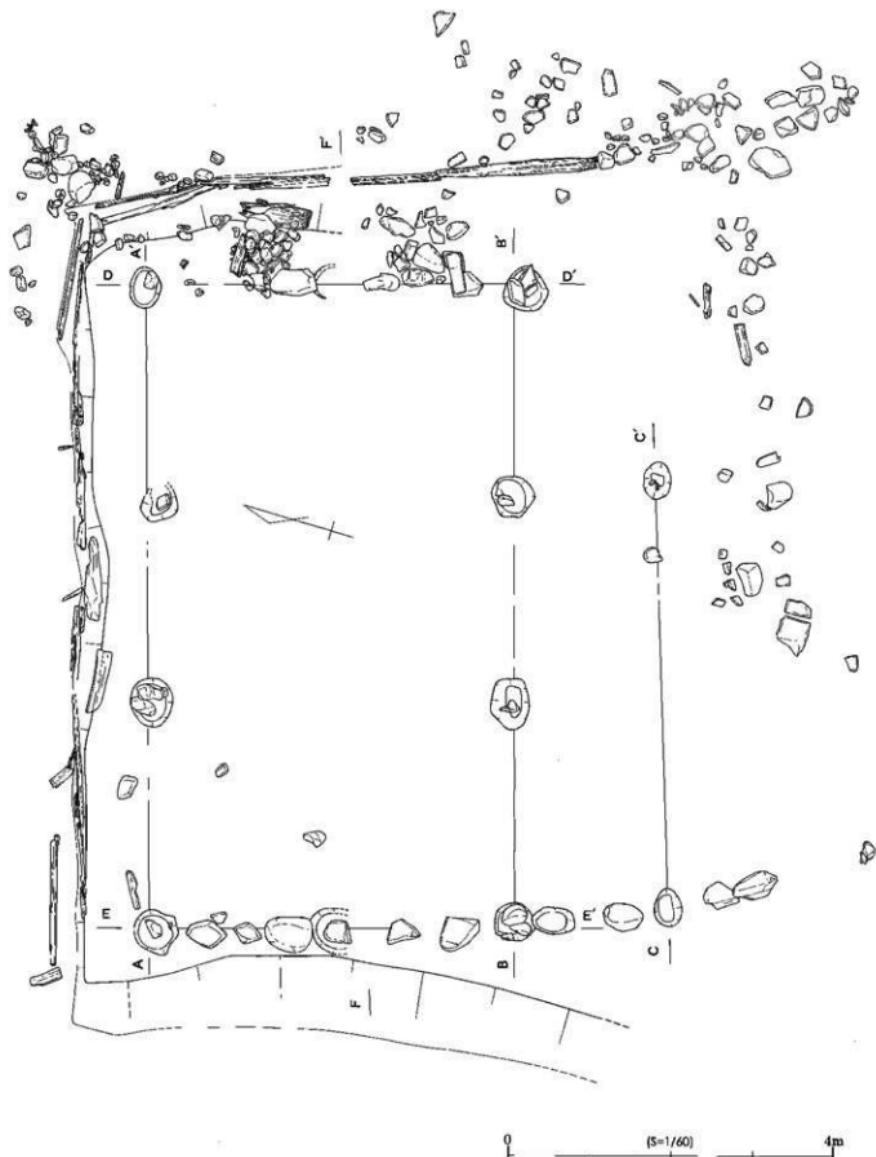
時期と性格

上記の遺物からSB05の時期は8世紀中頃～9世紀前葉と考えられる。

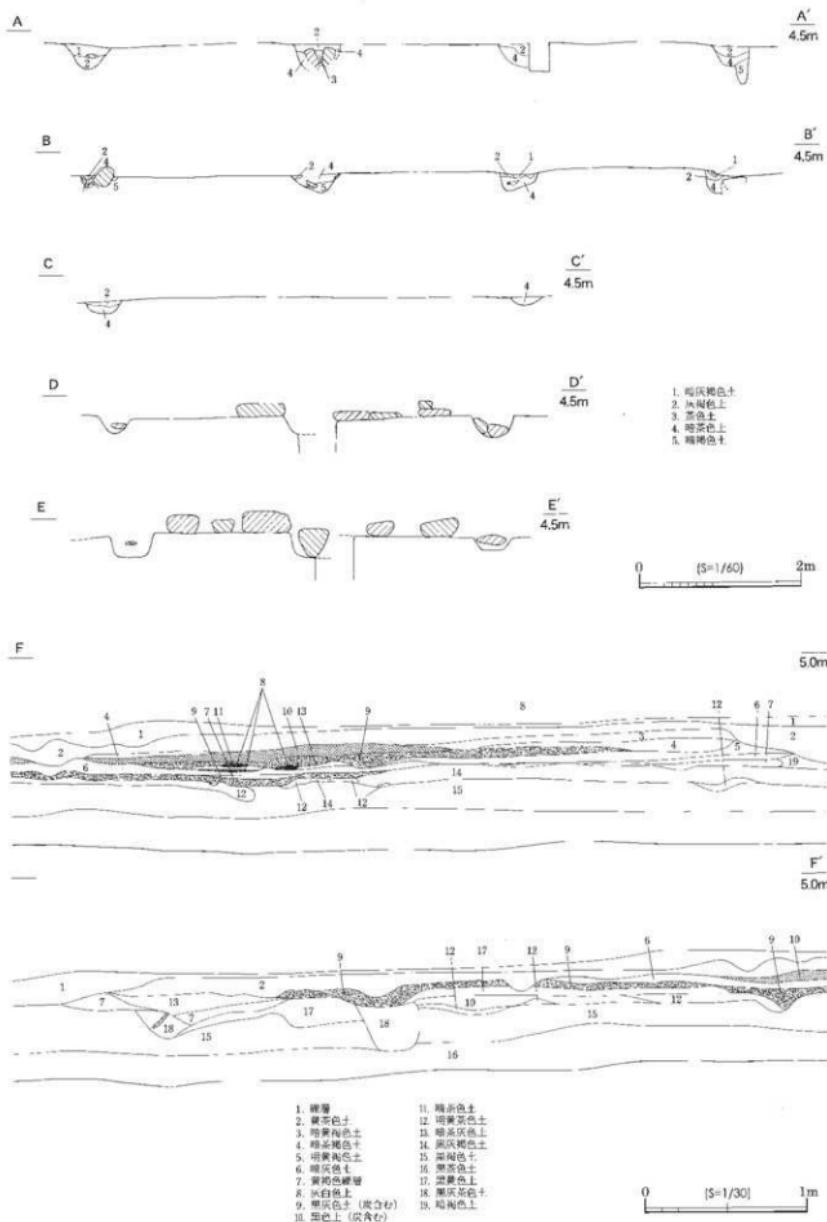
性格については明確には判断できないが、建物範囲に版築を行っているのが特徴的で、地方では寺院を除けば末端官衙でも見られない基礎工法を採用している。周辺からは絵馬が1点出土した以外、SB04同様に瓦や仏教寺院に関する遺物はまったく認められず、建物の性格は判然としない。付近には果実埋納土坑や石敷きの井戸跡など祭祀・信仰に関する特殊な遺構が配置されていることや版築及び礎石建物という特異な構造などからみてSB05は遺跡内では特に重要な建物であったことがうかがえ、何らかの信仰・祭祀に関する建物跡であった可能性が想定できる。



第6図 SB04実測図



第7図 SB 05平面図



第8図 SB05断面図

写真図版三 奈良・平安時代の遺構／I区／SB04



上：SB04検出状況（東から）
下：SB04完掘状況（東から）

写真図版四 奈良・平安時代の遺構／I区／SB05



上：SB05 版築断面
下：SB05 完掘状況（東から）

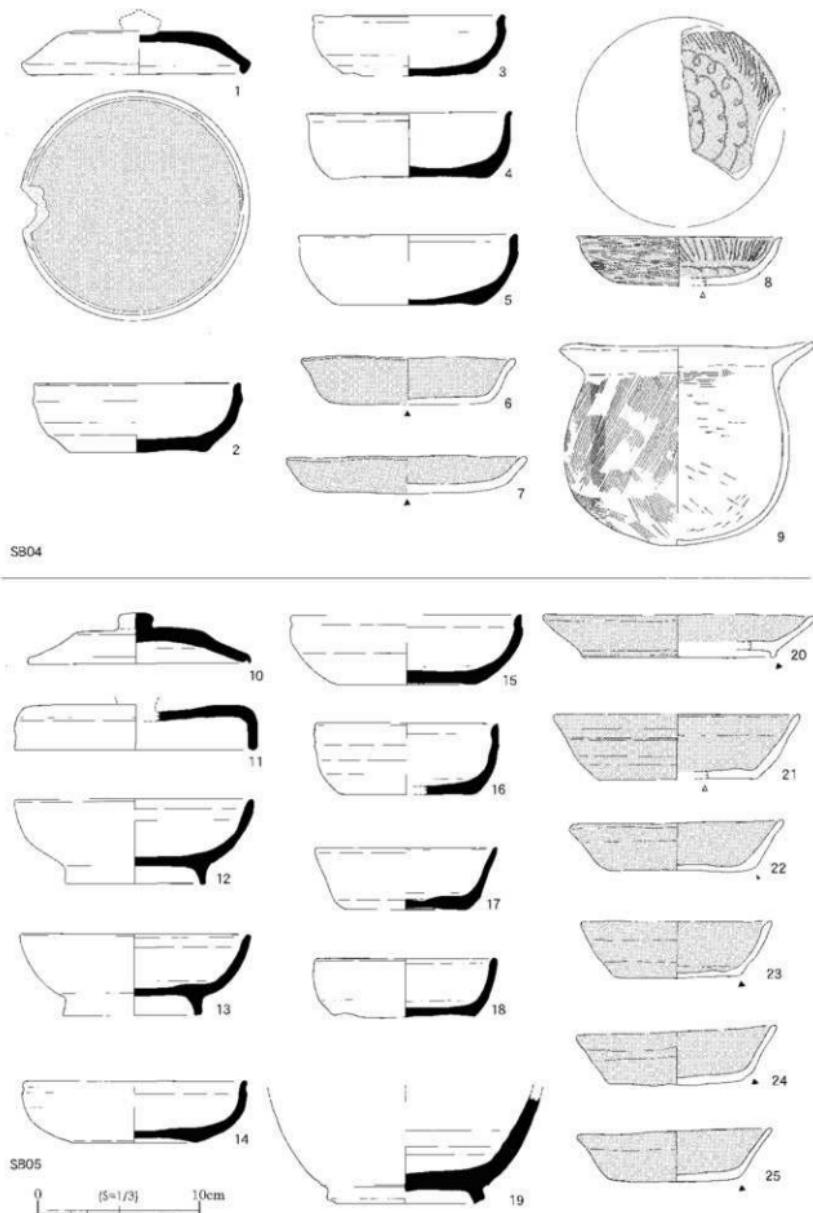
写真図版五 奈良・平安時代の遺構／I区／SB05



上：SB05完掘状況（南から）
下：SB05排水溝状況

第3表 SB04・SB05関連遺物 観察表

番号	種別	器種	口径	底径	高さ	残存率	調査	色調	施文・備考	
第9回										
1	須恵器	壺	13.1		2.7	ほぼ完形	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部回転系切り	内外面：灰色2	軸用規 内面全体に墨模 底模倣者 全底つまみ打ち欠き	
2	須恵器	壺	12.4	8.3	4.2	全体の50%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部回転系切 り	内外面：灰色1		
3	須恵器	壺	(10.6)		4.75	全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部回転系切 り	内外面：灰色1		
4	須恵器	壺	(12.4)	(9.2)	4.0	底部全周の 50%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部回転系切 り	内外面：灰色2		
5	須恵器	壺	(13.2)	(8.6)	4.3	全体の40%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部回転系切 り	内外面：灰色2		
6	土師器	壺	(6.5)			全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ヘラケズ リ・ナデ	断面：灰白色	全面赤彩	
7	土師器	壺	(14.4)		2.3	全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ケズリ	断面：灰白色	全面赤彩 全体に垂みあり 底部外面の一部に墨模	
8	土師器	壺	(12.4)		3.1	全体の20%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部ミガキ、底部ケズリ・ナ デ	断面：灰白色	全面赤彩 内面に白文	
9	土師器	壺	15.1		12.5	完形	内面：口縁部回転ナデ、頭部ハケ メ、肩部以下ケズリ/外面：口縁部 ~颈部回転ナデ、肩部以下ドクメ	内外面：棕褐色1	外側の一部に墨模	
10	須恵器	壺	13.6		3.1	全体の70%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ/ 外面：口縁部回転ナデ、須部回転 系切り後ナデ	内外面：青灰色2	外側に自然模 内面中央に墨書「伊」	
11	須恵器	壺	(14.8)		3.75	全体の40%	内面：口縁部回転ナデ、見込ナデ/ 外面：口縁部回転ナデ、須部ヘラ ケズリ	内外面：灰色2		
12	須恵器	高台付壺	14.6	高台径 8.6	5.2	全体の70%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ナデ	断面：青灰色1		
13	須恵器	高台付壺	14.0	高台径 8.5	5.1	全体の90%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ナデ	断面：灰色2	外側白色自然模	
14	須恵器	壺	(13.4)	(7.6)	3.8	全体の25%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部回転系切 り後ナデ	断面：灰色2		
15	須恵器	壺	(14.0)	8.0	4.25	全体の30%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部回転系切 り	内外面：灰色1		
16	須恵器	壺	(11.0)	(8.0)	4.4	全体の20%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部回転系切 り	断面：灰褐色4		
17	須恵器	壺	(11.0)	(7.85)	3.8	全体の23%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部回転系切 り	断面：灰褐色4		
18	須恵器	壺	11.0		8.5	3.6	全体の60%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部回転系切 り	断面：青灰色2	
19	須恵器	高台付壺		(8.4)			底部～体部 下半全周の 25%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部平行タキ目、底部回転 系切り	内外面：青灰色3	外側一部に白色自然模
20	土師器	高台付皿	(16.5)	高台径 (11.8)	2.5	口縁～底部 全周の20%	内面：回転ナデ/外面：体部回転ナ デ、底部ナデ	断面：棕褐色1	赤彩	
21	土師器	壺	(15.0)	(9.8)	4.1	全体の20%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ナデ	断面：棕褐色1	外側一部に火漆	
22	土師器	壺	12.4		8.9	3.0	全体の50%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ナデ	断面：灰褐色2	外側赤彩 重みあり
23	土師器	壺	11.6		8.0	3.5	全体の25%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ナデ	断面：棕褐色1	外側赤彩
24	土師器	壺	11.9		8.9	3.2	全体の70%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ナデ	断面：灰褐色1	外側赤彩 外側墨模
25	土師器	壺	11.7		3.1	全体の60%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外 面：体部回転ナデ、底部ナデ・指 印压痕	断面：棕褐色1	外側赤彩 重みあり	



第9図 S B 04・05関連遺物実測図

写真図版六 SB04・SE05関連遺物



写真図版七 SB04・SB05関連遺物



9-13



19



14



20



15



21



16



22



23



17



24



18



25

第2節 建物遺構／掘立柱建物

1区では掘立柱建物を計7棟確認している。内部は2×2間の総柱建物2棟、側柱建物5棟であった。総柱建物については湧水や後世の擾乱等によってすべての柱穴を検出することはできなかったが、比較的良好な柱根が遺存していた。

1. SB06

SB06は調査区中央やや北寄りの位置で検出した2×2間の総柱建物である。調査地は湧水等が著しい場所であったが、柱根が遺存していたために、柱穴6穴を確認することができた。他の柱穴については柱根が遺存していないため検出不可能であった。

建物の規模は桁行3.2m、梁行2.6mを測り、平面形は長方形を呈している。主軸方向はN-2°-Wをとる。

柱穴の形態は円形および楕円形状を呈しており、長軸径で55~110cm、短軸径45~95cmと比較的大きく、深さは35~45cm前後を測る。

柱根は長さ35~90cm、径20~32cmを測り、外面には幅3~4cm程度の面取り整形が施されている。遺存状況は比較的良好である。

遺物は柱穴内から第10図1の須恵器、2の土師器の2点が出土している。

1は底部を欠損するが口縁端部が外方に屈曲する环で、端部下方がよく張るものである。2は口縁部が外傾してのびる环で、底部は欠損している。また、赤彩が施されている。

SB06の時期は出土遺物から8世紀中頃~9世紀前葉と推定される。

第4表 SB06関連遺物 観察表

番号	種別	器種	口径	底径	高さ	残存率	調査	色調	施文・備考
第10図									
1	須恵器	环	(11.4)			11縁全周の1%	内外面：四軒ナデ	内外面：青灰褐色2	
2	土師器	环	(11.8)	(7.2)	3.0	11縁全周の2%	内外面：四軒ナデ	断面：灰褐色1	赤彩

2. SB16

SB16はSB06の南方約2mに位置し、青木2号墓の墳頂面で検出した2×2間の総柱建物である。柱穴は7穴検出したが、そのうちの4穴に柱根が遺存していた。中央と南側の柱列は2号墓の墳頂面に位置していることから容易に検出できたが、北側の柱列は墳縮部に位置しており、貼石等が存在していたため柱根が遺存するものしか確認できなかった。

建物の規模は桁行3m、梁行3mを測り、平面形は正方形を呈している。主軸方向はN-10°-Wをとる。

柱穴の形態は円形および楕円形状を呈しており、径50~90cm、深さは40~65cmを測る。

柱根は長さ55~110cm、径20~35cmを測り、外面には3~5cm程度の幅で面取り整形が施されている。遺存状況は比較的良好である。

柱穴等からの遺物が出土していないため、明確な時期については不明であるが、SB06とは主軸が若干ずれることがSB06と若干前後する時期に建てられた可能性がある。

3. SB01

SB01は調査区の北東端で検出した掘立柱建物跡である。溝状遺構によって擾乱を受け、東側の柱列を失って

いるが、 2×1 間以上の建物になると推測される。

建物の規模は桁行3.4m、梁行1.4mを測り、平面形は長方形を呈している。主軸方向はN-10°-Wをとる。

柱穴の形態は円形を呈しており、径20~40cm、深さ10cm前後を測る。

遺物が出土していないため時期については不明である。

4. SB02

SB02はSB01の南東寄りで検出した掘立柱建物跡である。SB01同様に溝状遺構によって擾乱を受けているため明確には判断できないが、 3×4 間以上の縦柱建物になる可能性もある。

建物の規模は桁行7m、梁行5.5mを測り、平面形は長方形を呈している。主軸方向はN-8°-Wをとる。

柱穴の形態は円形および精円形を呈しており、径10~90cm、深さ30~55cmを測る。このうち2箇所の柱穴には柱根が遺存しており、柱根の規模は長さ40~78cm、太さ20cmを測る。

遺物が出土していないため時期については不明である。

5. SB03

SB03はSB01の南西約8mの位置で検出した掘立柱建物跡である。北側と東側の柱列を失っているが、 2×2 間の建物である。柱穴は湧水等のため検出できなかったが、柱根が5本遺存していた。

建物の規模は桁行3.9m、梁行3.5mを測り、平面形は長方形を呈している。主軸方向はN-5°-Wをとる。

柱根は長さ10~70cm、径15~30cmを測り、外面に面取りを施すものも認められる。

SB09と重複する状態で柱列を2箇所検出した。

柱列1は柱間距離が北側から2.6、2.7mを測る。柱穴の形態は円形を呈しており、径40cm前後、深さ30cm前後を測る。

柱列2はSB09に平行に隣接する状況で検出した。柱間距離は北側から1.6、1.9mを測り、柱穴の形態はほぼ円形を呈し、径30~50cm、深さ15~20cmを測る。

これらに伴う遺物が出土していないため時期については不明である。

6. SB07

SB07は調査区の内側で検出した 2×2 間の掘立柱建物跡であるが、この建物だけは溝状遺構の上面で検出したことから1区の中では一番新しい建物と考えられる。

建物の規模は桁行4m、梁行4mを測り、平面形は正方形を呈している。主軸方向はN-15°-Wをとる。

柱穴の形態は円形および精円形を呈しており、径30~40cm、深さ20cm前後を測る。3箇所の柱穴に柱根が遺存していた。柱根の規模は長さ30~40cm、径15cm前後と他の建物と比べて小さいものである。

時期については溝状遺構の上面から検出したことから、10世紀前後と考えられる。

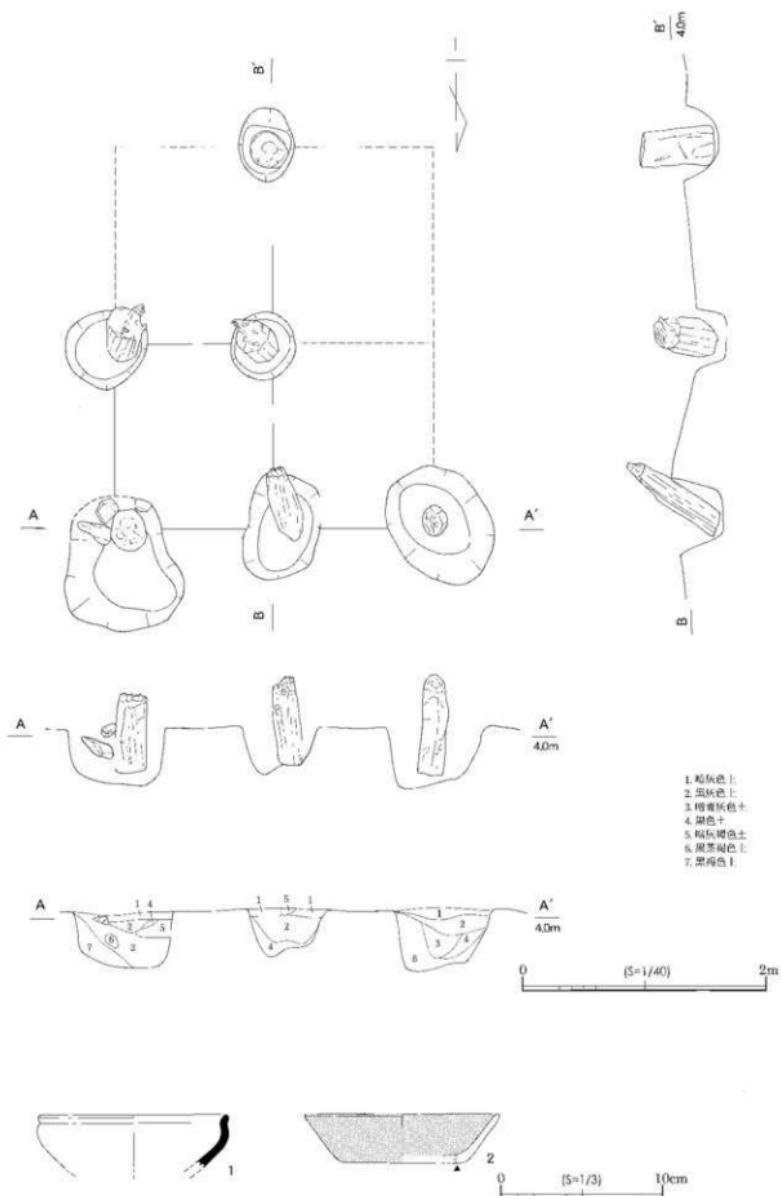
7. SB08

SB08は溝状遺構に囲まれるような状況で検出した 2×2 間の掘立柱建物跡である。

建物の規模は桁行3.8m、梁行3.7mを測り、平面形は正方形に近い。主軸方向はN-8°-Wをとる。

柱穴の形態は円形および精円形を呈しており、径40~65cm、深さ20~40cmを測る。

遺物が出土していないため時期については不明である。



第10図 S B 06平面図・出土遺物実測図

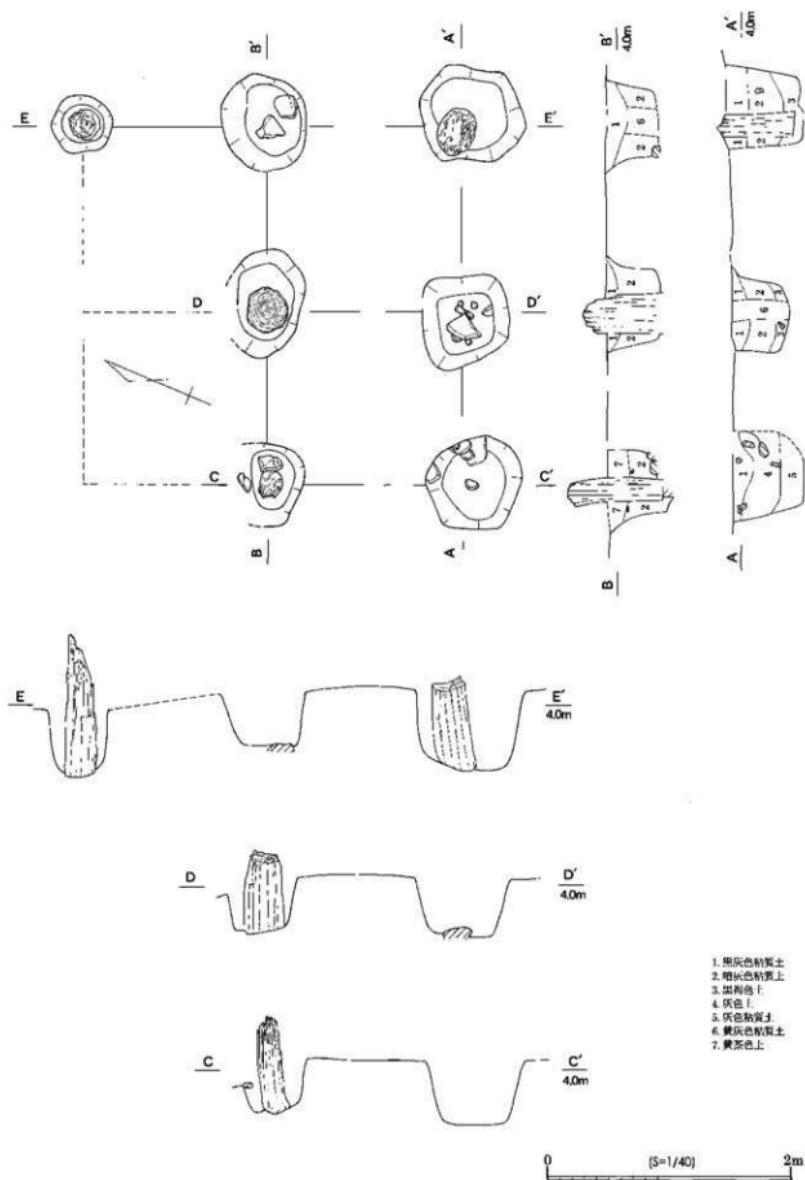
写真図版八 奈良・平安時代の遺構／I区／SB06



10-2

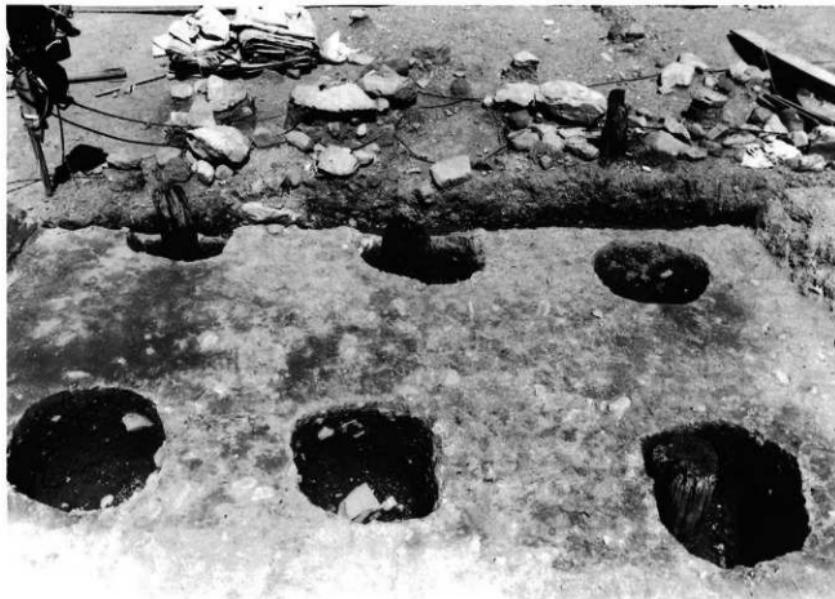
10-1

上：SB06完掘状況（北から）
下：SB06 出土遺物

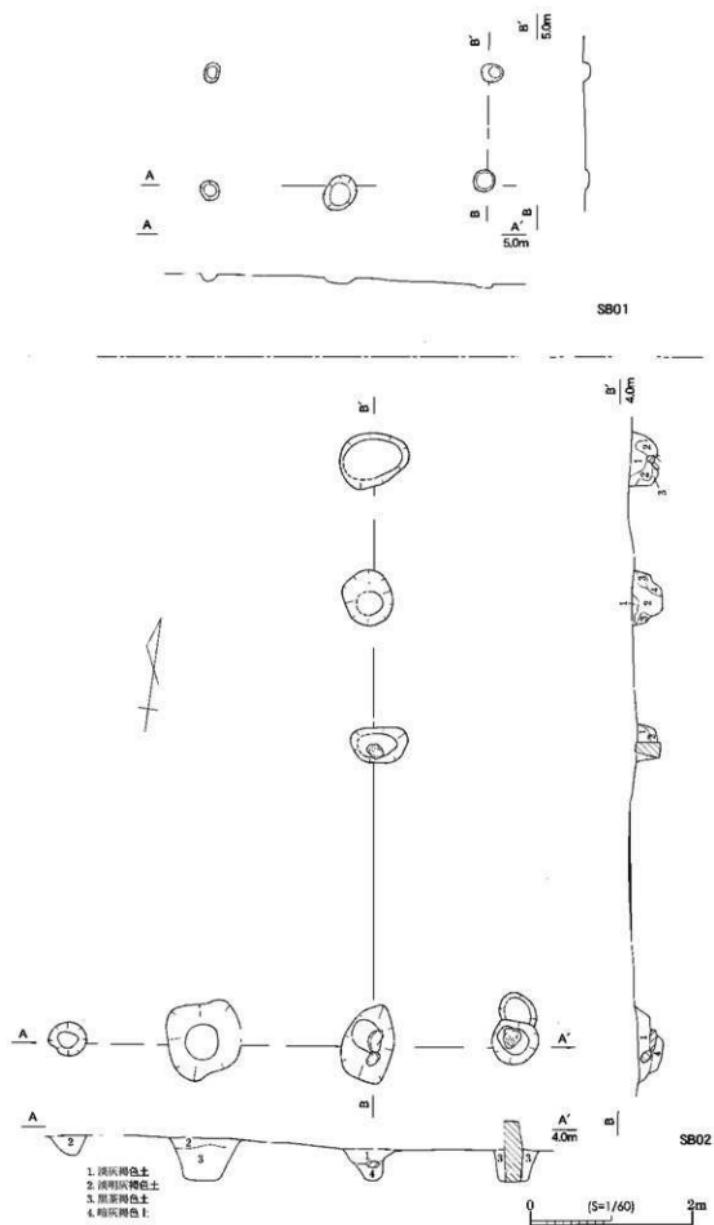


第11図 SB 16平面図

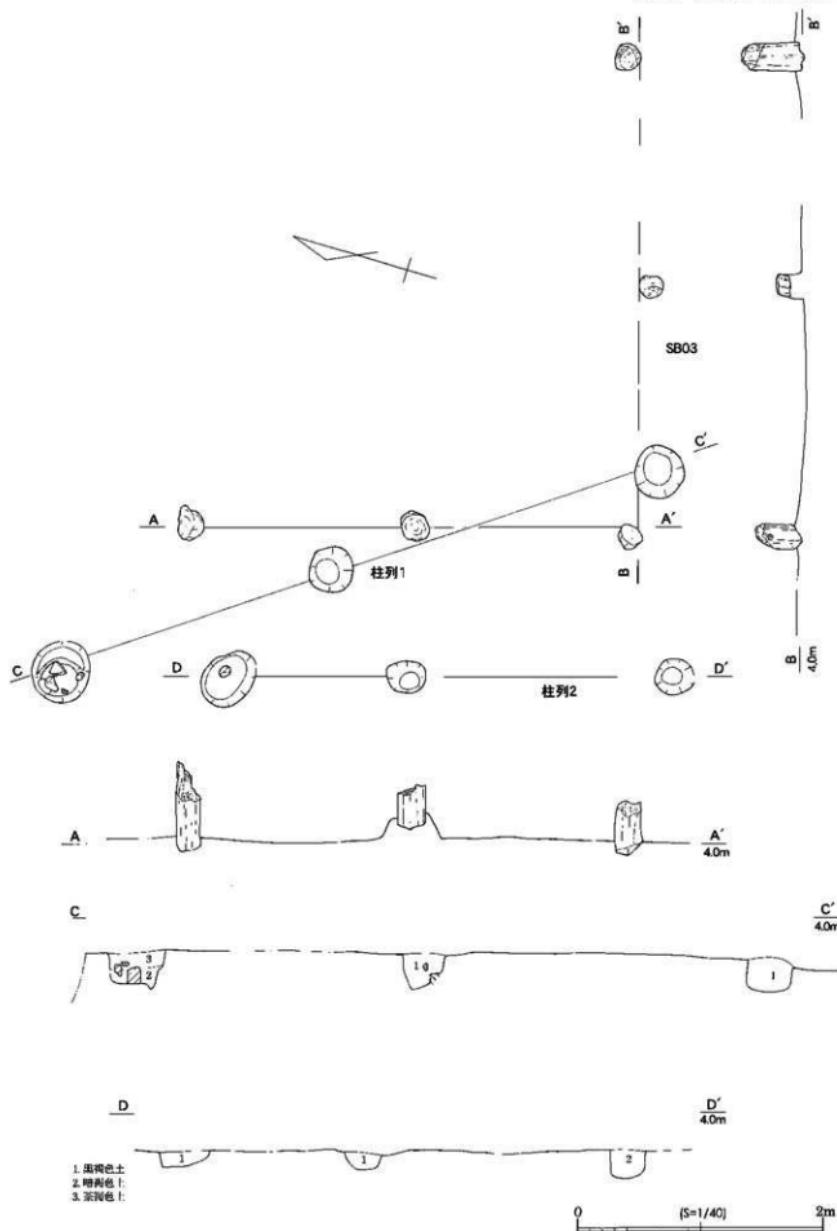
写真図版九 奈良・平安時代の遺構／I区／SB16



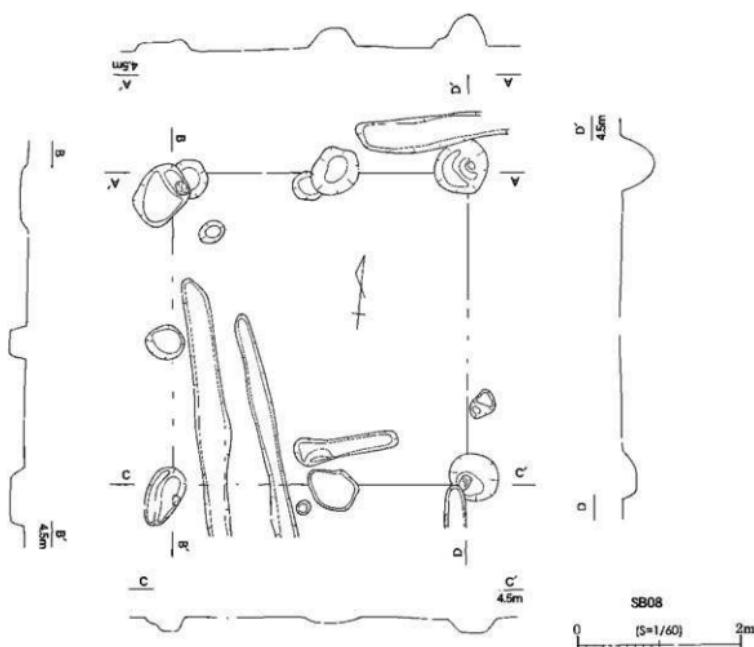
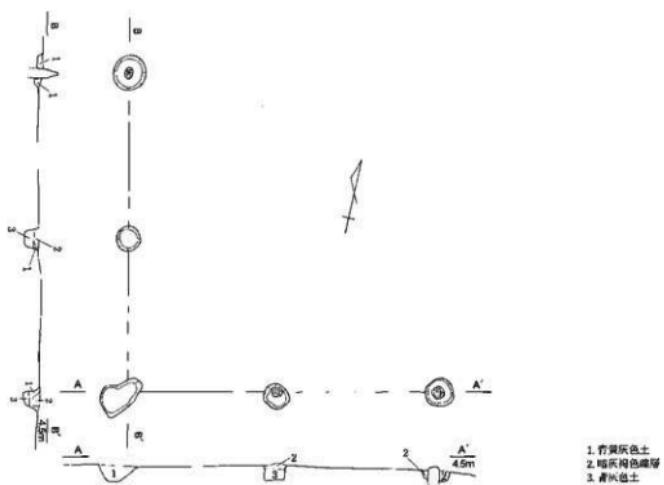
上：SB16検出状況（南から）
下：SB16完掘状況（南から）



第12図 SB01・02平面図



第13図 SB03・柱列1・柱列2実測図



第14図 S B 07・S B 08実測図

写真図版一〇 奈良・平安時代の遺構／I区／SB03・SB07



上：SB03検出状況（北から）
下：SB07完掘状況（南から）

第3節 石敷き井泉遺構 (SE01)

SE01は調査区中央南寄りに位置し、SB05の西寄りを南北に流れるSD16に接している状態で検出した。また、これを囲むように東西約10m、南北約8mの範囲に腐植土層を含む沼地化したとみられる方形状の窪みが存在している。

調査前は他の遺構同様に後世の土石流によって削平を受けていたが、この礫がSD16と沼地化した窪みに多量に堆積していた。礫を除去していくところ木組みの枠組みと扁平な大きな石が確認され、これを精査した結果、二重の井戸枠の手前に扁平な大きな石を置き、周間に石を敷き詰めた特殊な井泉跡であることが判明した。

井枠の状況

内側の井枠は平面正方形で、規模は55cm四方、深さは50cm程度と小さいものである。上面の状況については削平を受けていたため把握できなかった。内部には砂質土と砂礫層や外部から落ち込んだと考えられる石が堆積している。遺物は図化できなかったが、須恵器の小片が少量出土しただけである。

井枠の構築方法は約10cm角の角材を相接接で井桁状に組み合わせて基底部を作り、その交差する四隅にほど穴を穿った後、そこに基底部と同程度の太さの角材を隅柱として立てているが、その内側の2方に溝を設けており、その溝に板を差し込んで組み立てた構造である。横板の大きさは幅約52cm、高さ約30cm、厚さ約2.5cmのものを使用しているが、隅柱に差し込む部分は楔状に細く削り出されている。

東辺側の横板は上面中央に7×13cmの長方形に切り取られた箇所があり、ここに別の板材がはめ込まれていた。この板材は栓としての機能をもつたものと考えられ、湧水を外枠の槽内に流し込んだり止めたりするためのもの可能性が高いであろう。

部材はモミ属とスギが用いられている。隅柱材と上居枠材といった棒状部材にモミ属が、板状である側板材にスギが選択的に使用されているが、南土居枠だけが例外である。放射性炭素年代測定法の結果、伐採年が約8世紀中頃と判明している。詳細については第18章第1節を参照していただきたい。

外枠の状況

この井枠の外側、北側と東側の2方向に杭によって固定された板材が遺存しており、これは井枠を取り囲んで設置された外枠と考えられる。遺存する板材は長さ90cm前後のものであったが、板材を固定したと考えられる木杭が井枠周辺に残存している。これから推定すれば高さは不明であるが東西1.4m、南北1.0mの規模で東西辺の広い外枠が存在していたものと考えられる。また、この外枠と井枠の間には15cm前後の石が粘土によって丁寧に貼り付けられている。

踏み石・敷石等の状況

外枠の東側には長軸76cm、先幅52cmの扁平な大石が設置されており、これはここに立って水を汲み上げる踏み石であったと考えられる。この踏み石の北側からSD16に向かって長さ約3mの板材が設置され、この板材に平行する状態でSD16内にも板材が遺存していた。これは踏み石の両側からSD16に向けて設置されていた可能性もあり、そうだとすれば井泉から湧き出た水がSD16に流れ込むようになっていたのかもしれない。

また、SD16の東岸側にも石および板材による護岸状の施設が設けられていることからも、SE01とSD16は一体のもので機能していたことがうかがえる。

二重の木枠とその前面に置かれた踏み石の周辺には拳大~50cm程度の石が敷かれているが、検出時には浮いているものなど原位置を止めていないものがあり、本来は全面に丁寧に敷き詰めていたと考えられる。

この井泉跡の2m南側に石敷きに囲まれた東西方向に並ぶ板材がある。石敷きを含む規模は東西約3m、南北約1.5mを測り、板材は長さ1~1.2m、幅20cmのものが並べられている。石の大きさは井泉周辺と同規模のものである。これがどのような機能をもっていたかは判断できないが、同じ石敷きであることから井泉跡と一体で機能していたものであったと想定される。

遺物出土状況

踏み石からみて井泉の背後にはヤナギ属の根株が残っており、この根元まわりには須恵器の坏、皿がまとめて廃棄された状況で出土している。この他には井泉跡背後から南にかけて墨書き土器や木製品などが多く出土していることが注目される。

SE01関連遺物（第20図）

墨書き土器・木製品以外の土器を掲載した。1～16、24は須恵器、17～23は土師器である。1はつまみを欠損する蓋で、口縁端部に内側に向かう短めのかえりを有する。2は高台付坏で体部は底部から外方に向かって直線的にのびるもので、高台は若干内側に貼り付けられている。3～6は坏身である。3～5の体部は内湾気味にのびるものであり、4は口縁端部がやや外方に屈曲するものである。6は体部が底部から外方に直線的にのびるものである。7～9は高台付皿でL口縁部は外反してのびる。高台は下方向に向かうものである。10、12～16は皿である。口縁部は外反してのびる。底部は欠損しているものが多いが、平らに近い。11は鉢で体部は外方に向いてのびるもので、口縁部は横方向に強く屈曲し、端部は平坦に近い。体部との境からやや横方向に張り出す低めの高台を有している。17は皿でL口縁部は強く外反するものである。18、19は高台付き皿で、18の口縁部は外反するもので、高台は低く下方に向いている。19は口縁部がやや内湾気味にのびるもので、高台は低く横方向に向いている。20～22は坏身で口縁部は外傾してのびるものである。23は小型の甌で「く」の字状の口縁部を有する。肩部中央がよく張るが底部を欠く。24は甌で口縁端部は外反し端部は厚みをもつ。肩部に退化した把手が付く。

井戸跡の性格

SE01の時期については、出土遺物から判断して8世紀後半～9世紀初頃頃と推定される。

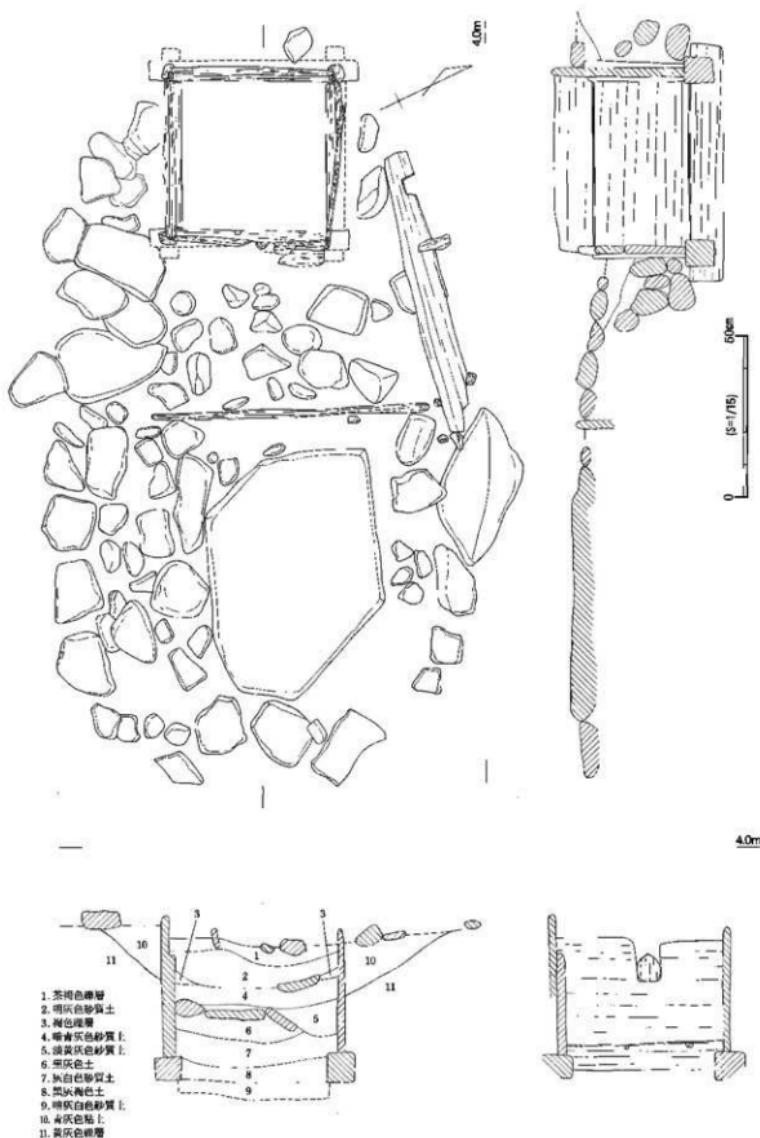
本遺構は湧水点に設置され、井枡からあふれ出た水は切り込みから外へ流れ出し、外枡の槽内に溜まる構造になっている。井泉前面に設けられた踏み石に立って、外枡に溜まった水を汲み上げたと考えられ、一般の集落にみられる生活用の井戸とは様相が異なっている。このことから推測すれば祭祀等に関連した特殊な用途が想定される。



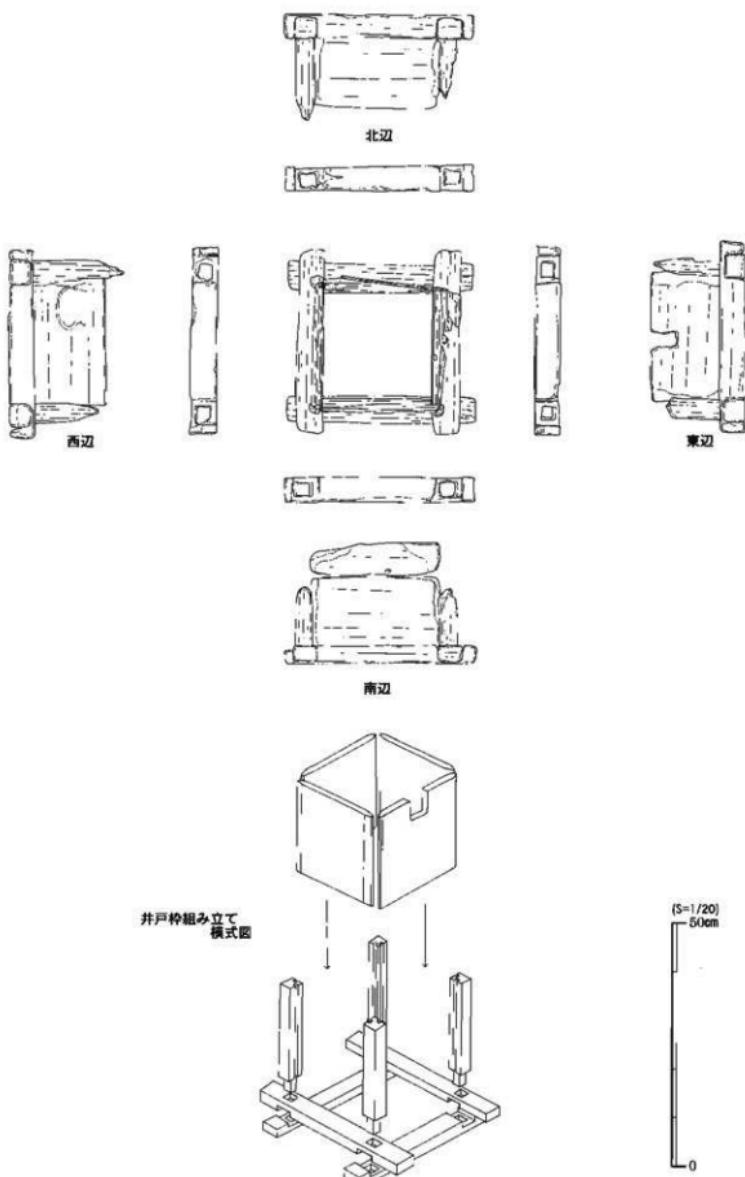
第15図 SD 16 - SE 01実測図



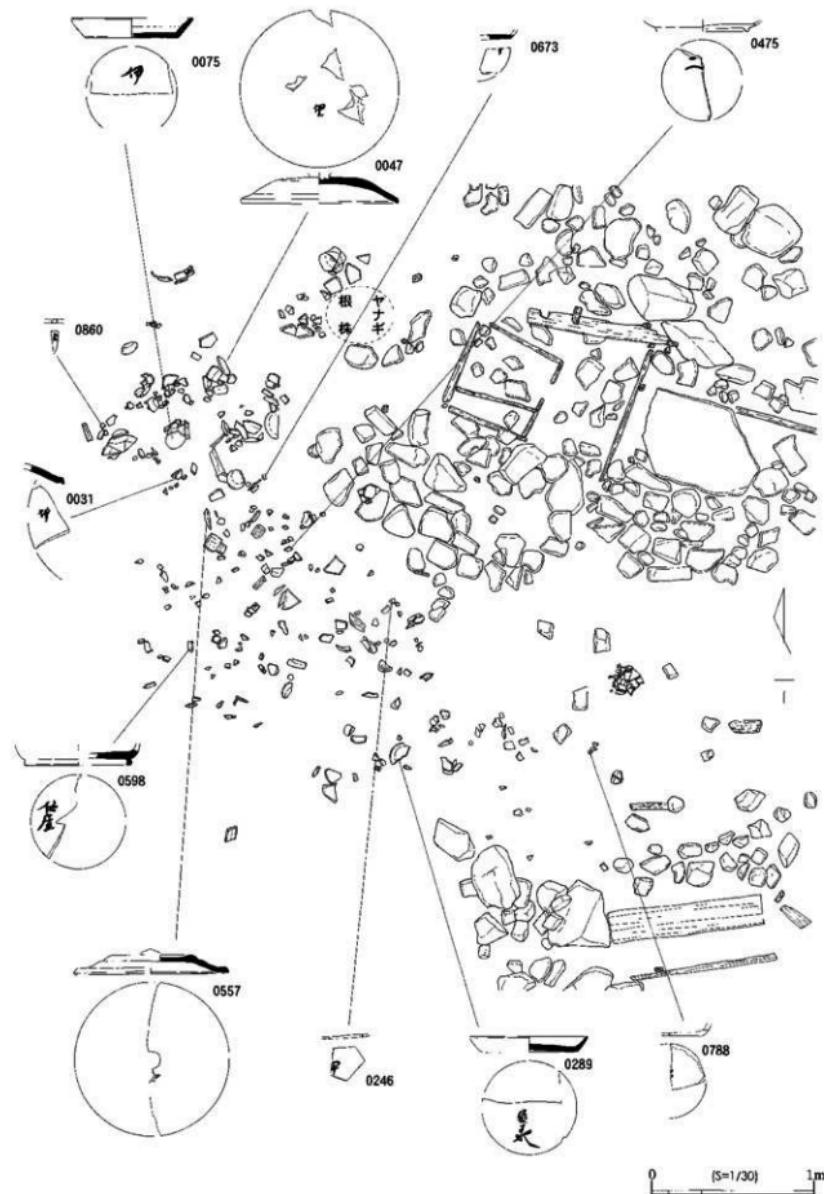
第16図 SE 01平面図



第17図 SE 01実測図



第18図 SE01井戸枠実測図



第19図 S E 01遺物出土状況

写真図版一一 奈良・平安時代の遺構／I区／石敷き井泉 (SE01)



SE01とSD16全景（南から）

写真図版一二 奈良・平安時代の遺構／I区／石敷き井泉 (SE01)



手前から踏石・井枡・根株（東から）

写真図版一三 奈良・平安時代の遺構／I区／石敷き井泉 (SE01)



手前から井枠・踏石

写真図版一四 奈良・平安時代の遺構／I区／石敷き井泉（SE01）



上：SE01検出状況（東から）

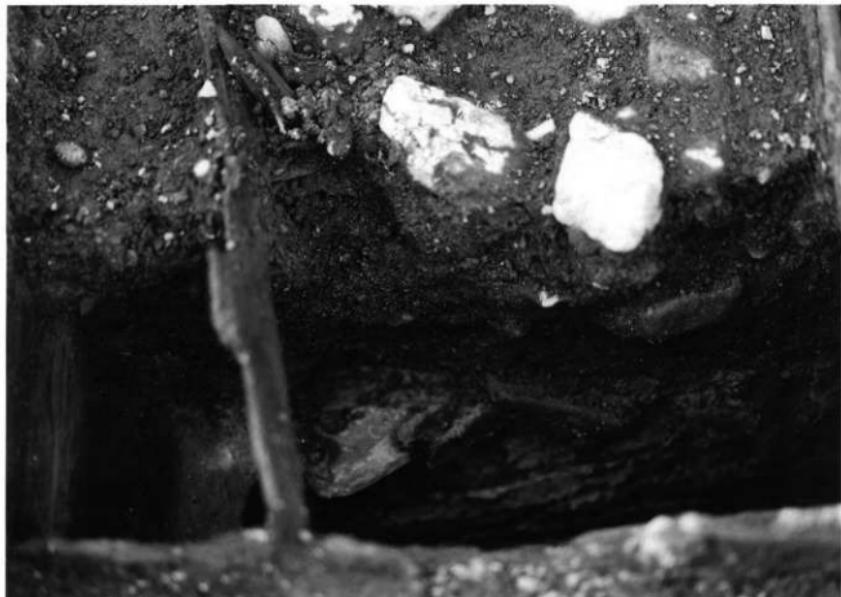
下：

写真図版一五 奈良・平安時代の遺構／I区／石敷き井泉 (SE01)



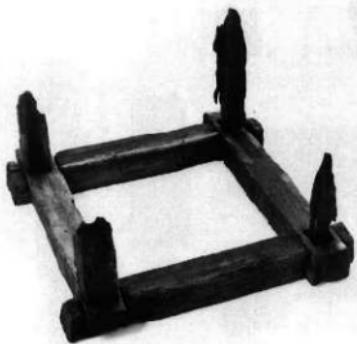
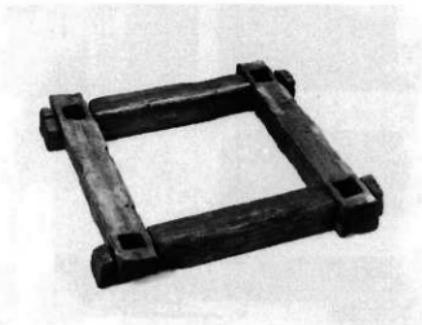
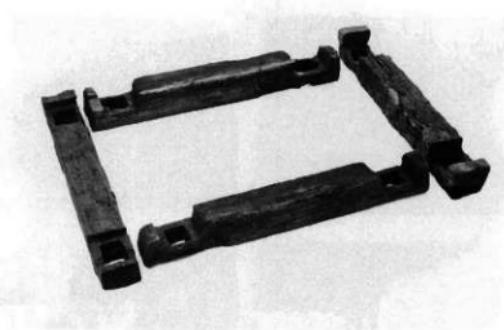
上：根株（予前）と SE01（西から）
下：土器出土状況

写真図版一六 奈良・平安時代の遺構／I区／石敷き井泉 (SE01)



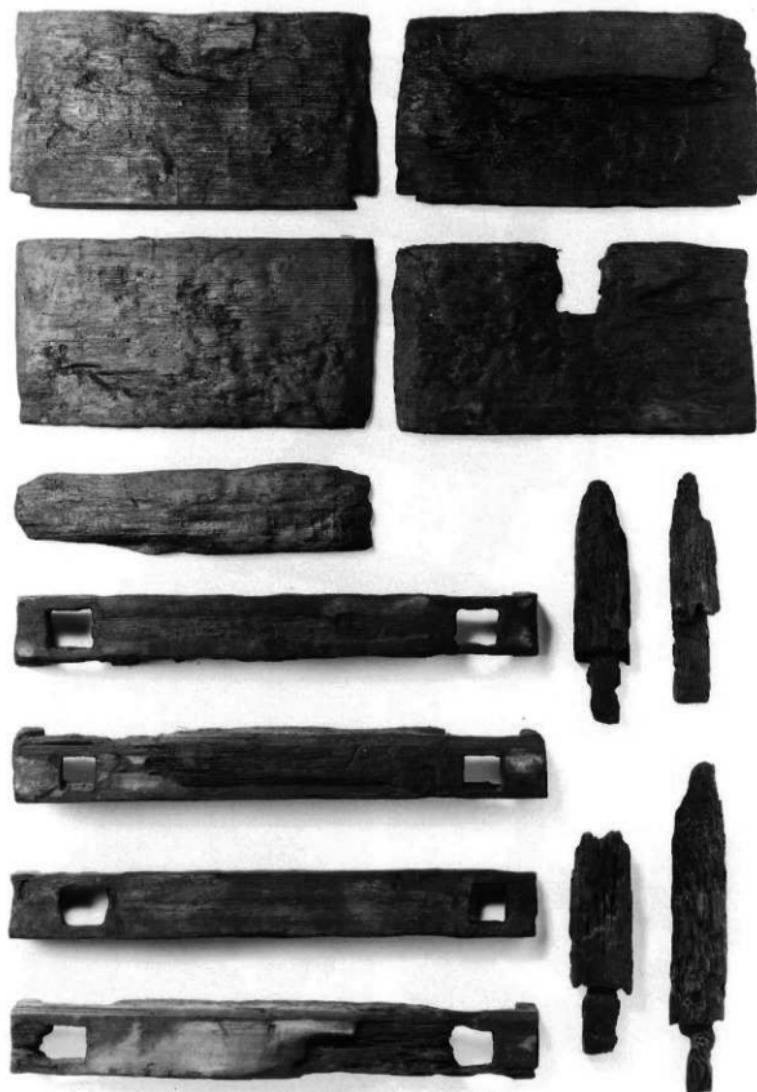
上：井枡内土層断面
下：井枡完成状況

写真図版一七 奈良・平安時代の遺構／I区／石敷き井泉 (SE01)



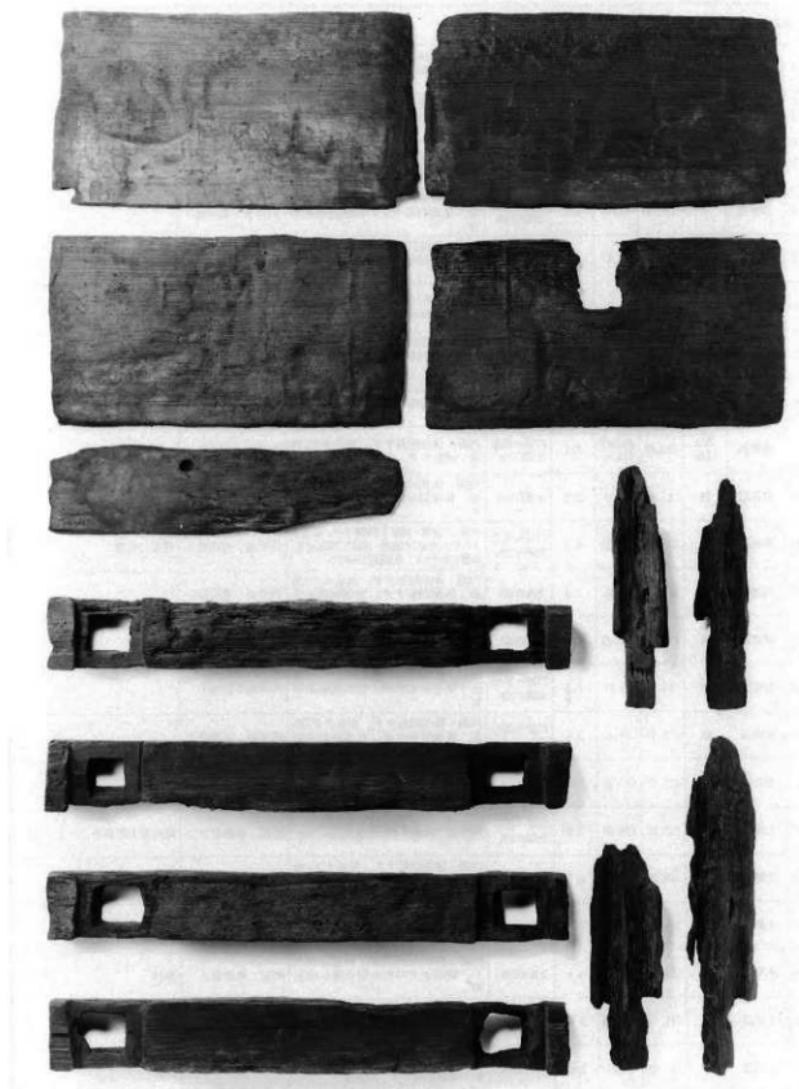
井枡の構造

写真図版一八 奈良・平安時代の造構／I区／石敷き井泉 (SEO1)



井枠材展開写真

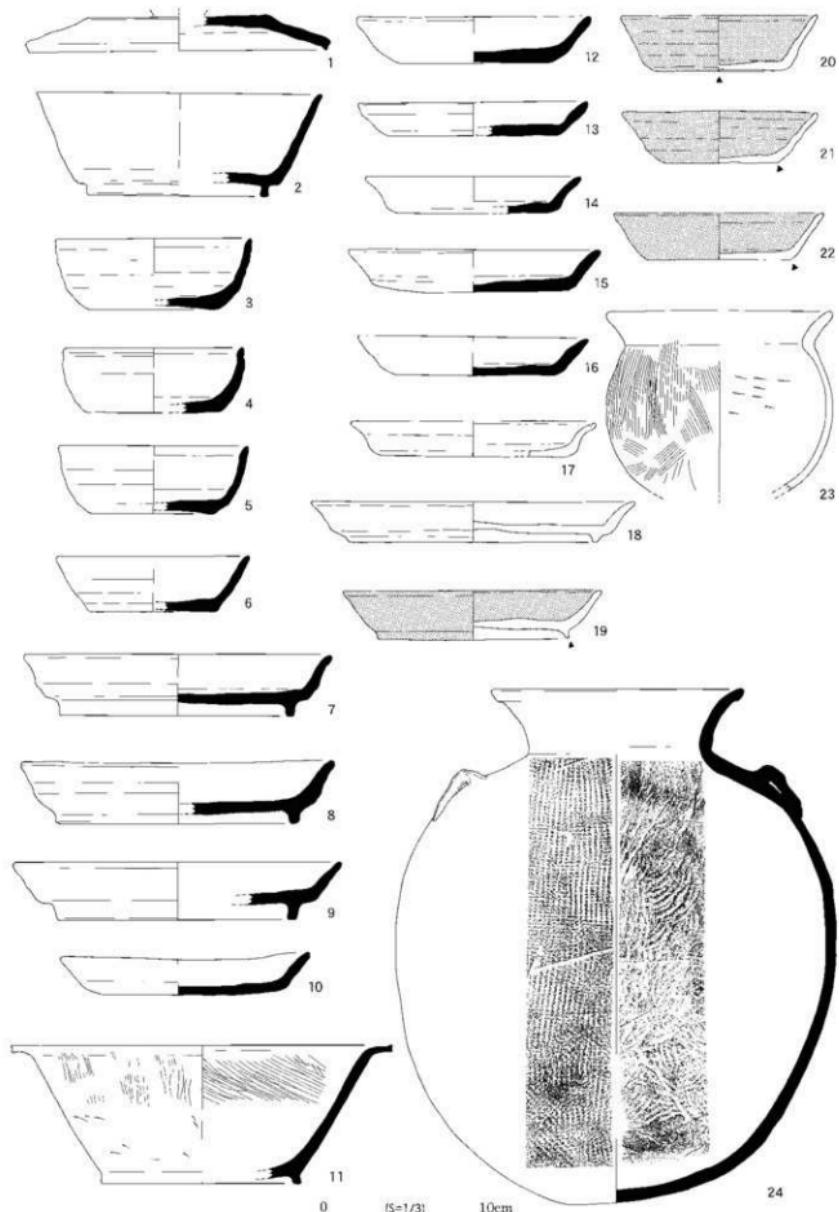
写真図版一九 奈良・平安時代の遺構／I区／石敷き井泉 (SE01)



井枠材展開写真

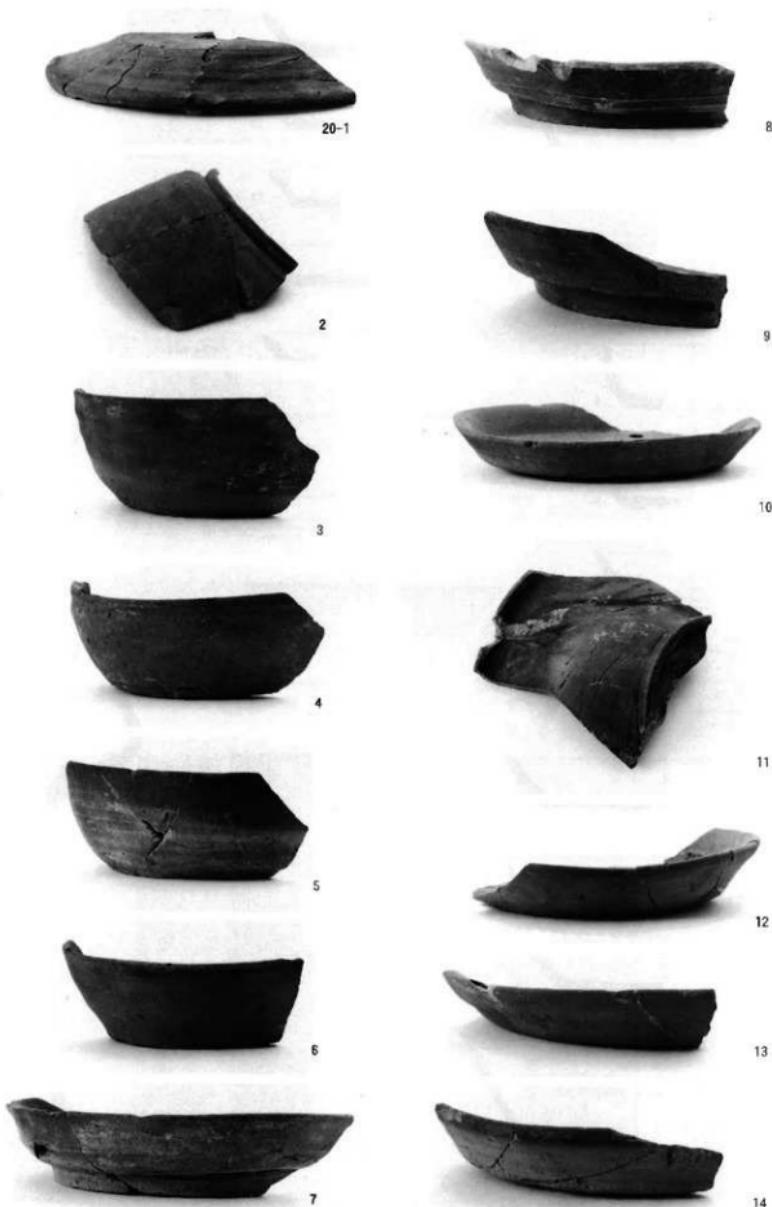
第5表 SE01関連遺物 観察表

番号	種別	縦幅	口径	底径	器高	残存率	調査	色調	説文・備考
第20回									
1	須恵器	蓋	(18.0)		2.1	全体の30%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ/外面：口縁部回転ナデ、頂部回転糸切り	内外面：灰色2	
2	須恵器	高台付環	(17.4)	(10.8)	6.3	口縁～底部全周の25%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色1	
3	須恵器	环	(11.8)	(7.6)	4.4	口縁全周の1/4内面：口縁部回転ナデ/外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色2		
4	須恵器	坏	(10.8)	(8.4)	4.0	口縁～底部全周の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色3	
5	須恵器	坏	(11.6)	(7.4)	4.2	口縁～底部全周の20%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰褐色4	
6	須恵器	坏	(11.8)	(7.8)	3.4	全体の40%	内面：回転ナデ/外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色1	
7	須恵器	高台付環	(18.6)	高台径(14.2)	3.8	全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰褐色2	
8	須恵器	高台付環	(18.8)	高台径(14.0)	3.9	全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内面：灰色1 外曲：灰色2	
9	須恵器	高台付環	(19.8)	高台径(14.4)	3.1	口縁～底部全周の20%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外曲：口縁ナデ	内外面：灰色1	
10	須恵器	环	15.2	12.0	2.3	全体の80%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色1	重みあり
11	須恵器	体	(23.2)	(12.2)	8.5	口縁～底部全周の20%	内面：口縁部、体部下半回転ナデ、体部上半ケツ/外曲：口縁部、体部下半回転ナデ、体部上半ケツ、底部回転糸切り	内外面：青灰色1	外面に火葬
12	須恵器	盖	(14.0)	(9.2)	2.9	全体の40%	内面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：青灰色1	
13	須恵器	盖	(14.0)	(10.2)	2.0	全体の20%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色1	
14	須恵器	盖	(13.2)	(9.2)	2.3	口縁～底部全周の20%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外曲：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰色1	
15	須恵器	盖	(15.4)	11.8	2.5	口縁全周の30%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外曲：体部回転ナデ、底部回転糸切り	内外面：灰褐色3	
16	須恵器	盖	(17.0)	(10.4)	2.4	全体の25%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外曲：体部回転ナデ、底部回転糸切り	断面：灰色1	
17	土師器	盖	(15.0)	(11.0)	2.2	口縁～底部全周の20%	内面：回転ナデ	断面：粗開色3	畿内産土師器か
18	土師器	高台付環	(19.7)	高台径(15.0)	2.5	全体の25%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外面：体部回転ナデ、底部ナデ及び指痕压痕	内外面：粗褐色3	
19	土師器	高台付環	(15.6)	高台径16.5	3.0	全体の60%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外曲：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ケツ、横頭止痕	断面：粗開色2	赤彩
20	土師器	坏	(11.8)	(8.6)	3.4	全体の25%	内面：回転ナデ/外曲：体部回転ナデ、底部ナデのため切り返し痕不明	断面：粗開色2	赤彩
21	土師器	坏	(11.8)	(9.2)	3.2	口縁～底部全周の10%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ/外曲：体部回転ナデ、底部ナデの為切り返し痕不明	断面：粗開色1	赤彩
22	土師器	坏	(12.8)	(8.8)	2.9	全体の20%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ/外曲：体部回転ナデ、底部ナデ	断面：粗開色2	赤彩
23	土師器	壳	(13.6)			口縁全周の40%	内面：口縁ナデ、底部以下ケツリ/外曲：口縁ナデ、底部以下トハケツ	内外面：粗褐色1	
24	須恵器	盖	(15.3)		31.6	全体の80%	内面：口縁～頂部回転ナデ、底部以下平尾タキメ	内面：青灰色2 外曲：青灰色1	内面口縁～頂部及び外曲口縁～底部に白色自然釉



第20図 S E 01出土遺物実測図

写真図版一〇 SE01出土遺物



写真図版二一 SE01出土遺物



20-15



22



16



17



23



18



19



24



20



21

第4節 果実埋納土坑 (SX01)

SX01はSB05の北東約2mの位置で検出した、土師器甕に果実を充填して埋納した特殊な土坑である。検出時は土器だまりと考えられたが、精査したところ土坑の中に整然と甕が埋められていることが判明した。

土坑の平面形は円形を呈しており、規模は径約60cm、深さは18cm程度遺存している。

甕は5個体が土坑内に甕の5の目状に配置され密接して設置されているが、これを固定するためと思われる板材が土坑底面に數ヵ所打ち込まれていた。残存する板材の規模は長さ10~15cm、幅6cm前後を測る。この板材の1つには墨書き(1号木簡)があり、この埋納土坑の用途等に関することが書かれていた可能性もある。木簡の記載内容等については、第2分間で詳しく述べている。

甕内部には果実の種とその上には植物の葉が被せられていた。この植物遺体は流通科学大学の南木勝彦教授の鑑定によると、モモ、スモモ、ナシの3種類で、いずれもネズミ等による食害ではなく、完形であることから「果実」の状態で甕に入れたものであることが分かっている。周辺にはSB05以外の建物の形跡がなく、建物内に設置されたものでなく露天の状態であったと判断される。また動物による食害を受けていないことから、果実を入れた甕は土坑内に設置後、直ちに埋められたものと推定されよう。

それぞれの甕に入っていたモモ、スモモ、ナシの個数と総量は下表のとおりであるが、甕1、2は破損が著しかったため内部の残量が少量であった。ただ、他の甕の状況から判断すれば、果実だけではほぼ満杯になっていたと考えられる。

容器となった土師器甕は単純口縁の中型のものであるが、胎土、焼成、器形が当地域の集落から出土する一般の煮炊き用とはやや異なる特徴をもっている。1は底部のみ残存し、丸みを帯びている。2は口縁端部が上方に肥厚し、胴部はやや長胴形を呈している。底部に墨書きで「〇」が描かれている。3は胴部が丸みを帯び、底部に穿孔を有する。4は胴部が丸く底部はややひらべったい形状のものである。5は若干小さめのもので、胴部中央がよく張る。いずれも内面ヘラ削り、外面にハケ目を施している。

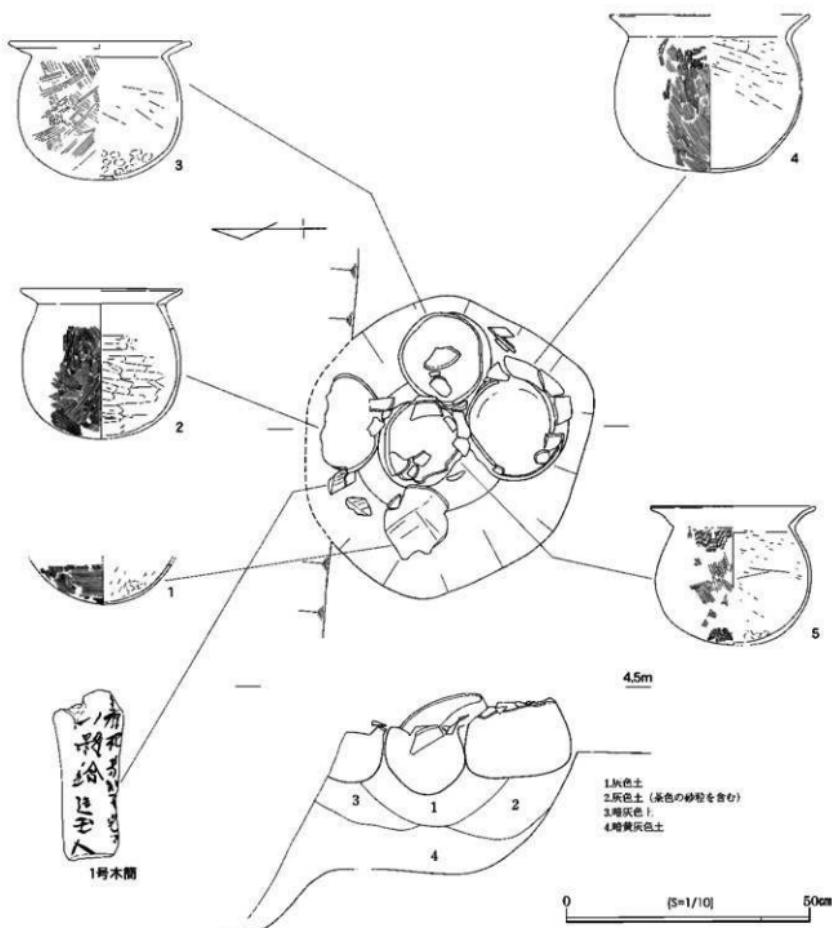
時期と性格

上記の土師器は他地域からの搬入の可能性もあり時期を確定することは難しいが、検出面がSB05と同じ基盤面であることから判断すれば、8世紀中頃~9世紀前葉と推測される。

性格については、果実を入れた甕を土坑内に設置後、直ちに埋め戻された祭祀遺構と考えられるが、このような果実埋納遺構は他に例がなく、全国初の出土であることから非常に価値が高いと考えられる。また、祭祀・信仰の具体的な内容、行為の目的については、出土例や文献資料等の手がかりがなく評価は難しいが、SB05からみて鬼門の方位に位置していることから、この建物との関連が指摘できる。地鎮などの建物建設時の行為、あるいはSB05を中心に行われた一連の祭祀行為のなかで使用され設置されたものと考えられよう。

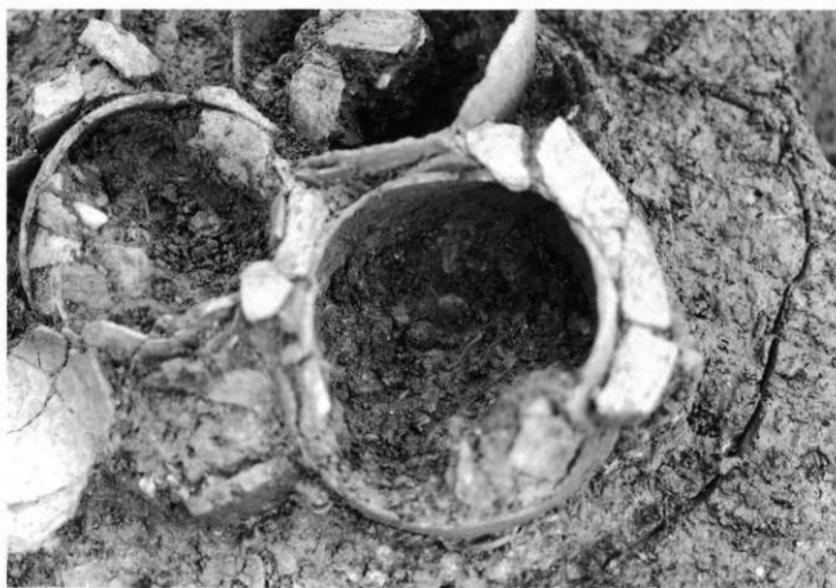
第6表 SX01果実種子核 数量表

	モモ	スモモ	ナシ	計
甕1	6	0	0	6
甕2	11	1	0	12
甕3	20	2	13	35
甕4	10	14	16	40
甕5	10	3	7	20
計	57	20	36	113



第21図 SX01実測図

写真図版二二 奈良・平安時代の遺構／I区／果実埋納土坑 (SX01)



上：検出状況
下：種子核出土状況

写真図版二三 果実埋納土坑(SX01) / 蓋内の種子



モモ



スモモ



ナシ



第7表 SX01出土遺物 観察表

番号	種別	器種	口径	蓋厚	底高	残存率	調査	色調	施文・備考
第22回									
1	上鉢面	甕			底部のみ全層の10倍	内面：ケズリ、指頭压痕/外面：ハケメ	内外面：灰褐色2		
2	上鉢器	甕	(20.0)		全体の30%	内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ、指頭压痕/外面：口縁部ナデ、体部一底部ハクメ	内外面：灰褐色1		底部に「○」の墨痕
3	土鉢器	甕	(22.4)		16.9 全体の70%	内面：口縁部ナデ、底部上半ヘラケズリ、底部下半～底部ナデ、指頭压痕/外 面：口縁部ナデ、底部～底部ハケメ	内外面：棕褐色2		底部穿孔あり
4	上鉢器	甕	(24.5)		19.35 全体の30%	内面：口縁部ナデ、側部上半ヘラケズリ、側部下半～底部ナデ、指頭压痕/外 面：口縁部ナデ、底部～底部ハケメ	内外面：棕褐色1		
5	上鉢器	甕	(20.2)		17.2 全体の80%	内面：口縁部ヨコナデ、側部上半 ハケズリ、下半～底部ケズリ後 ナデ、指頭压痕/外面：口縁部ヨコ ナデ、指頭压痕/外 面：ハケメ	内外面：灰褐色3		外表面部の一部に黒斑 ナデ、体部ハケメ



第22図 S X01出土遺物実測図

写真図版二四 果実埋納土坑 (SX01) 出土遺物



22-1



3



2



4



5



土坑底面の板材

第5節 木簡出土遺構

木簡の多くは遺構面からやや浮いた状態で包含層中から出土したものが多いが、木簡が集中して出土した遺構もある。代表的なものとしては上坑・くぼみ状遺構のSX10、SX50の2箇所があげられる。遺構名は調査時のものをそのまま記載している。本節では遺構の概略について述べ、出土した木簡の内容や、遺構の解釈等については第2分冊第7章第1節「木簡の出土状況」で詳しくふれている。

1. SX10

SX10は調査区中央に位置し、北側半分を失っているため全形を把握することはできないが、現状から推定すると、隅丸方形の平面形状をなす浅いくぼみ状の遺構と考えられ、東西1.6m、南北1.4m以上、深さ20cmの規模を測る。

遺構の埋土中からは木簡10点と須恵器が少量出土したほか、木簡状木製品(W050)、横櫛(W079)、木鍼(W165)が含まれていた。

出土した木簡は遺構の中央部分に集中して検出された。これらの木簡は「伊福置マ自安万」、「美舎人魚當」などの「伊」・「美」十人名が記載されているもので、荷物に付随する付札木簡と推定される。また、裏面に記載の及ぶものは認められない。

出土した須恵器は2点あり、第23図1は高台の付く壺で、高台から直線的に斜めに立ち上がる口縁部を有し、高台は下方に張り出す。2は高台のない壺で、口縁部は外反気味にのびるものである。

遺構の性格と時期

遺構の性格としては付札木簡ばかりであることから、物品から外されてまとめて廃棄されたものの可能性も考えられるが、SB05のような祭祀的要素のある建物の西側に隣接するような位置に存在するため、その配置関係から廃棄上坑としての機能を有していたかは判断できず、自然要因によって堆積した可能性も考えなければならないであろう。

遺構の時期については出土遺物から8世紀中頃～9世紀前葉と推定される。

2. SX50

SX50は調査区北東側で検出した土坑状の遺構である。東西2m×南北6mの範囲に広がる不整形な浅いくぼみ状を呈しており、深さは10cm程度が遺存する。遺構内からは木製品や多量の木屑等とともに木簡および木簡の削肉20点ほどが出土している。木製品の内訳は、形代(W004、W005)、木簡状木製品(W010)、卜駄(W069)、槍崩(W081)、割物盤脚部(W106)、円形出物(W125、W130)、紡織貝糸巻(W143、W145)、建築材端材(W184)、棒状不明品(W206、W208、W223)であった。

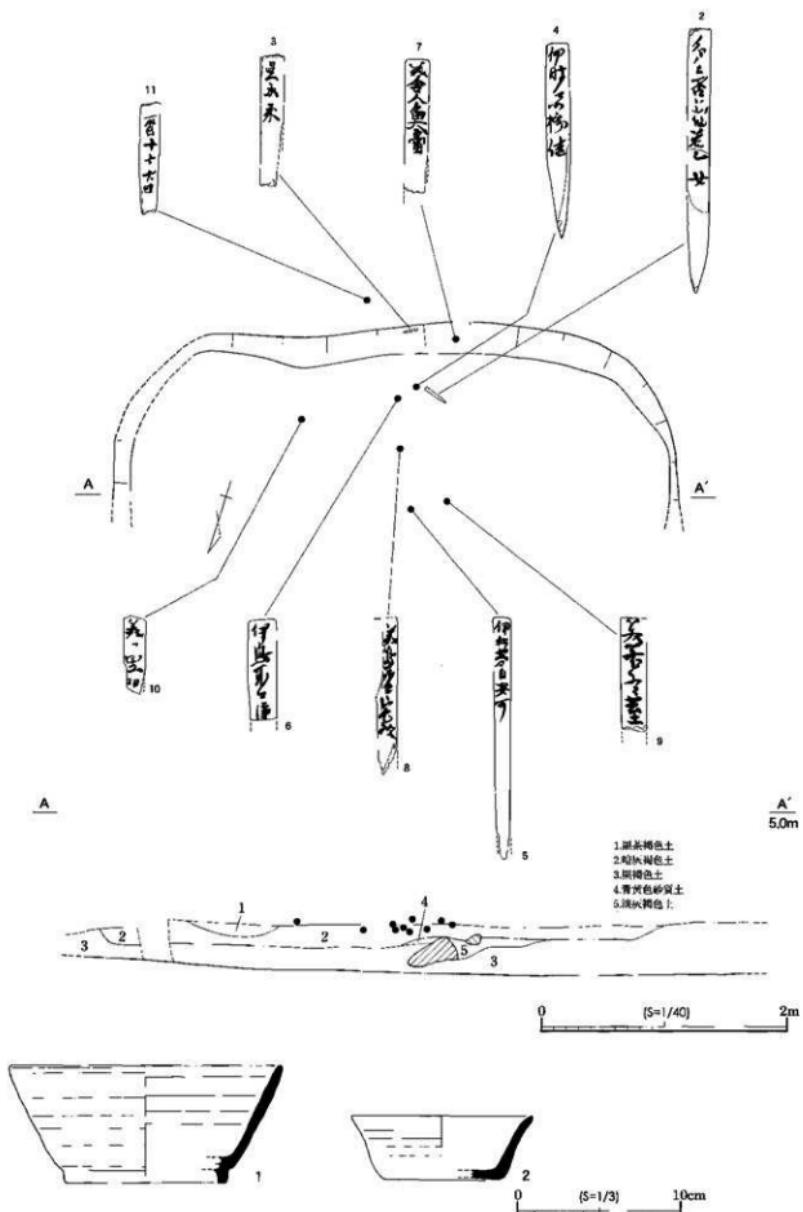
木簡の多くは遺構中央付近に集中して認められた。また、この中央部分では木屑の細片や大鋸屑が多量に含まれていたため埋土を洗浄したところ多量の木簡削肉が検出された。

木簡の釈文は第3分冊に詳述するが、SX10出土木簡とは異なり、内容的には記録、帳簿等と推定されるものが主体である。

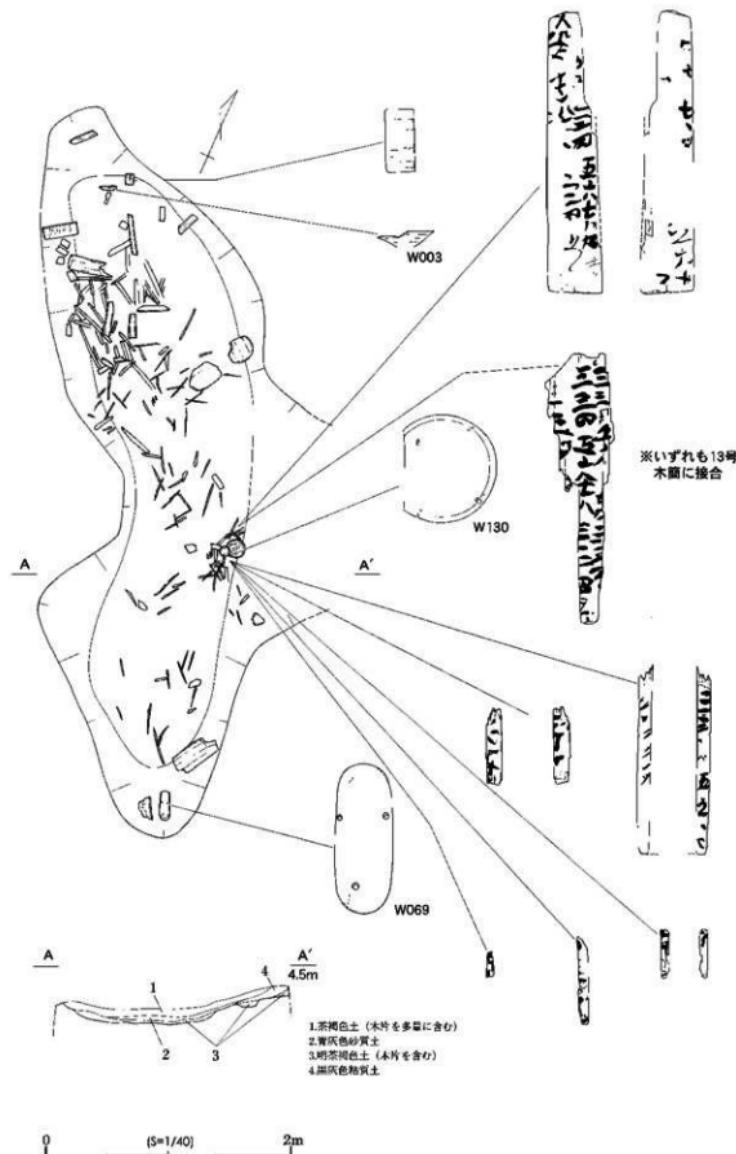
遺構の性格と時期

遺構の性格としては、遺構内には木屑などが多く含まれている点や焼成の認められるものがあることから、廃棄場所としての性格がうかがえる。木簡の内容などから推測すれば、文書管理等を行っていた部門が廃棄主体と想定できる。

遺構の時期については出土遺物から8世紀中頃～9世紀前葉と推定される。

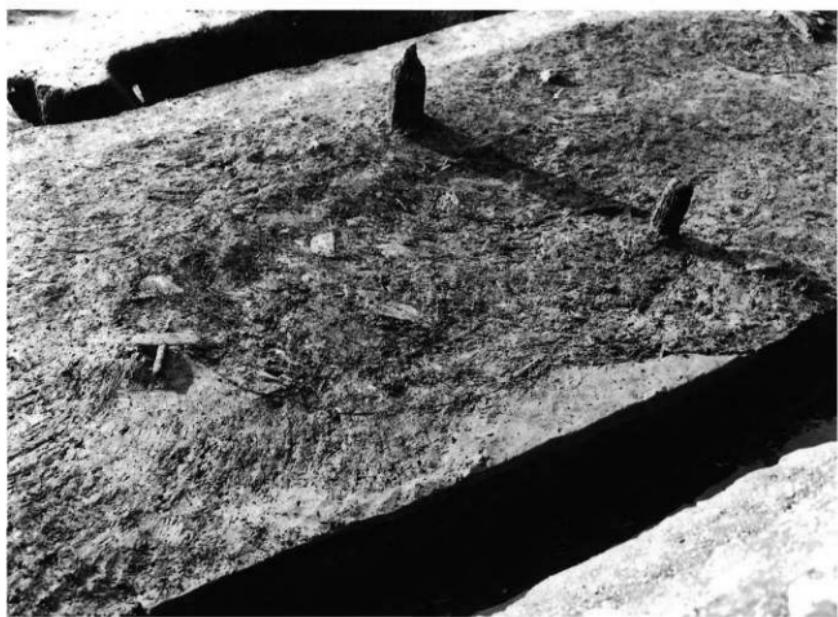


第23図 S X 10出土遺物実測図



第24図 S X50実測図

写真図版二五 奈良・平安時代の遺構／I区／木簡出土遺構



上：S X50上面検出状況
下：S X50遺物出土状況

第6節 土坑状遺構

七坑状遺構は規模の大きいものと内部に特殊な遺物を含むものを土坑状遺構とし、計4基検出した。

1. SK01

SK01は調査区の南西側に位置する土坑である。

上面は溝状遺構等によって削平を受けているが、現状での平面形は不整形で規模は東西約1.3m、南北約1.4m、深さ約10cmを測る。

遺構内には86.9kgに及ぶ多量の砂鉄が詰まった状態で検出されている。砂鉄の詳細については自然科学的分析（第18章第3節）を参照してほしいが、海浜で採取されたか、海生の堆積鉱床から採掘された砂鉄と推測されている。

この土坑は検出した状況から推測すれば、建物内に設置された形跡ではなく、露天の状態であったと考えられる。また、鍛冶窯・羽口を除けば周辺から製鉄廃棄の遺構、遺物も出土していないため、何の目的で砂鉄が置かれていたのか、何に使われたのか不明であり、鉄製座以外の用途で蓄積された可能性も考えなければならないであろう。

時期についても他に遺物が出土していないため明確には判断できないが、上面は溝状遺構に切られているため、建物遺構等と同時期頃と考えられる。

2. SK02

SK02は調査区の中央北寄り、SB09の北側に位置する土坑である。

平面形は楕円形を呈しており、規模は東西60cm、南北85cm、深さ20cmを測る。

遺構内には多量の貝殻が含まれていることから、貝を施した土坑であると考えられる。貝の多くはヤマトシジミであるが、サザエなどの大型の貝も含まれていた。

貝以外の動物遺存体や土器などが出土していないため、時期については不明である。

3. SK03

SK03は調査区の北東側、SB04の南寄りに位置する土坑である。

平面形は不整形で、規模は東西2m、南北1.4m、深さ約15cmを測る。

遺構内から遺物が出土していないため時期や性格については不明である。

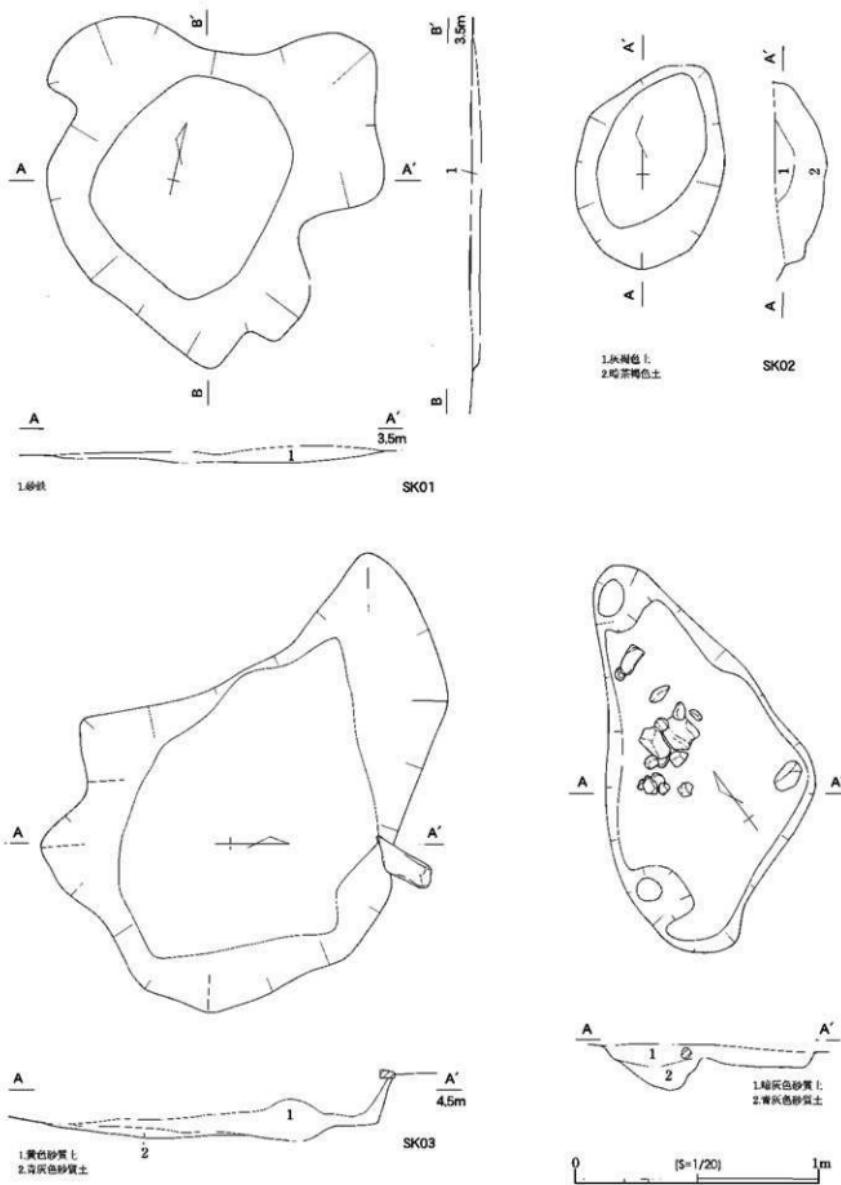
4. SK04

SK04はSB04の南隣、SK03の東隣に位置する土坑である。

平面形は不整形な楕円形状を呈し、規模は長軸3.1m、短軸1.8m、深さ20~40cmを測る。

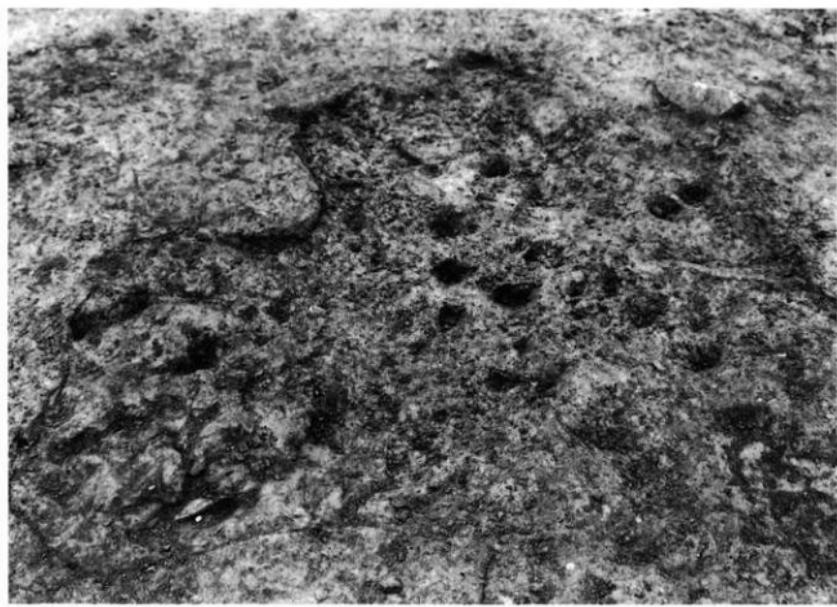
遺構内には拳大~25cm程度の礫が中央から北側にかけて認められたが、何の目的で置かれているのか把握できなかった。また、遺物は須恵器の小片が出土している。

この土坑の性格については不明であり、時期については遺物は図示できなかったが出土遺物から8世紀~9世紀頃と考えられる。



第25図 SK01～04実測図

写真図版二六 奈良・平安時代の遺構／I区／土坑状遺構



上：SK01検出状況

下：SK01完掘状況

第7節 溝状・畝状遺構

溝状・畝状遺構は調査区の南側下半と北東側で34本検出した。

遺物が出土した溝について個別に記述することとしたいが、遺物は下層の包含層中のものの可能性もある。その他の溝については計測表に記すこととする。

溝群1～3は建物跡や井戸跡などの遺構の上面で検出しているため、建物等が発掘した後に作られたものが多いと判断される。位置関係から3つの区画に分かれていると認識し、それぞれ溝群として扱う。溝群1は調査区西側から15m東の範囲に位置する溝群である。溝群2はSE01の東西に位置する溝群、溝群3は調査区北東側のSB04を囲むように検出した溝群である。それぞれの溝群は様相が異なっており、溝群3は通常の溝状遺構と考えられるが、溝群1、2は規則性がうかがえ通常の溝というより畝間溝の可能性も考えられる。

1. 溝群1

溝群1としたものは南北方向にのびる溝を中心としたものである。建物跡等の上面で検出した。

規模は長さ2～16m、幅20～80cm、深さ10cm前後を測るもので構成されている。溝の間隔は1m前後とやや狭く、密集した感じである。

時期については建物跡等の上面で検出していることから、10世紀頃と推定される。

2. 溝群2

溝群2は溝群1の東隣の範囲に位置し、東西方向にのびる溝である。建物跡等の上面で検出した。

規模は長さ2.3～14m、幅20～70cm、深さ15cm前後を測るもので構成されている。溝の間隔は2m前後と溝群1と比較して若干広い。

時期については溝群2と同様で10世紀頃と推定される。

3. 溝群3

溝群3は調査区北東に位置する東西と南北にのびる溝である。建物跡の上面で検出したものもある。

規模は長さ1.7～13m、幅40～180cm、深さ10～50cmを測り、他の溝群と比較すると若干規模が大きいもので構成されている。

時期については建物跡と同時期の8世紀中頃～9世紀前葉と、10世紀頃の2時期ある。

4. S D 1 6

SB05から南に向かって調査区外までのびる溝で、途中SE01と接している。規模は長さ21m以上、幅1.1m、深さ30～50cmを測る。断面形状は「U」字状を呈し、埋土上層は土石流による疊層が覆っているが、下層には砂層が堆積しており、機能的には水が流れないと判断される。

性格についてはSB05、SE01と一体的なものと考えれば、祭祀的な用途をもった溝と推定される。時期についても8世紀中頃～9世紀前葉と思われる。

遺物はSE01の項で図示したもの以外にSB05寄りで須恵器が1点出土している。第30図1がそれで須恵器の坏身である。口縁部は内湾気味ののびるもので、底部は回転糸切り痕が残る。

5. S D 2 3

溝群2の南端で検出した溝である。規模は長さ9m、幅約50cm、深さ16cmを測り、平面形は二股状を呈している。遺物は埋土から須恵器、土師器が出土している。

第30図2～5がSD23の出土遺物である。2は犬井部からつまみを欠損する須恵器の蓋で、口縁端部に下方に向く小さなかえりをもつ。3は須恵器の高台付坏で口縁部はやや外反気味にのび、高台は低く横方向に開く。4は須恵器の高台付皿で口縁部は外反してのび、高台は体部との境から若干内側に貼り付けられ、下方向に聞く。5は土師器の甌で口縁部は「く」の字状に聞く。

6. S D 2 5

溝群1の南端で検出した溝である。規模は長さ4m、幅80～120cm、深さ15cmを測り、平面形はやや不整形を呈している。

遺物は第30図6の1点が出上している。須恵器の坏身で体部は丸みを帯びてのび、底部は平らに近い。

7. S D 2 6

溝群2の中央付近に位置する溝でSD23から北に向かってのびた後、西側に屈曲してのびる。規模は長さ14m、幅40～70cm、深さ15cmを測る。

遺物は第30図7の1点が出上している。土師器の坏身で広い底部から外反気味にのびる体部をもち、赤彩が施されている。

8. S D 2 7

SD16の東側、SB05の南側に位置する溝である。規模は東端を欠くが長さ2.5m、幅30cm、深さ18cmを測る。

遺物は第30図8～10の3点が出土している。8は須恵器の坏身で体部は丸みを帯び、口縁部は若干外反する。9は須恵器の高台付き皿で口縁部は外反してのび、高台は体部の境から内側に貼り付けられ、やや内側に向いている。10は底部を欠損する須恵器の鉢で、口縁部は外方に屈曲する。

9. S D 3 1

溝群3でSB01の北側に位置する東西方向にのびる溝である。規模は長さ13m、幅180cm、深さ20～50cmを測る。

遺物は第30図11～14の4点が出土している。11は須恵器の蓋で犬井部には宝珠状のつまみが付き、口縁端部に小さめのかえりをもつ。12は土師器の坏身で口縁部は外傾してのびる。内外面に赤彩が施されている。13、14は土師器の皿で13の口縁部は外傾してのび、14はやや直立気味にのびて端部付近で外反する。内外面に赤彩が施されている。

10. S D 3 2

溝群3でSB04の東側に位置し、SD31によって北側を切られているが、南北方向にのびる溝である。規模は長さ6m、幅120cm、深さ15cmを測る。

遺物は第30図15～17の3点が出土している。15はつまみを欠損する須恵器の蓋で口縁部は外反気味に開き端部に小さなかえりをもつ。16は須恵器の坏身で内湾気味にのびる体部をもち、底部は平らに近い。17は須恵器の皿で口縁部は外反してのび、底部は平らに近い。

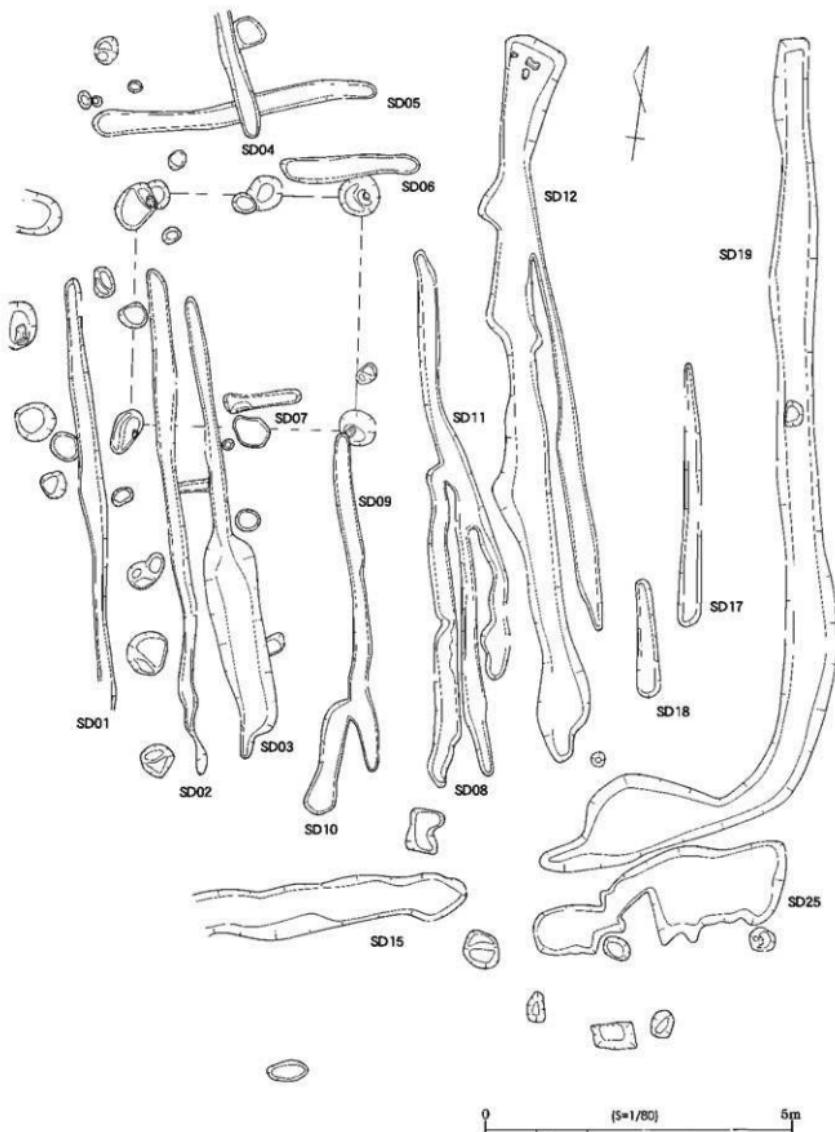
11. S D 3 4

溝群3でSB04の西側に位置する南北方向にのびる短い溝であるが、土坑の可能性もある。規模は長さ1.7m、幅40～70cm、深さ20cmを測る。SD33と重なるように検出された。

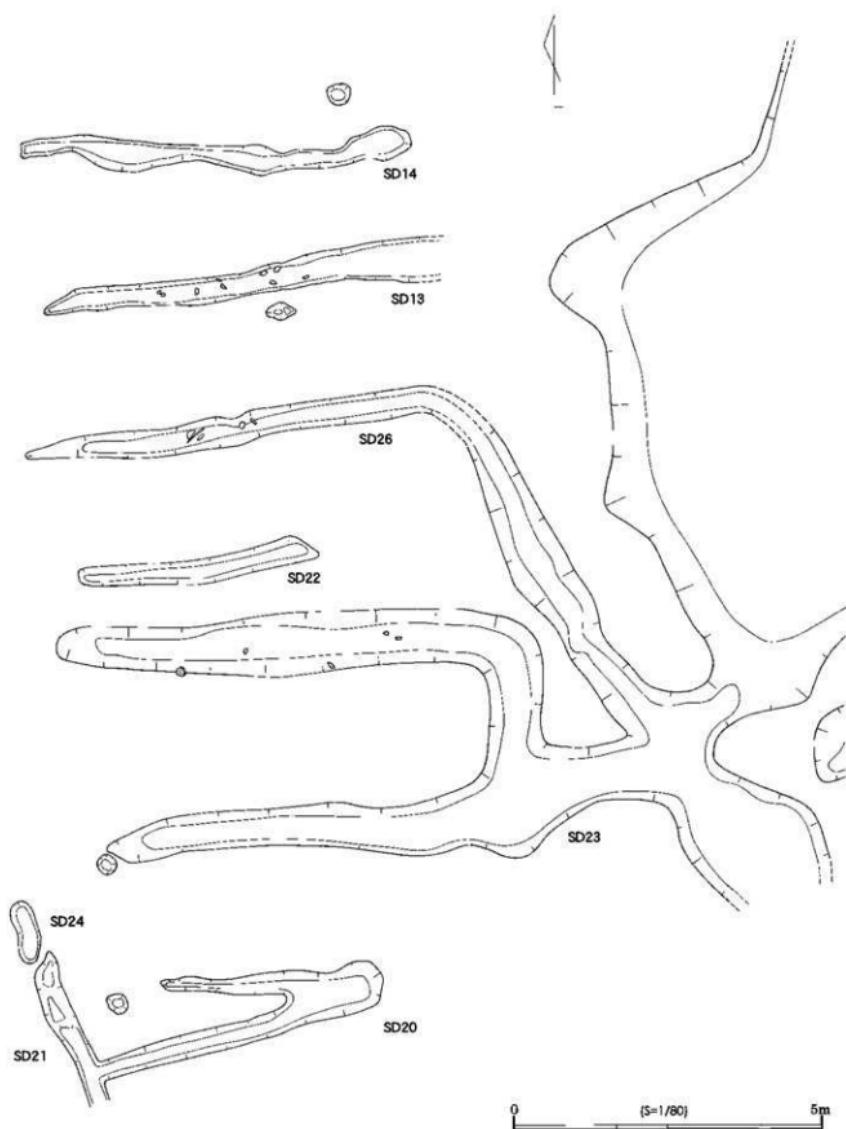
遺物は10点以上出土したが、図示できたものは第29図1～4の4点である。1は須恵器の蓋で変形が著しいが擬宝珠状のつまみをもち、口縁端部に下方に屈曲する小さいかえりをもつ。2は須恵器の坏身で口縁部は外傾してのびるもので、底部は平らに近い。3、4は須恵器の皿で3の口縁部は外反してのび、4は外傾してのびるもので、底部は平らに近い。

第8表 溝状遺構計測表

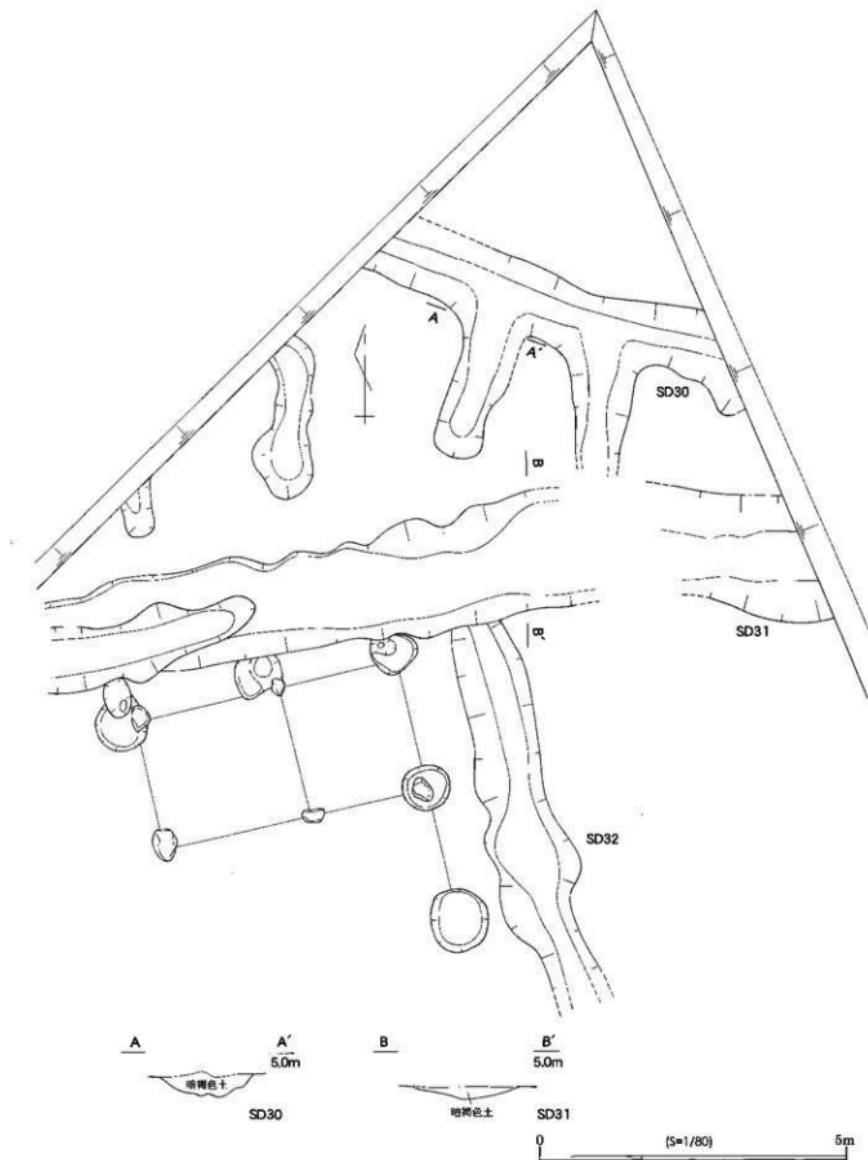
遺構名	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	方 向	備 考
SD01	7.0	20~40	8	南北	
SD02	8.5	20~40	10	南北	
SD03	7.6	20~80	10~15	南北	南側が広がる。腐植土あり
SD04	2.0	30	10	南北	
SD05	4.6	20	8	東西	
SD06	2.0	35	5	東西	
SD07	1.2	20	10	東西	
SD08	5.0	30	10	南北	
SD09	5.4	30	8	南北	
SD10	2.0	35	10	南北	
SD11	8.4	20	10	南北	
SD12	12.0	40~80	12	南北	
SD13	6.0	20~60	15	東西	
SD14	6.0	20~40	15	東西	
SD15	4.4	80	10	東西	
SD16	21.0	110	30~50	南北	S E 0 1 と付隨。遺物出土
SD17	4.0	20	8	南北	
SD18	2.0	20	5	南北	
SD19	16.0	40~120	15	南北	南側で西側に曲がる
SD20	4.8	20~50	15	東西	
SD21	2.0	20	10	南北	
SD22	4.0	25	10	東西	
SD23	9.0	60	16	東西	二股に分かれる。遺物出土
SD24	1.2	40	6	南北	
SD25	4.0	80~120	15	東西	遺物出土
SD26	14.0	40~70	15	東西	東西に延びた後南に曲がる。遺物出土
SD27	2.5	30	18	東西	遺物出土
SD28	2.3	30	15	東西	
SD29	3.0	35	15	東西	
SD30	6.0	120	40	東西	
SD31	13.0	180	20~50	東西	遺物出土
SD32	6.0	120	15	南北	遺物出土
SD33	9.0	40~80	12	南北	
SD34	1.7	40~70	20	南北	遺物出土



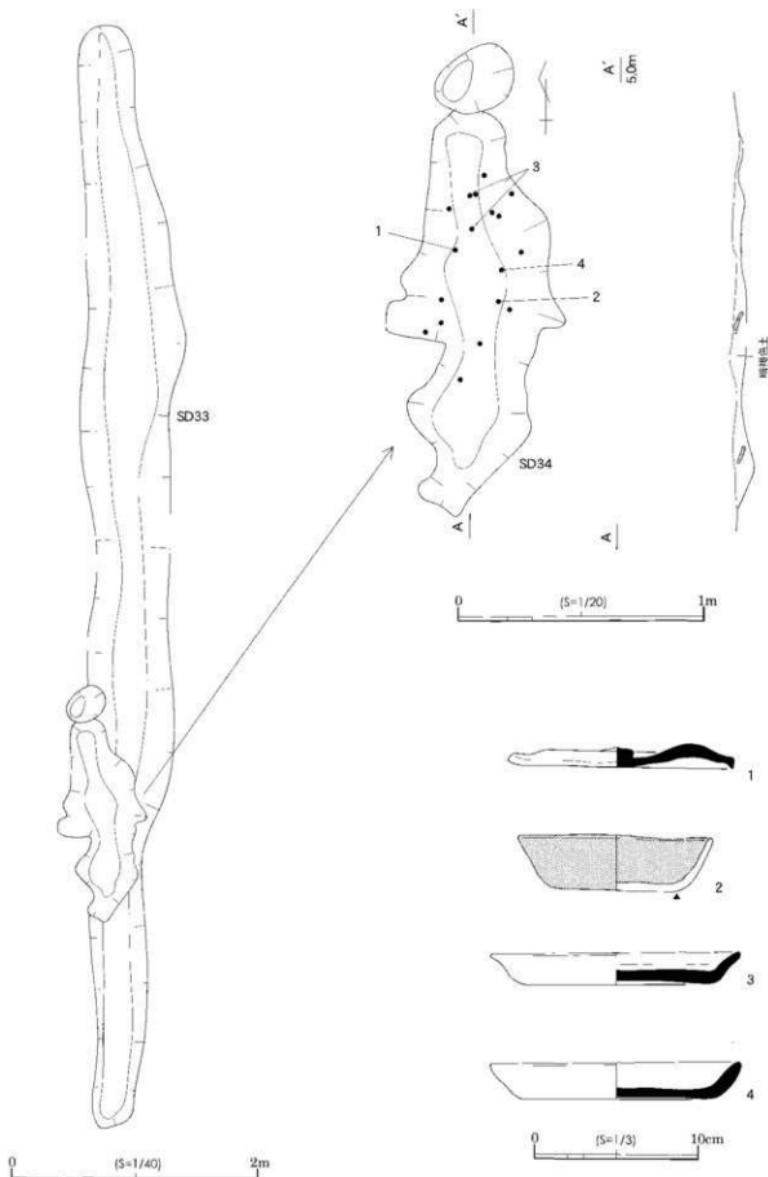
第26図 溝群1実測図



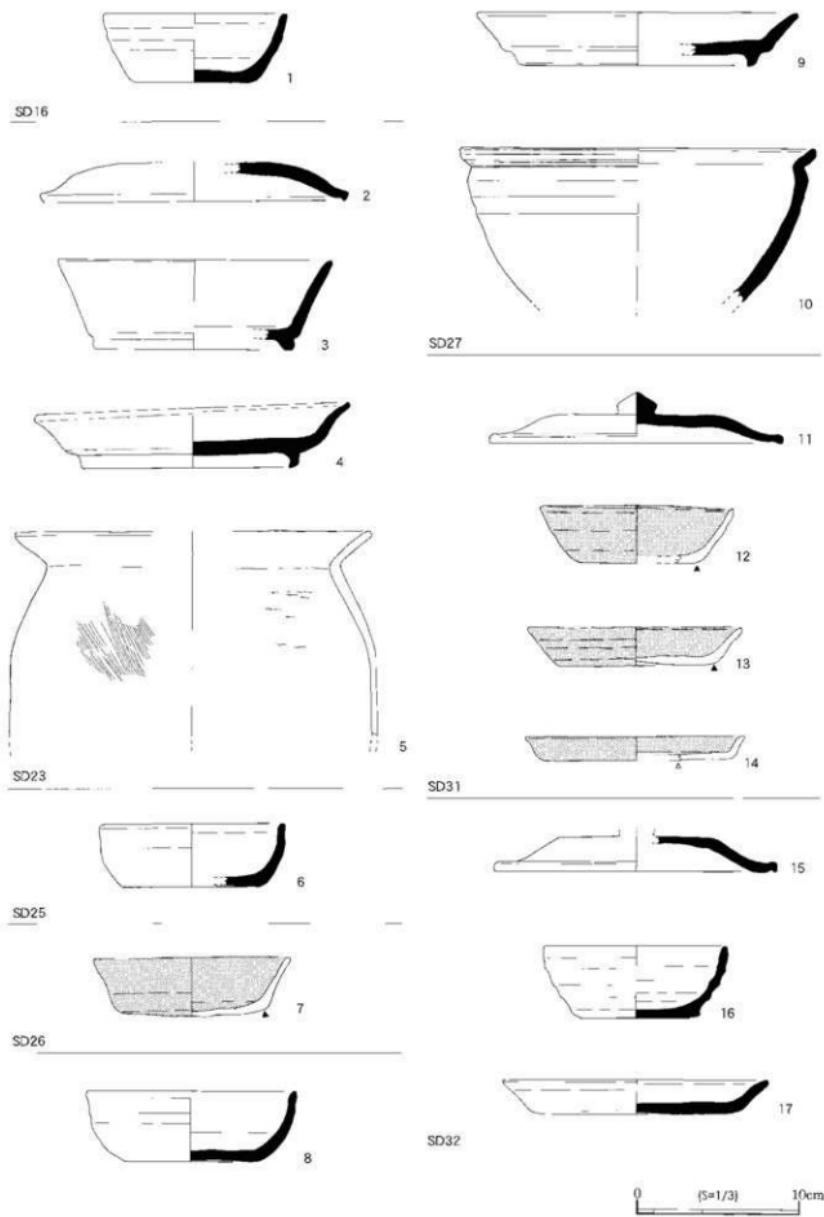
第27図 溝群2実測図



第28図 溝群3実測図



第29図 SD33・SD34平面図・出土遺物実測図



第30図 S D関係出土遺物実測図

第9表 SD関係出土遺物 観察表

番号	種別	器種	口径	高径	器高	残存率	調査	色調	施文・備考
第25回									
1	須恵器	蓋	12.5	13.3	2.0	完形	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部回転 系切り	内外面：青灰色3	
2	土師器	坏	11.7	7.8	3.4	全体の90%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ・ 断面：棕褐色1～赤彩 鉛斑斑点		
3	須恵器	蓋	15.0	11.2	2.0	全体の70%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転系 切り	内外面：灰褐色1	
4	須恵器	蓋	15.2	11.8	2.3	全体の80%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転系 切り	内外面：灰褐色2	底部内外面の一部に黒斑 切り
第30回									
1	須恵器	坏	(11.0)	(9.0)	4.25	全体の40%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転系 切り	内外面：灰色1	
2	須恵器	蓋	(18.4)			全体の20%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：回転ナデ	内外面：青灰色1	
3	須恵器	高台付坏	(16.8)	高台径 (12.0)	5.5	口縁～底部 全周の25%	内外面：回転ナデ	内外面：灰褐色4	
4	須恵器	高台付盖	19.0	高台径 12.5	3.7	全体の70%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転系 切り後ナデ	内外面：灰色1	
5	上師器	蓋	(21.6)			口縁全周の 30%	内面：口縁～頂部ナデ、肩部以下 ケズリ 外面：口縁～頂部ナデ、肩部以下 ハクメ	内面：棕褐色3 外面：棕褐色1	内外面一部に黒斑
6	須恵器	坏	(11.2)	(8.4)	3.9	口縁～底部 全周の30%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転系 切り	内外面：灰色2	
7	上師器	坏	(12.6)	(9.0)	3.7	全体の40%	内面：体部回転ナデ、中央ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ケズリ 断面：棕褐色3	内外面：棕褐色3	赤彩 坂内産上師器か 後ナデ
8	須恵器	坏	(12.8)	(8.0)	4.3	全体の20%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転系 切り	内外面：灰色1	
9	須恵器	高台付盖	(19.0)	高台径 (14.0)	3.3	口縁～底部 全周の25%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：灰褐色3	
10	須恵器	鉢	(21.8)			口縁～底部 全周の20%	内面：回転ナデ	内外面：灰色2	
11	須恵器	蓋	(18.0)		3.1	全体の10%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部回転 系切り後回転ナデ	内外面：青灰色1	
12	上師器	坏	12.0	7.6	3.4	全体の60%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：棕褐色1	赤彩
13	上師器	目	(13.4)	(10.0)	2.4	全体の20%	内面：回転ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ケズリ 後ナデ	内外面：棕褐色1	赤彩
14	土師器	皿	(13.6)	(11.0)	1.45	口縁～底部 全周の20%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部ナデ	内外面：棕褐色5	赤彩 坂内産土師器か
15	須恵器	蓋	(17.2)		2.2	全体の20%	内面：口縁部回転ナデ、中央ナデ 外面：口縁部回転ナデ、頂部回転 系切り	内外面：青灰色1	
16	須恵器	坏	(11.0)	(7.2)	4.5	全体の30%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転系 切り	内外面：灰色1	
17	須恵器	皿	(16.0)	12.4	2.1	全体の70%	内面：体部回転ナデ、見込ナデ 外面：体部回転ナデ、底部回転系 切り	内外面：青灰色1	

写真図版二七

溝状・畝状遺構出土遺物



29-1



30-2



2



3



3



4



4

S D 34



5

S D 23



30-1



6

S D 16

S D 25



7



S D 26

写真図版二二八 溝状・畝状遺構出土遺物



30-B



30-15



9



10



16

S D 27



11



17

S D 32



12



13



14

S D 31

写真図版二九 奈良・平安時代の遺構／I区／溝状・畝状遺構



上：溝状遺構検出状況

下：溝状遺構完掘状況

第14章 IV区・遺構の詳細

第1節 建物遺構

IV区では孤立柱建物を計5棟確認した。このうちSB01は10~13世紀のもので、他の4棟より時期が下るものである。これについては同時期の溝遺構SD01とあわせ「第8節 新段階の遺構」に記載している。

残る4棟(SB02~05)は後述するように建設~廃絶が8世紀中頃~9世紀前葉の期間内におさまるもので、同時に併存する建物群として配置されている。4棟すべてについて地表下の柱材が原位置に残されており、建物の構造に関わる詳細なデータを得ることができた。4棟の内訳は2×2間の総柱建物が3棟(SB02, 03, 04)、2×3棟の側柱建物が1棟(SB05)である。なお、IV区に礎石建物はない。

建物遺構全般に共通する事項について冒頭でまとめて述べ、特記すべき点のみを個別に扱う。また、これらの建物群に伴う方形貼石区画については第2節であらためて記載することとする。



第31図 建物遺構の位置と名称

1. 建物遺構の共通事項

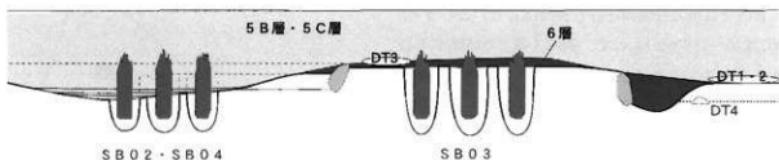
建物遺構の時期

建物遺構は、8世紀中頃~9世紀末の間に建設~廃絶の時期がおさまる。より限定すれば、8世紀中頃に建設され、9世紀前葉には廃絶していた可能性が高い。その根拠は以下のとおり。

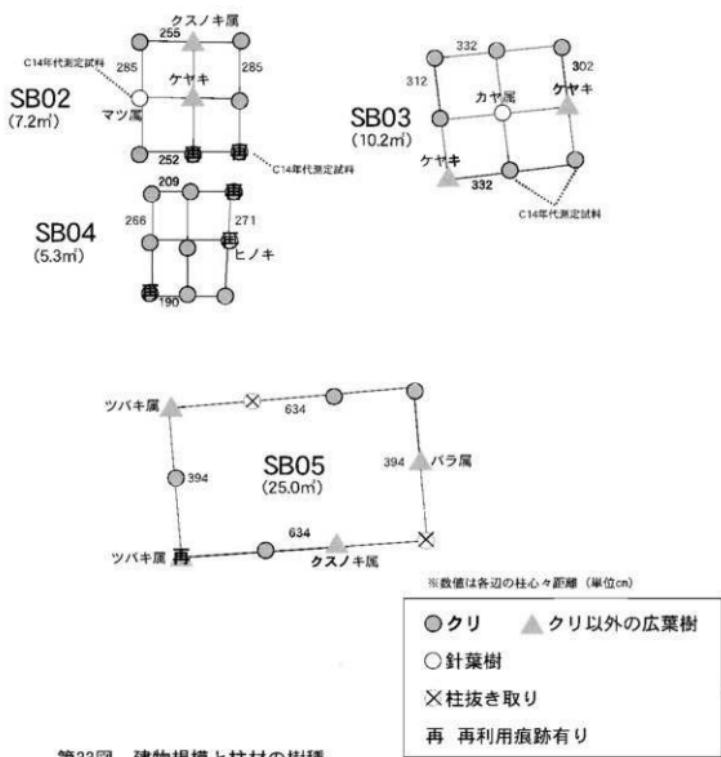
まず建設の年代については、柱穴が掘り込まれている基盤層中(第32図参照)で検出された土器溜まり4(DT4)に8世紀中頃のものが含まれており、これを上限とすることができます。遺構面直上に形成された土器溜まり(DT1~3)は8世紀中頃~後葉のものにまとまっており、9世紀代のものを含まない。これらの土器溜まりは、建物と同時に使用→廃棄・放置されたものと考えて矛盾ない。一方、柱材を試料とした14C年代測定により、SB03の柱材が西暦800年頃に伐採された可能性が高いという結果が得られていて、若干新しい年代を示している(第18章第1節)。

なお、SB02とSB04の2棟はSB03より後に建てられたことが土層から判断される。この2棟の柱材には別の構造材として使用されていた際の跡跡を残すものが多く含まれ、再利用材を転用して付設されたと考えられる。これらの材は、14C年代測定から西暦700年頃の伐採である可能性が指摘されている。

4棟は、周辺一帯が湿地化することを契機に、人為的に廃絶されたとみられる。ほとんどの柱は地表面近くで切断され、他所に運ばれたらしい。その後堆積して遺構面を被覆するのが5B層・5C層である。この中には多量の遺物が含まれており、最も新しい年代を示すのが9世紀末のものである。このことから、建物の廃絶は最も新しくみて9世紀末となるが、5B・5C層中の上層の年代はそれより若干古い9世紀前葉に集中がみられることから、9世紀前葉のある段階すでに湿地化が始まっていたものと判断される。



第32図 建物周辺の土層模式図



第33図 建物規模と柱材の樹種

建物遺構の規模と柱材樹種

第32図にまとめて示した。詳細については、個々の項で述べている。

出土した建物の柱材は全て取り上げ、室内で洗浄後、岡化・写真撮影等の記録をおこなった後に当センターで保存処理を施し保管している。

建物遺構の検出過程

前記のとおり、ほぼ全ての建物柱材は原位置である柱穴掘方内にそのまま残されていた。建物が廃絶される際に人為的に抜きとられなかつたためであるのは当然であるが、これに加えて調査地周辺の地下水位が柱材より高く、酸素が遮断されることによって腐朽を免れ得たという環境面の要素が大きい。なお、残存した柱上端の標高は4.4~4.5mであった。

基本順序と柱材の層位の関係を、第32図に模式的に示している。柱材を最初に検出したのは5C層を掘り下げる作業中であった。5C層は湿地環境下で堆積した遺物包含層である。植物遺体など多量の有機物を含んでいた。柱材の上端がわずかに現れた時、湿地に打ちこまれた杭材か、というのが第一印象であった。ところが埴辺を均一に掘り下げるうち、かなりの大きさをもった材であり、しかも規則的な配置をしていることが判明した。高さ10cmほど掘り下げる状態が、写真図版40(104ページ)である。この段階では2×2間の総柱建物1棟分の柱材と認識したが、結果的にこれらはSB02・SB04の2棟にまたがる建物の一部であった。

柱は掘立柱と想定されることから、周辺に柱堀方のプランが存在するものとみて精査を繰り返したが、どうしても検出することができなかった。そこで断面を観察する目的でサブトレチを入れたところ、写真図版41左上に掲載したように20cmほど掘り下げるところで5C層の下面があらわれ、その段階で堀方が確認できた。これは第32図に示した通り、柱材の上部が突き出た状態で埋没していたためである。

建物廃絶の様相

堀方が検出できた面、すなわち現状での掘り込み面は、必ずしも建物建設面(建設直後の地表面)と同一ではなく、SB02・SB04では本来の建設面が現状より幾分高かったと考えられる(第32図)。これは遺構群が廃絶された後に一定の水流があって、本来の地表面が削られて低くなっているためである。つまり、柱材の地中部分は水流によっていったんむき出しになり、その後堰堤の湿地化が進む中で埋没していったとみられる。

一方、東側に立つSB03は、当初の建設面が残存していると考えられる。建設面の直上には土器溜まり(DT3)が形成され、さらに包含層(基本層+第6層)が建設面を被覆している。なお第6層は遺構群が機能しているのと同時に堆積した土層で、土砂供給の差によって位置ごとに差が大きく、SB03埴辺では薄く堆積している。こうした上器だまりや第6層がそのまま5C層に被覆され残存することからみて、SB03の建設面は現状での掘り込み面とほぼ等しいと言えよう。

以上を総合すると、柱材は当時の地表面に近い位置で人為的に切断された可能性が高いと考えられる。現状での上端は不規則な腐朽により砕断形を呈していて人為的な切断の痕跡は残らないが、地上部分の柱が立ち廢れるように自然に朽ちたとは考えにくい。それは湿地堆積(5C層)がかなりの厚さがあり、立ち廢れであれば柱がもっと高く残存するはずであること、また床上の構造材が付近から全く出土せず、建物がその場で倒壊したような痕跡が無いことなどが理由である。

柱材の上端はいずれも当時の地表面と推定される標高4.4~4.5mでそろっており、地表面に近いところで人為的に切断し、地中部分はそのまま残されたものであろう。

2. SB02

位置・規模・方位

SB02は 2×2 間の総柱建物。同様の構造をとるSB04の北側に、柱筋をおおむね揃えて配置される。平面形はわずかに南北が長い長方形で、このことから棟を南北にとる構造に復元される。主軸方位はほぼ正方位。ただし、本書で扱う方位は国土座標第3系（日本測地系）における座標北を示しており、磁北より度数、真北よりわずかに東に振れたものである。

規模は柱心々距離で北辺255cm、南辺252cm、東辺と西辺が285cm。梁間：桁行の比率は1:1.12。配置の精度は高く、桁行寸法、すなわち東辺と西辺の寸法は完全に一致する。梁間寸法は3cmほどの差異が認められるが、この数値は梁間寸法全体に対して1.2%と小さい。上記数値はあくまで調査時の柱中心を心としたものであるため、建物廃絶後の柱材の若干の傾きなどに影響されている。これを考慮すれば、SB02の柱配置は極めて正確に意識されて施工されたものと判断される。床面積は7.2m²。

柱の据え付けレベル

第35図の断面・立面図に示したように、SB02の柱材は基底面の標高がいずれも3.7m前後でそろっており、目立った深さの差異はない。柱穴の底面からわずかに浮き上った位置、すなわち少量の土砂を据えた上に置かれるか、あるいは底面に接して柱材が据えられている。南東隅にあたるP01は唯一、半たい石を柱材の下にかませて微調整が加えられている。SB02の柱材は水平位置・垂直レベルともに整然と正確に位置が定められているが、こうした状況は、隣接するSB04の柱据え付け標高がまちまちであるとの対照的である。

なお、柱材の最大径は20~26cmでほぼ均等であり、目立った材の差異はない。

柱材の樹種・加工痕跡

建物柱材については全点樹種同定をおこなっており、その結果は第33図にまとめて示している。SB02についてみると、9本中6本がクリ材、残りはケヤキ、クスノキ属、マツ属が1本ずつであった。用材と配置の対応について、特に意図的な関係性は認められない。なお、6本あるクリ材のうち2本（P01・P04）は方形のぼぞ穴状の加工が残る。加工の様子は第36図および写真図版43に示したとおりである。この加工は柱材の基底部から35cmほど上の位置に穿たれており、建物倒壊時には土中に埋まっていたことになる。穴は深さ3cm程度のもので、貫通せず、柱材運搬時の縄掛けとなるえつり孔とも考えられない。したがって、SB02の建物構造に必要な加工ではなく、この材が本来別の構造物に使用されていたものを再利用・転用した山材であったことを示すものと理解される。こうしたぼぞ穴状の加工は隣接するSB04の柱3本にも認められ、SB02・04の2棟が古材を再利用した建物であったことがわかる。残る2棟、すなわちSB03とSB05にはこうした痕跡はない。

3. SB03

位置・規模・方位

SB03はSB02・04の東側に単独で建てられた掘立柱建物で、 2×2 間の総柱建物。方形粘土区画の内側に位置している。建物の方位はN-6°-Wで、若干西に振れている。南西に位置する側柱建物SB05や方形粘土区画の方位と近い。SB02・SB04の2棟とはわずかに方位を違えている。規模は柱心々距離で北辺と南辺が等しく332cm、東辺302cm、西辺312cm。平面形はほぼ正方形に近いが、わずかに東西に長い。梁間寸法を東辺と西辺の中間値をとり308cmとすると、桁行寸法との比率は1:104。不正確ながら梁間10尺に対して桁行11尺とみることも可能か。梁間寸法において若干の不整合（10cm）があるが、おおむね直角を保った整然とした方形の平面形で柱が配置されている。床面積は10.2m²で、I区・IV区で5棟確認された総柱建物のなかで最も平面規模が大きい。

柱の据え付けレベル

SB03の柱材据え付け標高は、柱ごとに差異が大きい。本節冒頭で述べたように、柱材上端は建物の機能面近

ぐり断され、その後地下水位による影響を受けながら腐朽した二次的な形状である。その上端標高はほとんど均一であるため、地中に残存していた柱材の長短が、そのまま据え付け標高の差異と読み替えることが可能である。

そこでSB03を構成する柱材9本（P31～P39）の残存長さをみると、P31から順に90、76、88、69、113、50、69、69、90cmであった。角にあたる4本の柱（P31、P33、P37、P39）が90、88、69、90cmと深く、辺の中間に置かれる4本の柱（P32、P34、P36、P38）が76、69、50、69cmと若干浅い傾向が見て取れる。深さの差異が柱の支持力を規定するものとして意図的に行われ、これが上部構造を反映するものと積極的に評価すれば、辺の中間にある柱は床桁梁を支持するための束柱であって材が短く、四隅の柱は上まで延びて梁材・桁材を支持する長いものであった可能性を考えられるとすれば、妻側中央の柱は棟を直接支持する棟持柱ではないことになる。

また、特に注意されるのが中心に位置するP35が突出して長く、深く据えられていたことである。P35は113cmと他の8本の材と比較して最も深く据えられていた。次に深いP31・P39が90cmであるためその差23cm、最も浅いP36は50cmであるためその差は63cmに及ぶ。加えて、P35は材の径も太いものが用いられている。他の8本が最大径23～33cmであるのに対し、P35は最大径38cmほどで、ひとまわり太い。当遺跡で残存していた柱材のなかでも最も太い材である。材の芯が嘴って抜けているため取り上げ後の現状では正確な径が求められないが、出土時に現地で計測した段階では40cmに近く、明らかに他の材と比べて大材であることがわかる。

柱材の樹種・加工痕跡

SB03に使用された柱材の樹種は、クリ材が最も多く6本、ケヤキが2本、カヤ属が1本であった。こうした用材は他の建物を含めた遺跡全体の傾向と共通するものであるが、注目されるのは中心の柱P35が唯一針葉樹であることである。材の径が大きく、埋め込み深さが深いことに加え、用材の面でもこの柱が他の柱と区別されるものであったことを示すものと考えられる。なお、SB03と周辺建物の構造・機能については、総括（第18章）で考察を加えている。

4. SB04

位置・規模・方位

SB04は 2×2 間の総柱建物。SB02の南側に並んで位置する。平面形は南北に長い長方形で、SB04と同様に南北に棟筋をとる構造と考えられる。主軸方向はSB02と同じで、ほぼE方位をとる。

柱位置で見る限り、平面形はかなりいびつである。柱心至距離は北辺が209cm、南辺190cm、東辺271cm、西辺66cm。特に梁間寸法（南北辺）の不均等が顕著に認められる。その差は19cmあり、直角を保った長方形を描こうとすれば柱に乗らない。仮に各辺の中間値を取り梁間寸法200cm、桁行寸法269cmとすると、その比率は1:1.35となり、SB02よりも若干細長い平面形となる。床面積は5.4m²。

柱位置と据え付けレベル

SB04の柱配置は 2×2 間の総柱建物であるが、中心には2本の柱が置かれており特殊な構造をとる。2本の柱をそれぞれP06aとP06bと呼ぶ。2本の柱は建物の中心、すなわち柱筋を結んだ交点の位置からずれたところに位置し、他の柱材と比較して埋め込み深さが浅い。P06aは土壠断面図に柱穴を記載していないが、P06bとともに浅い柱穴（堀方）をもつ。P06bはP03とP09を結ぶ線上に位置することから、梁方向の横架材を支持することが可能であるが、P06aはいずれの柱筋にもまったく乗っていない。

柱の据え付け標高は、上記P06が浅いほか、P05、P28がやや深い位置に据えられている。概して柱基底面の標高はまちまちであり、隣接するSB02が一定の高さにそろえられていたとの対照的である。全体に施工の粗さを感じる。柱穴の土壠中に礫が埋め込まれているものが多く、特にP02、P09、P28については柱の下に石が接して置かれていた。柱穴埋土中に木片等を含むものもあり、P02では柱材とほぼ同規模の丸太材の端材が3本、P0

5には大型の木材削片が多数、柱材の脇を固めるように詰め込まれていた。これらは土中で腐朽することにより柱基部の支持力を弱めることにつながり、不規則な傾きや沈下を招くことが予想される。こうした点からも、SB04は他の建物と比較して施工業者が難におこなわれた印象を受ける。

なお、柱材の最大径は18~24cmで、SB02よりわずかに細い。

柱材の樹種・加工痕跡

柱に使用された材の樹種は、分析した9本中8本がクリ材、残る1本がヒノキであった。なお、P06bは樹種同定をおこなっていない。クリが多く用いられていることが注目される。また、方形のぼぞ穴状の加工痕がP02、P03、P29の3本に認められた。SB02と同様に、別の構造物に使用されていた古材を再利用・転用した痕跡と考えられる。

5. SB05

位置・規模・方位

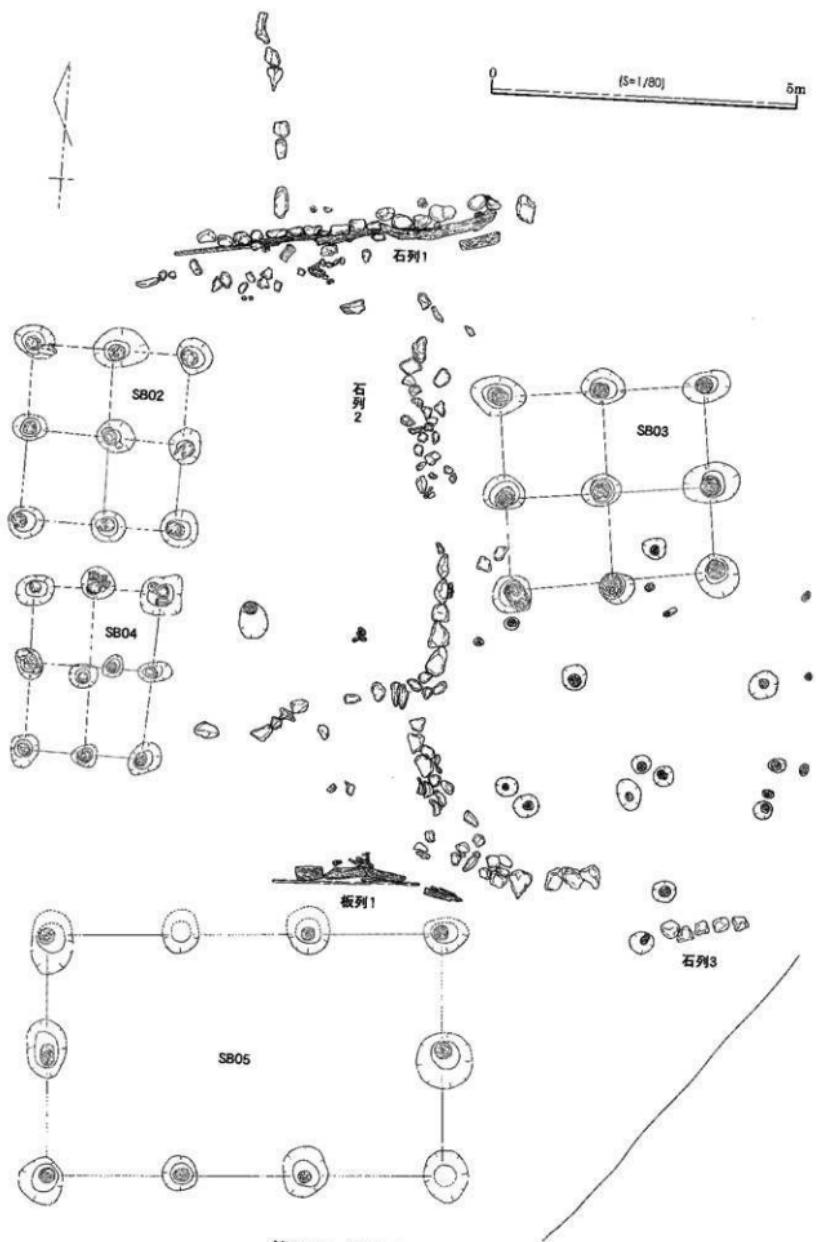
SB05は2×3間の側柱建物で、SB02~04の南側に位置する。10箇所の柱のうち、2箇所は柱材が抜き取られており、8本の柱材が残存していた。規模は柱心々距離で北辺と南辺が634cm、東辺と西辺が394cm。東西に長く棟筋をとる。組み合った各辺の梁間・桁行の寸法は正確に一致しており、直角を保つ整った長方形プランで立てられている。梁間13尺に対して桁行21尺（柱間7尺）で設計されたとみることが可能である。床面積は25.0m²で、掘立柱建物の中では最も規模が大きく、I区の礎石建物SB04（39.1m³）やSB05（35.3m³）に準ずるものである。

方位はN4°-Wでわずかに西に振れ、SB03に近い。

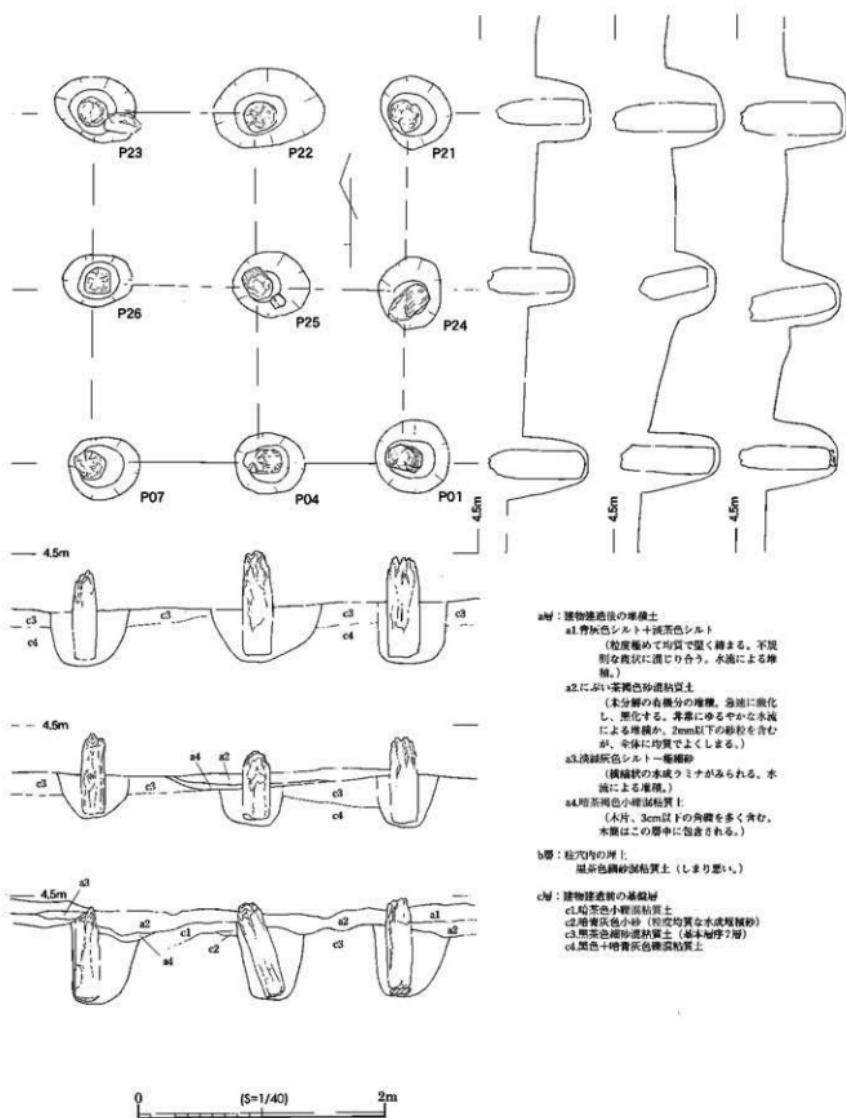
柱材の樹種・加工痕跡

SB05の柱材は残存した8本すべてが、製材時に施された面取りを残していた。これは他の建物遺構ではみられない特徴である。他の建物遺構の場合、多くは表皮部邊をはがしただけか、あるいは表皮をそのまま残した丸太材のままであって、地中部分に加工は加わっていない。また、SB05の柱材のうちP109とP112を除く6本については、柱材基底部近くに全周を廻る溝状の抉りが設けられていた（写真図版46、第40図）。用材運搬時に必要とされる繩掛けのための抉りと考えられる。こうした加工も、SB05の柱材に限ってみられるもので、他の建物の柱材には全くなかった。上記の柱材の加工における特徴からは、SB05が他の総柱建物とは作業の様相が異なることが見て取れる。施工の精度が高く、寸法が正確で直角が保たれている点もSB05の特徴であり、床面積の大きいこの建物がそれなりの管理に基づいて建てられた重要な役割をもつものであったことも考えられる。施工精度が高いのは、地中に据えた柱でそのまま上層を組む側柱建物としての構造に起因するものかもしれない。そうみれば、総柱建物で地中の柱配置が不正確なものは床束柱としての役割しか果たさなかつたことを示すとみることもできよう。

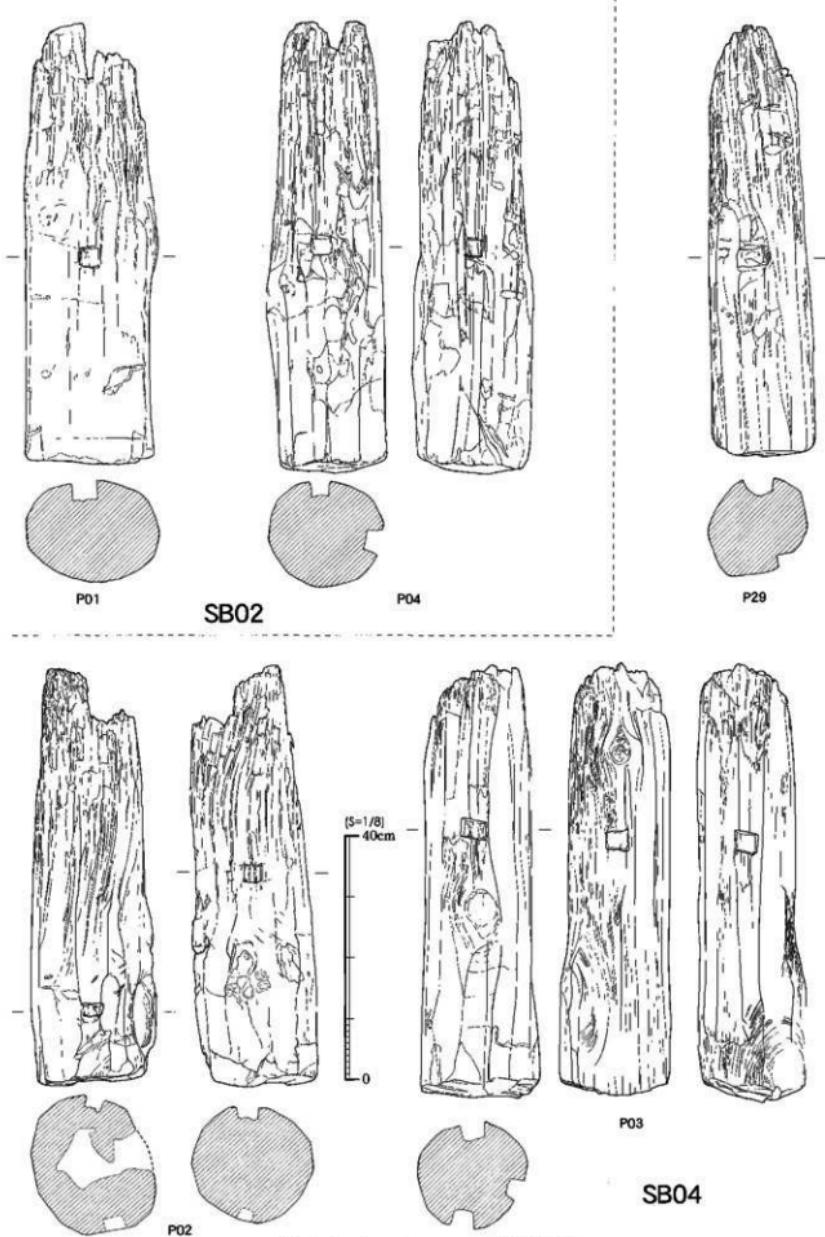
SB05に使用された柱材の樹種は、8本中クリが1本、ツバキ属が2本、クスノキ属が1本、バラ属が1本であった。クリ材が多用されるのは、当遺跡全体での用材傾向と一致するものである。また、P113はバラ属の大径材で、建物柱材として使用できるほどの大材に成長したものは珍しい例とされ注意される。



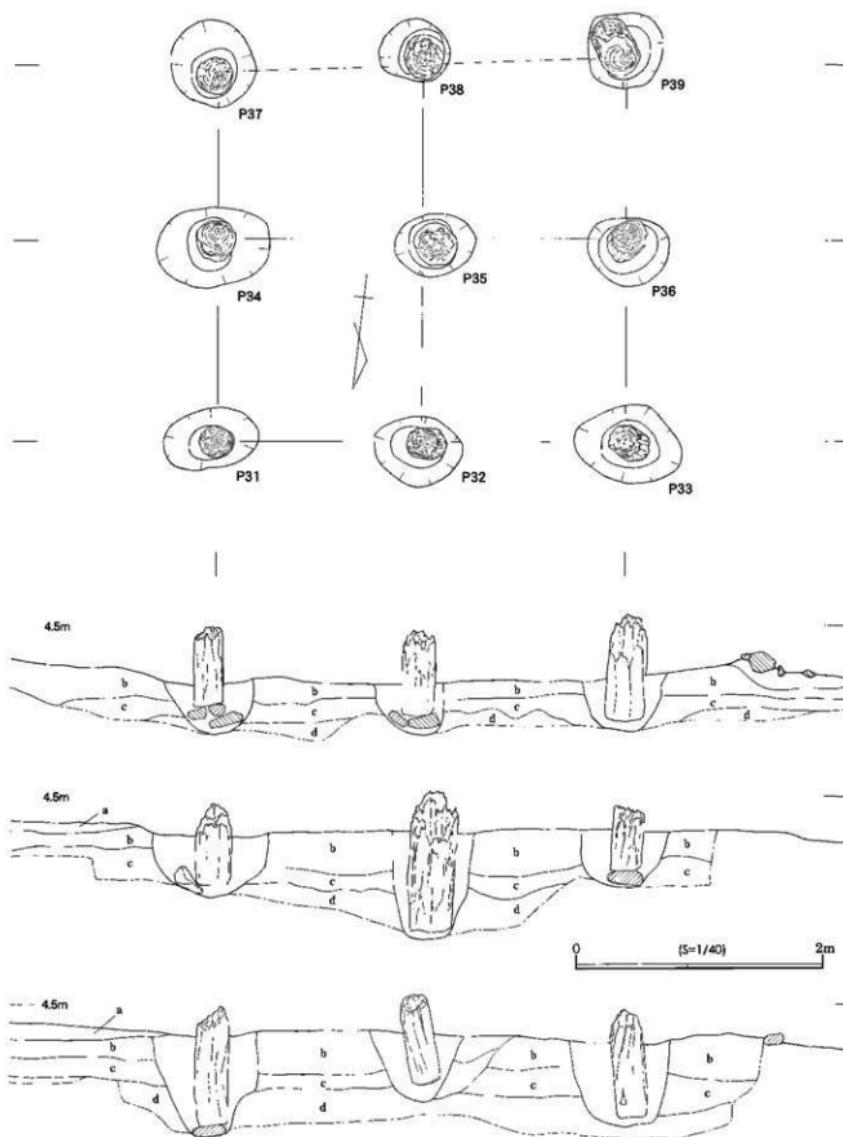
第34図 建物遺構全体図



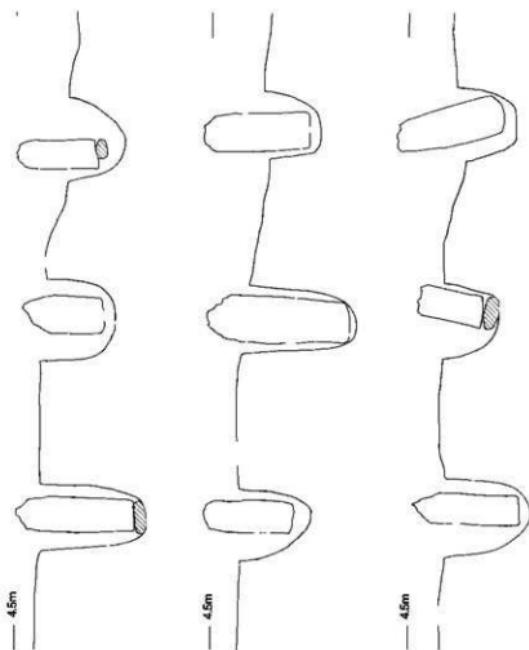
第35図 S B 02実測図



第36図 SB02・SB04柱材実測図

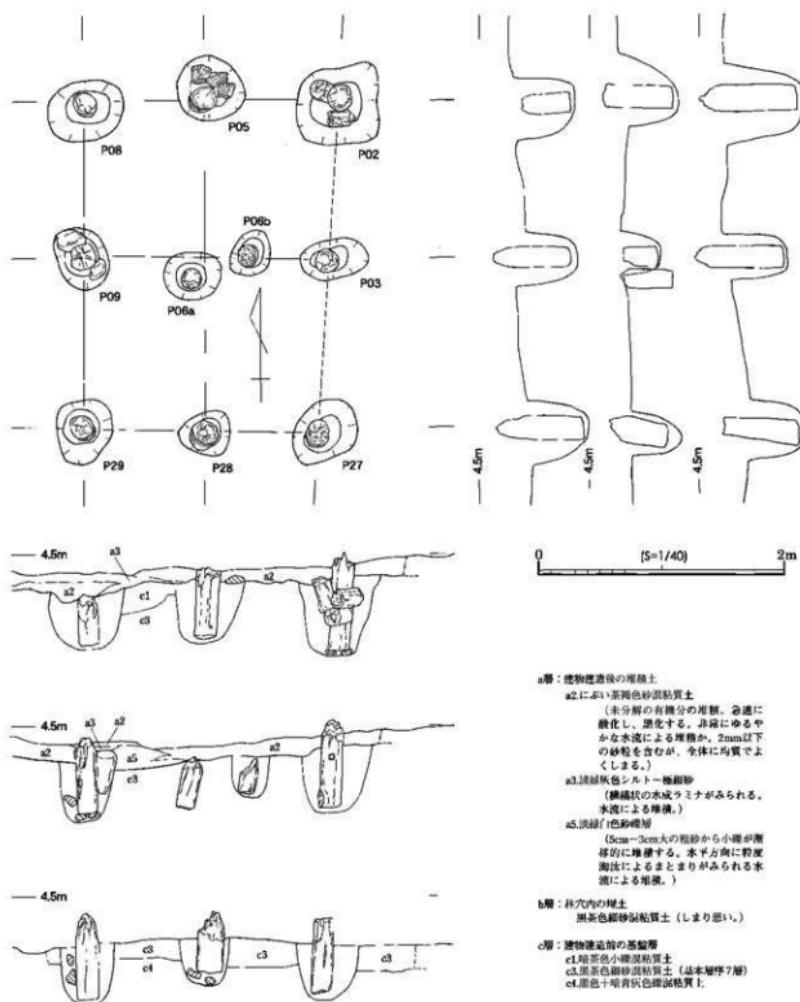


第37図 S B 03実測図①

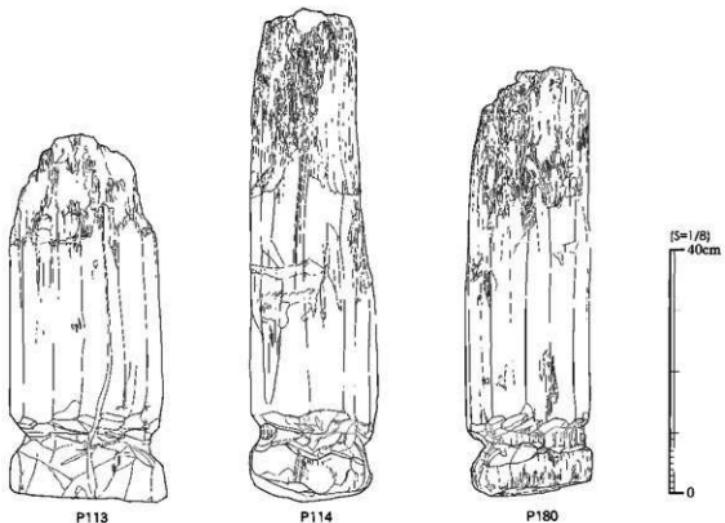
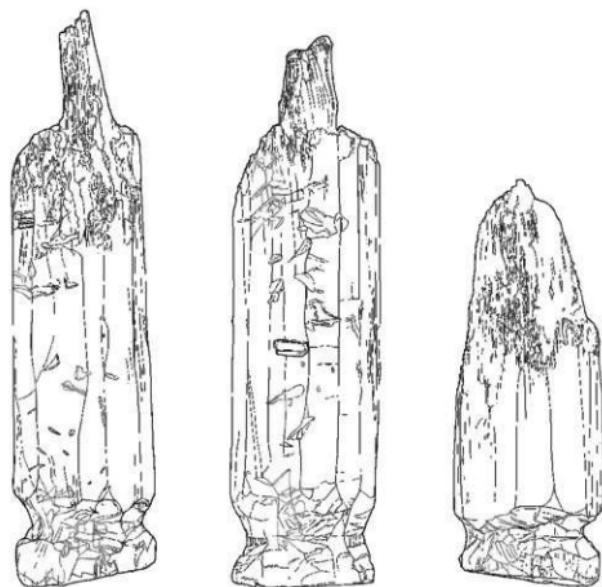


- a. 黒褐色細砂混粘質土 (基本層序の6層。遺物多く含み、土表面よりはこの層中に形成される。塗り込み面の上に表して堆積している。)
- b. 黒茶色粗砂混粘質土 (基本層序の7層上半。細砂から1cm大の小砾を均質に含み、密度低で水をよく通す。黒色の無機化鉄質が多く沈着する。)
- c. 黒色細砂混粘質土 (基本層序の7層下半、4.5mに近いが、滋味強い)。b層との層境は不明確で漸移している。発生土層を含むする。)
- d. 青灰色—黑色鐵化粘質土 (基本層序の8層。発生中期以前の堆積層。遺物密度高い。種を多く含むが、基本上層は粉性が高い。)

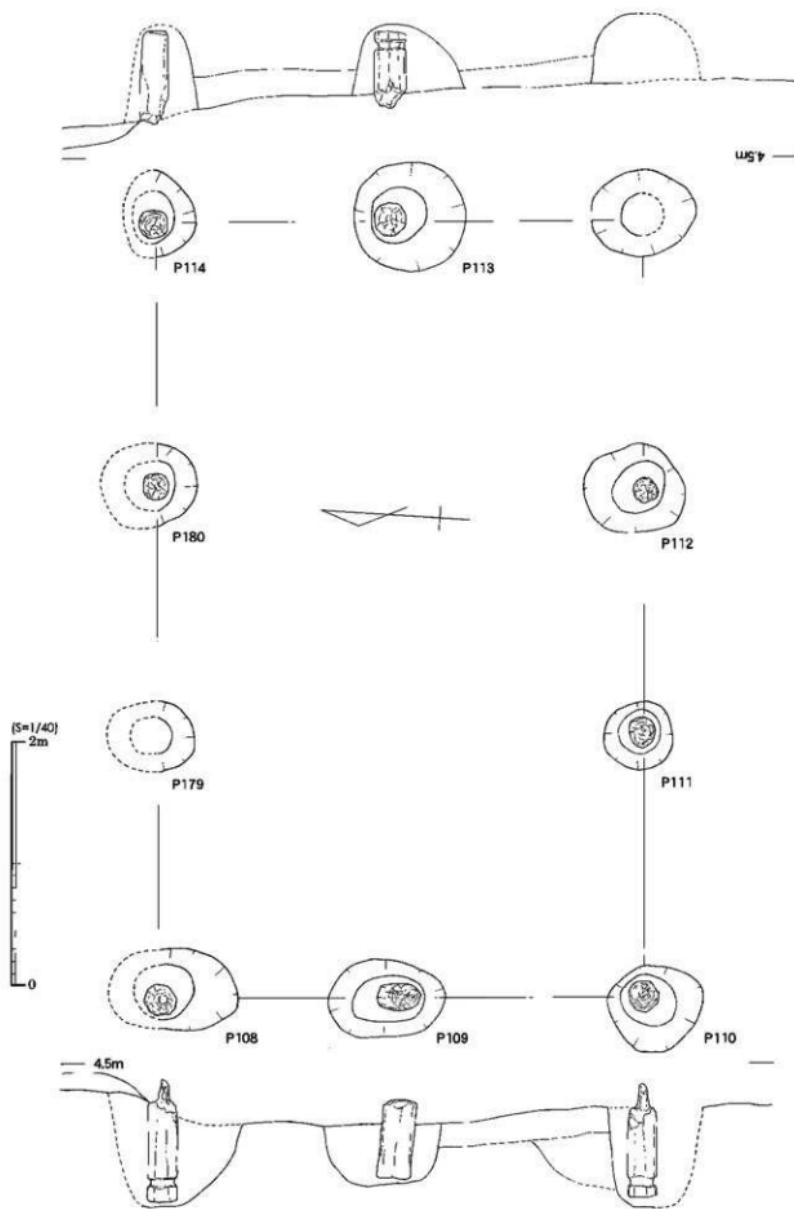
第38図 S-B 03実測図②



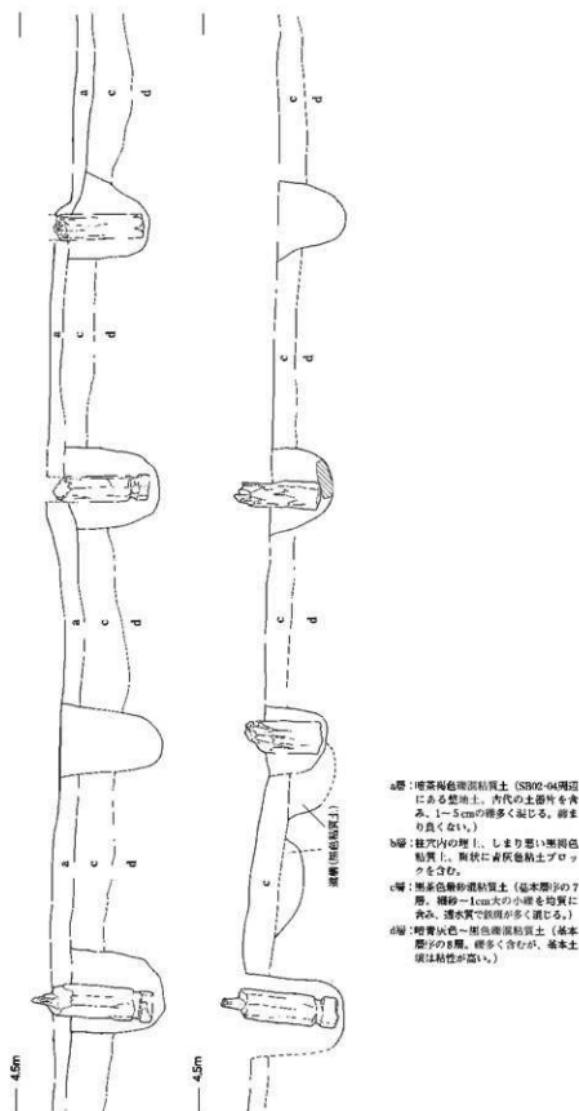
第39図 SB 04実測図



第40図 S B 05柱材実測図

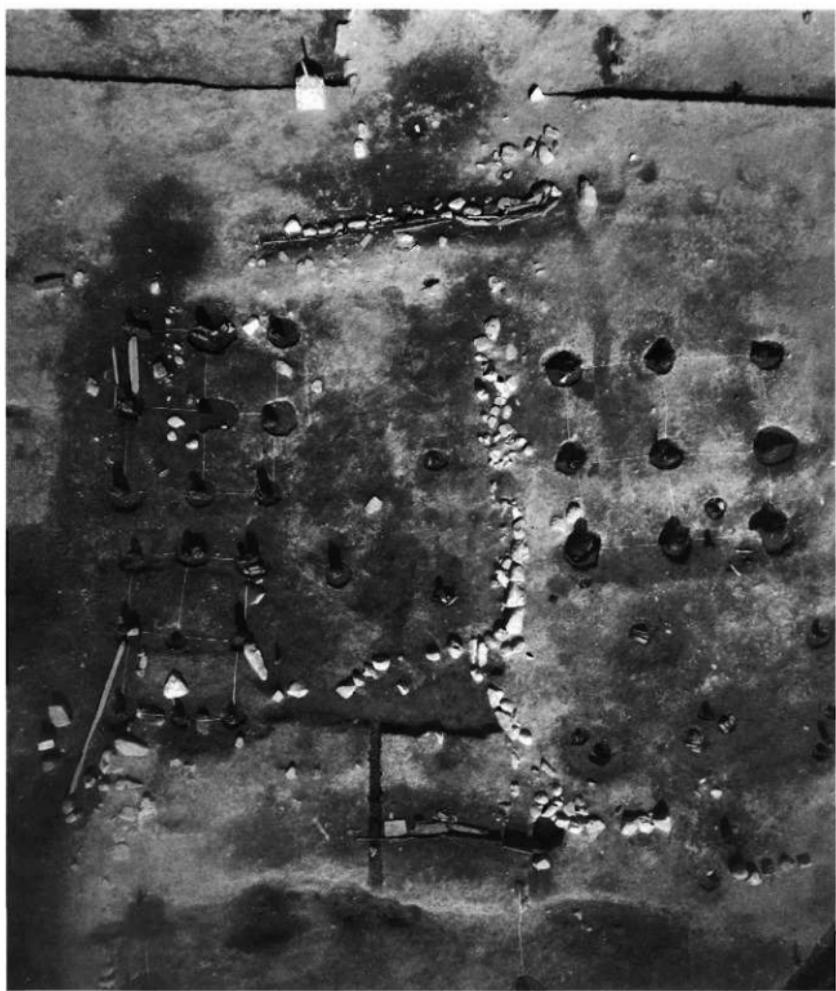


第41図 S B 05平面図



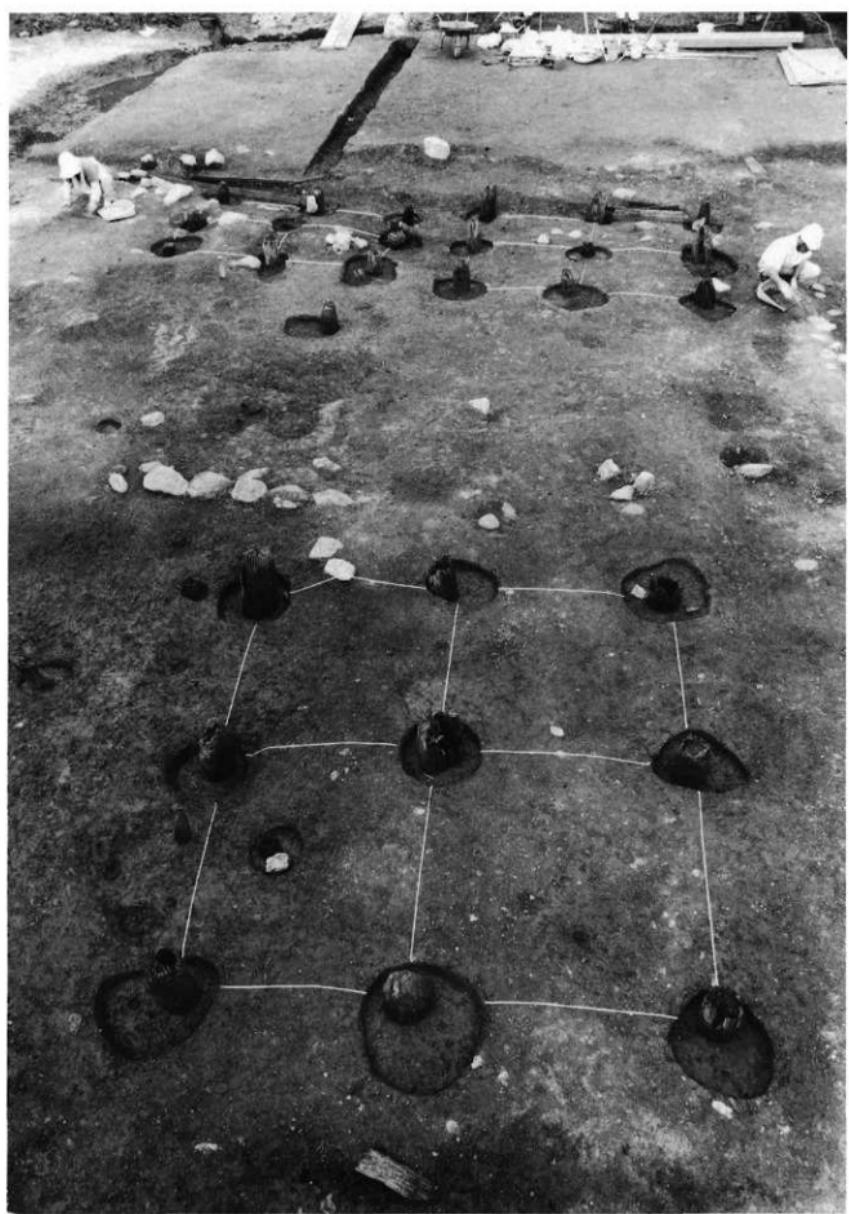
第42図 S B 05断面図

写真図版三〇 奈良・平安時代の遺構／IV区／掘立柱建物群



建物群航空写真（上が北）

写真図版三一 奈良・平安時代の遺構／IV区／掘立柱建物群



掘立柱建物群 検出状況（東から）

手前：SB03
右奥：SB02 左奥：SB04

写真図版三二 奈良・平安時代の遺構／IV区／掘立柱建物群



掘立柱建物群 全景

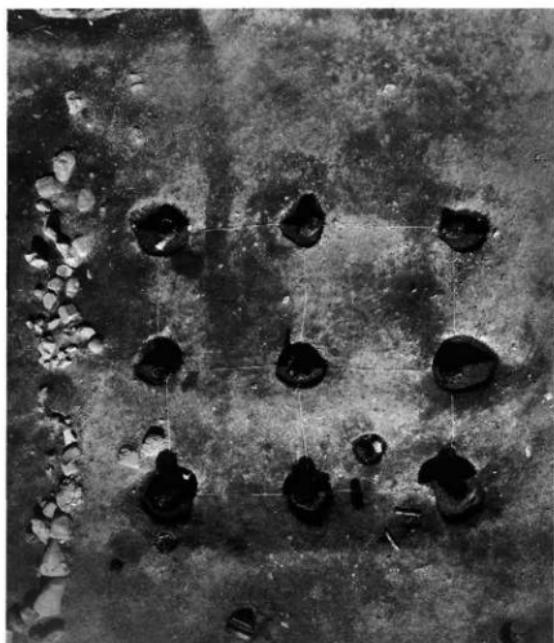
上左：南東から 上右：東から
下：北西から

写真図版三三 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB03

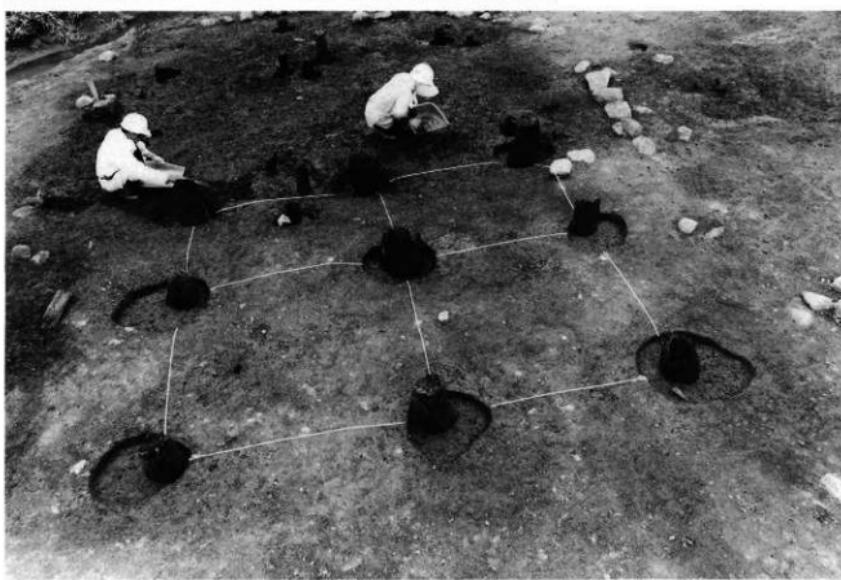


SB03 全景（南西から）

写真図版三四 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB03



上：航空写真（上が北）
下：調査風景（北から）



写真図版三五 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB03



SB03 柱穴断面

上段と中段：東から
下段：西から

写真図版三六 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB03



写真図版三七 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB02・SB04



SB02・SB04全景（南から）

写真図版三八 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB02・SB04



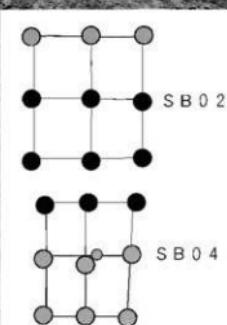
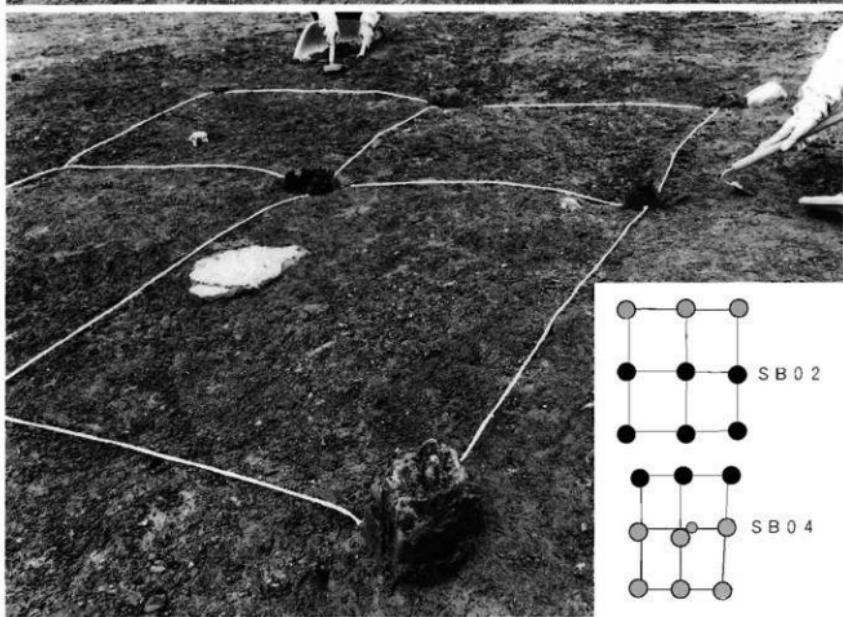
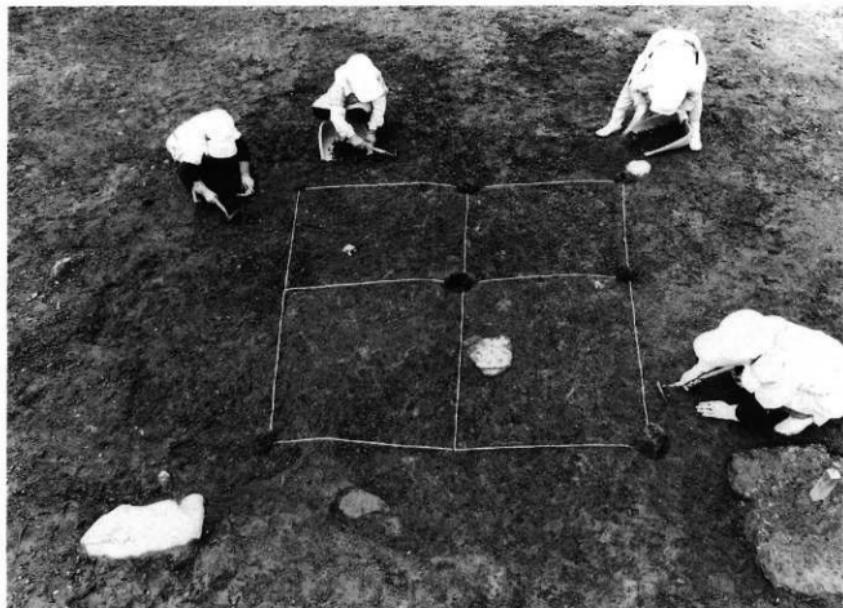
SB02・SB04全景（北から）

写真図版三九 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB02・SB04



S B 02・S B 04航空写真（上が北）

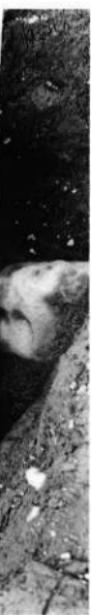
写真図版四〇 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB02・SB04



上：南から
下：南東から

柱材上端検出状況

写真図版四一 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB02・SB04



柱穴断面

左上：SB02南列（東から） 右上：SB04P03（南西から）
左下：南から 右下：SB04P02（南西から）

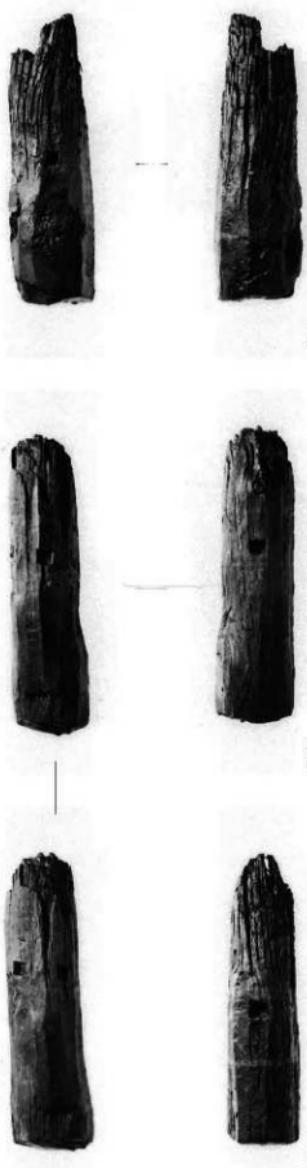
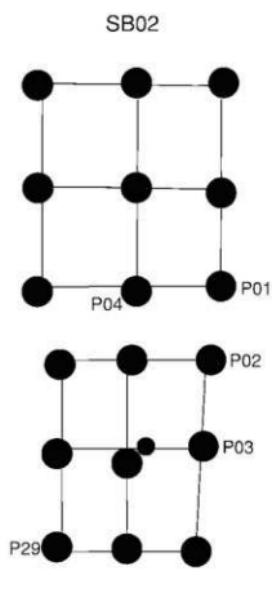
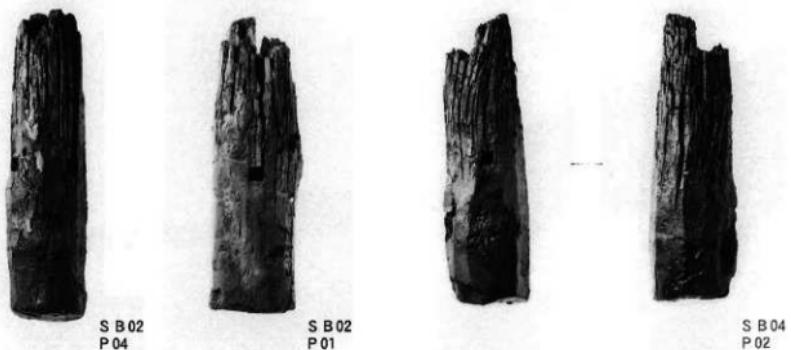
写真図版四二 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB02・SB04



上：SB02中列（手前）と北列（奥）（南西から）
下：SB02北列（南西から）

柱穴断面

写真図版四三 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB02・SB04



再利用痕跡のある柱材

写真図版四四

奈良・平安時代の遺構／IV区／SB05



SB05(手前)と建物群(南西から)

写真図版四五 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB05

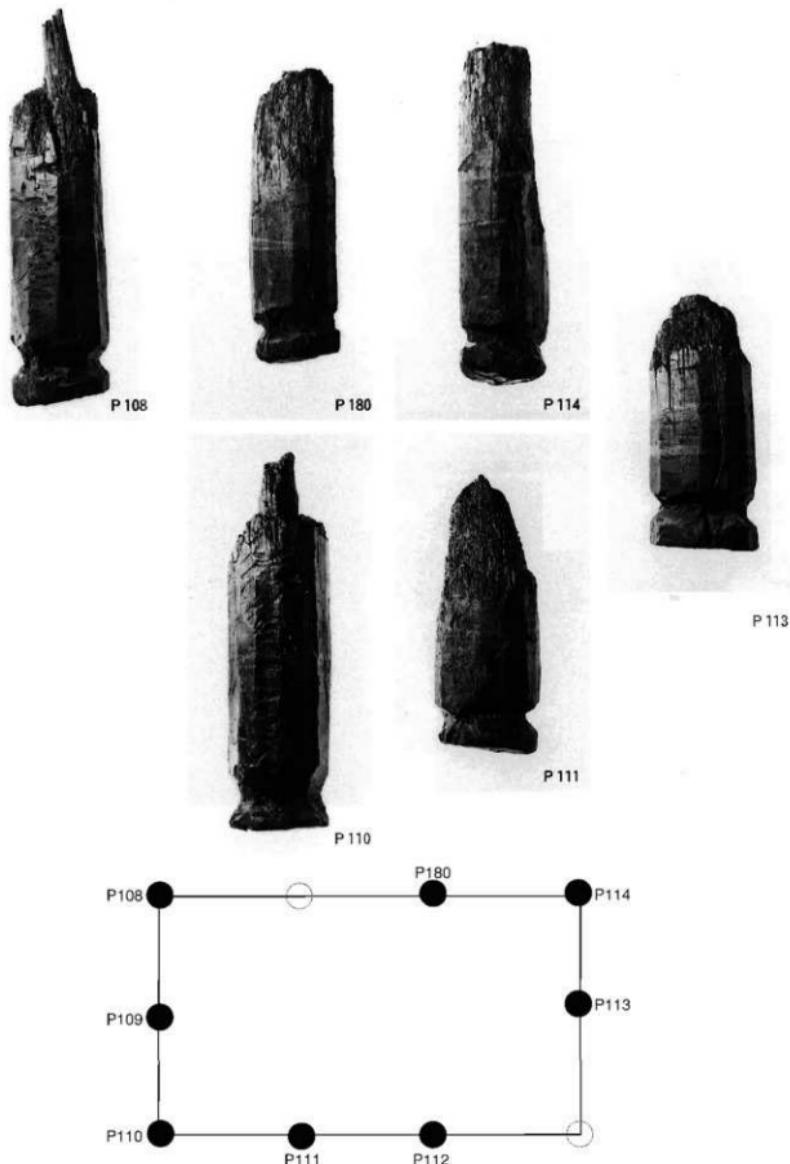


S B 05柱穴断面



左：西辺、南から
下：南辺、西から

写真図版四六 奈良・平安時代の遺構／IV区／SB05



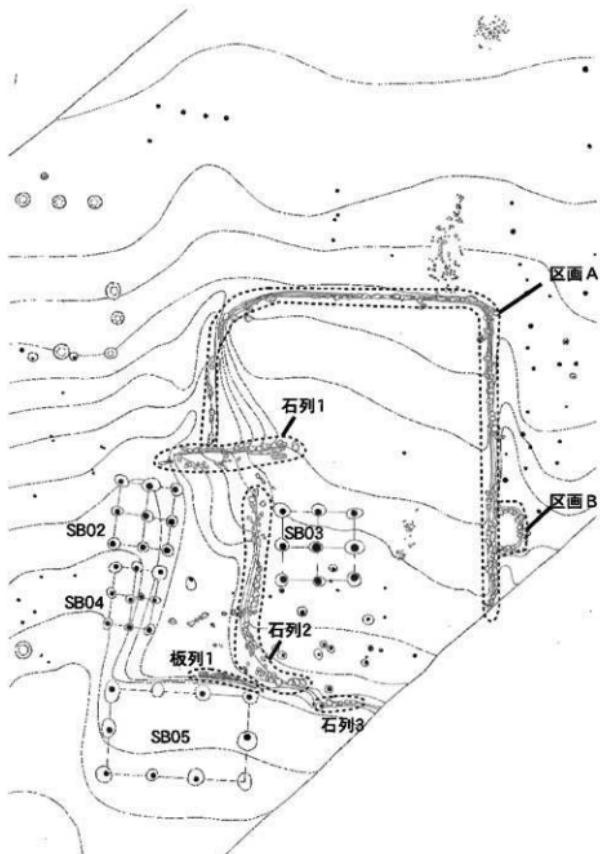
SB 05 柱材

第2節 方形貼石区画

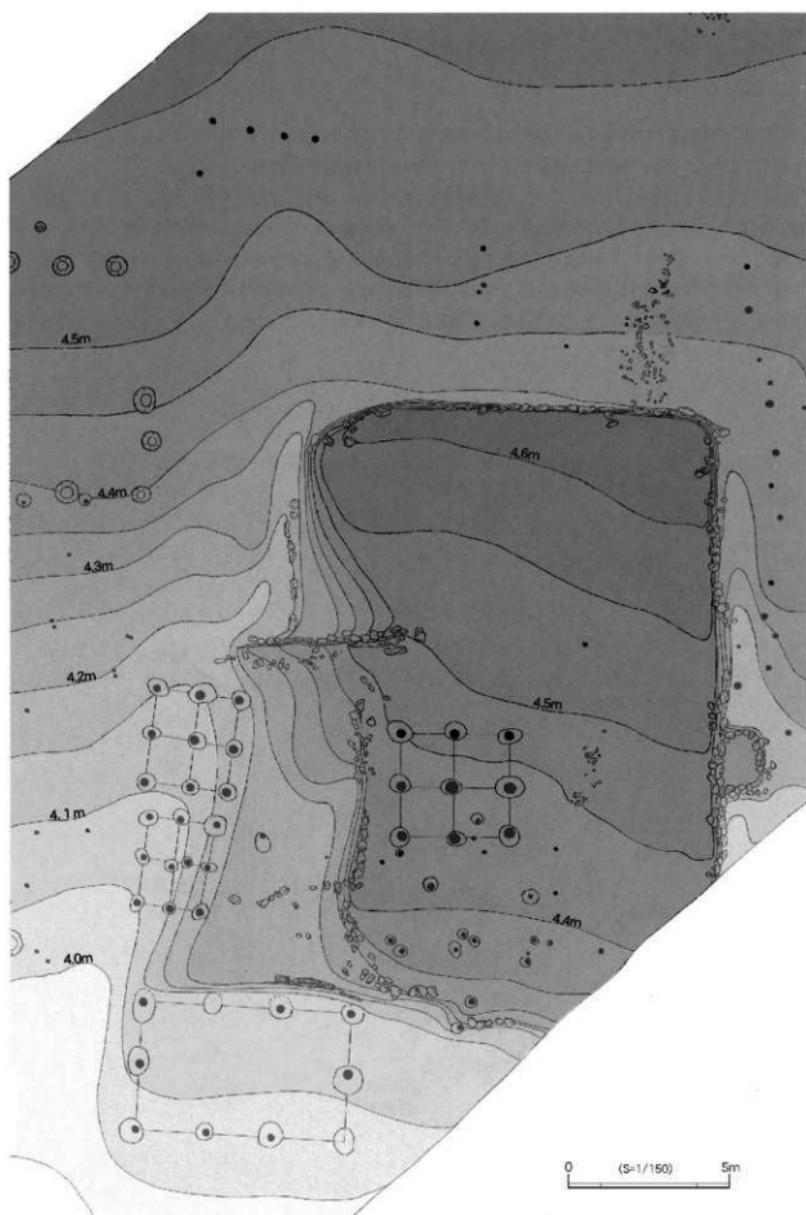
1. 各部の名称

方形貼石区画はIV区の中央南側で検出された遺構で、石を直線的に敷き並べて矩形をなし、攝立柱建物を囲繞するものである。遺構の詳細を記述するにあたり、下図のとおり各部分の名称を規定する。

まず、主となる区画を区画Aとし、これを構成する各辺を区画A東辺・北辺・西辺とする。さらに、区画A東辺に付設された小規模な方形の貼石区画を区画Bとする。区画Aの東辺と北辺は単純な直線的構造をとるが、南北側については入り組んだ複雑な遺構配置となっている。区画A西辺に直交する東西の石列を石列1、SB03の西側に接して南北に延びる石列を石列2とする。石列2はSB05にぶつかる所で東に折れて止まる。さらにその南東側に若干の間隔を置いて東西に並ぶ短い石列を石列3とする。また、SB05北辺にそって土留めの板列が並んでおり、これを板列1と呼ぶ。



第43図 各部の名称



第44図 方形貼石区画 等高線図

2. 区画A

区画Aの位置・規模・方位

区画Aは掘立柱建物SB03を囲むように配置されたもので、IV区の造構構造を特徴づける最も中心的なものである。規模は東西13.0m、南北14.5m以上。全容が調査できたのは北辺のみで、SB03の北側へ10.0mの間隔を置いて東西に延びる。東辺は長さ14.5mほど検出しているが、調査区南壁にあたりさらに南へ続く。西辺は残存状態が悪く、石がまばらに抜けているが、南北に7.0mほど延びて石列1にぶつかり途切れる。

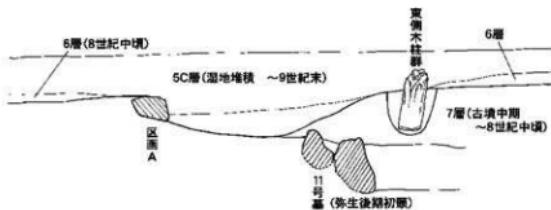
区画Aは調査区外へ延びているために本来の全体規模は不明であるが、仮に建物SB03が南北の中心に建てられていると仮定して北辺を折り返すと南北23.2mに復元される。とすれば東西13.0m×南北23.2m、面積にして302m²ほどの区画が想定できよう。これとは別の想定として、石列3が区画Aの南限と仮定すれば南北19.0mとなり、247m²の面積となる。この場合SB03の位置は区画の南西側に偏って配置されていたことになる。

区画Aの方位はN-7°-Wで、SB03(N-6°-W)とほぼ等しい。さらに、小区画Bや石列1~3もこの方位と等しく、これらの区画がSB03の建設に伴い、共通の方位意識のもとで設計・配置されたことをうかがわせる。

区画Aの構造

区画Aは“時の基盤層を削りだして成形されている。なお、ここで基盤層とするのは主として古墳時代中期以前に堆積した土砂であり、該期の遺物を含む包含層で、IV区基本層で7層としたものに該当する。区画の輪郭に従って基盤層を溝状に掘り込み、削り出した外側に石を並べて外表施設としている。区画の内側は15~20cm程度の盛り土を伴う整地が行われており、わずかに外側より高い。区画の内外の標高差からみて、基壇と呼べるような高まりをもつものではない。区画の内側は自然地形に起因する傾斜をもっており、南へ向けてゆるやかに低くなる。南北での比高差は20cmほどである。

区画の外際をめぐる溝状の掘り込みは、外側に向かってゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。区画外に自然とつながるため、溝の外側輪郭にあたる掘り込みのプランは明確に検出できず、図示もできない。この溝状掘り込みに堆積していた埋土は粗い構造の土砂であり、水流や水が溜まることによって堆積する水平構造の堆積物などは認められなかった。区画全体は建物廃絶の契機となる湿地化後の堆積物(5C層)によって直接被覆されているわけだが、溝状掘り込みは上記の粗い土砂によって埋没した後に5C層が乗っている。このことから、区画Aは建物が機能している段階すでに埋没が始まっている可能性がある。



区画A 東辺断面図

貼石に使用される石材は、基本的に亜角砾で、破面や稜がやや風化し若干の円滑が進んだものである。石材種は近傍の山塊に頭部が確認できるもので、特に遠隔地から搬入された可能性を持つものは含まれない。こうした

点から、貼石に使用された石材は周辺から採集されたものであり、円周度からみて数百m北側の谷川沿いに転落していたものが集められた可能性が高い。

貼石の手法は長軸を水平に、横長に置く点で一定しているが、各辺で様相が微妙に異なる。北辺は石材ひとつひとつが大きく、平面をもった石が選択的に使用されている。平面を外側に向けて垂直に近い角度で立て、隣り合う石と面が崩すように配置される。石材は横幅10~50cm、高さ基壇状の外表施設としては最も整った印象を受ける部分である（写真図版1）。なお、北辺の西寄りで石が1.5mにわたって欠落している箇所があるが、これは本調査以前に行なった試掘によって石が掘り抜かれた部分で、実際には貼石が残存していた。

北辺が整然と外面をそろえるのに対して、東西辺の貼石は手法が異なる。北辺が大型の石材を用いて外面をほぼ垂直に立てるのに対して、東西辺は小型の石材を用い、傾斜をもって積み重ねている。最も良好に残存している東辺の南端近くでみると、長軸長20~30cmの石を最大で3段、45°ほどの傾斜で積み重ねている（写真図版32上右）。石は北辺のように平面をもつものではなく、丸味を残すのが用いられている。

3. 区画B

区画Bの構造

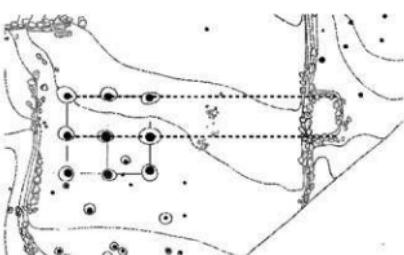
区画Bは区画Aの東辺に付設された方形の小型貼石遺構である。IV区の調査区南壁に近い位置で検出された。基底での規模は南北205cm×東西150cm、高さは40cmである。斜面には区画A東辺に使用されているものよりやや小さい石材を4段、急角度で積み重ねて貼石をしている。斜面は一面をなすもので、例えは階段状などにはなっていない。

上面には南北140cm×東西95cmほどの狭い平坦面が形成されている。断ち割りをおこなって観察したが、この平坦面から掘り込んだ遺構は認められなかった。また区画全体が一括の人工的な盛土で形成されていることが確認された。

区画Aとの関係を知るために区画Bの内部の盛土を除去したところ、区画Aの東辺にあたる2段積みの貼石が途切れることなく連続し、区画Bによって埋め殺されていることが判明した。よって、区画Aの貼石がいったん完成した後に、新たに区画Bが付加されたという前後関係が明らかである。ただし、その時間隔については明確に示し得ない。区画Aが作られた直後に区画Bが作られたとすれば時間差はほとんどなく、一連の遺構群とともに計画的に配置されたものと考えることも可能である。

区画Bの機能

区画Bは区画Aに付随する、わずか3m²の小さな突出部である。その区画内部に柱などの構造物を設けたり、土器などを埋置したりするものではない。機能としては、回縁された空間の内外を通じる出入り口や階段施設、正面表小などが想定しうるが、いずれにせよ一連の遺構群のなかで構造上の必然性があるものとは考えにくい。区画Aを中心とする回縁施設は、わずか40cm前後の高低差でもって区画の内外を区別するもので、大規模な溝や堀などで実際の人の出入りを規制するものではない。区画の西側は開放されて区画外と通じているし、北辺や東辺にしても階段が必要な



第45図 S B 03と区画Bの位置関係

ほどの高低差があるわけがない。したがって、実用的な機能をもつ施設とみる根拠は乏しく、むしろ遺構群全体からうかがえる祭祀施設としての性格に関係したもの可能性が高いと考えられる。

区画Bの位置をあらためて確認すると、掘立柱建物SB03との位置関係が注目される（第45図）。区画Bの北辺はSB03の北辺を延長した一直線上にあり、区画Bの南辺はSB03の棟筋と同様の位置関係にある。つまり、SB03の妻側の、向かって右側1間分を正確に延長したところに区画Bが位置していることになる。これはSB03と区画Bが密接な関係をもつことを示し、具体的には建物上層の扉位置と対応することが推定される。SB03は東西に棟筋をとる切妻妻入で、東辺の向かって右側に扉などの開口部施設があったと考えれば、区画Bはその扉の正面に配置された付施設とみることができる。

高床への昇降のために常設の木階が設置されていたかどうかは定かでない。少なくとも地表面に痕跡を残す形の遺構としては存在が確認されなかった。古代の倉庫型高床という性格からみて、可動式の梯子状のものであったと考えるのが適切であろう。仮に常設の木階があったとして、その傾斜勾配を45°とし、その下端（下端）が区画Bに近い位置まで及んでいたとすると、SB03の東辺柱列から区画B内北辺（区画A東辺）まで6.2mの距離があることから、SB03の床高が6mもの高さをもっていたことになる。これは通常の実用的な倉庫としては考えられない床高であるが、想定のひとつとして考慮しておく必要があろう。一方、現実的な想定として床高2m以下とすれば、仮に常設の木階があったとしてもそれほど長大なものではなく、下端から区画Bとの間に4mほど空間があったと復元される。

区画Bは、建物を囲む区画Aの内外を結ぶものであり、これは神社建築にみられる浜床が、神座のある殿上と階下を結ぶ境界空間としてあることと共通している。想像をたくましくすれば、この区画Bに立った人物がSB03に正対して何かを奏上する、あるいは何らかの所作をする姿が思い描かれる。

4. 建物群と方形貼石区画の正面観について

区画BがSB03に向き合うものとして述べてきたが、この想定はSB03の扉が東辺にあること、すなわち建物が東向きであることを前提としている。これは他の建物を含んだ遺構群の正面観を考える上で重要な問題である。他の可能性も否定できるものではなく、以下検討する。

南面、あるいは西面すると考えた場合、SB03の南側には木柱群があり、西側には石列2が近接しているため、やや不自然な印象がある。また北面すると考えた場合、区画Aとの位置関係において建物が西に寄りすぎていって、配置が無秩序となる。このように否定材料は消極的であり、決定的なものではない。

東向きが最も可能性が高いと考える根拠として、区画Bの存在以外に、区画A東辺に沿う柵列がある。東側木柱群の中に線上に並ぶ一列が含まれており、あたかも正面を遮蔽するようにたてられた柵状の構造をとる。木柱列（柵列）は区画Bのところで途切れている。

以上をまとめると、区画BはSB03に付随し、その正面に設けられた施設で、建物扉に正対する位置にある可能性が高い。区画Aの東側に建てられた柵状の施設はこの区画Bで途切れ、区画Bは区画Aの内外をつなぐものである。これを機能面からみれば「出入り口」であるが、その性格は実用的なものではなく、象徴的な表現であるか、あるいは何らかの儀礼行為に必要な空間の可能性もある。区画Aは実際に人の出入りを規制するような大がかりな圍繞施設ではなく、あくまで概念的な区画であり、区画Bもこれと同様に唯一の出入り口として象徴的にあらわされたものと考えられる。区画外から見れば、東側木柱群がこの部分で途切れており、SB03、特に向かって右側に位置する扉を直視することができるし、逆方向もまた可能である。こうした構造は、SB03を神社社殿と考える場合に神座の可視性を考える上で、また神座から何が見えるかを考える上で重要であろう。

5. 石列1・2・3、柵列1

石列1～3は人工的に石を並べて区画列となす遺構である。区画Aに付随するとみられるが、その機能が判然